

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第392集

こまつ
小松Ⅱ遺跡発掘調査報告書

一般県道釜石住田線クロスロード整備事業関連遺跡発掘調査

岩手県大船渡地方振興局
財岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

こまつ 小松Ⅱ遺跡発掘調査報告書

一般県道釜石住田線クロスロード整備事業関連遺跡発掘調査

序

豊かな自然に恵まれた岩手県には、縄文時代をはじめとする数多くの遺跡や重要な文化財が残されおりま
す。これら先人たちの創造してきた文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務で
あります。

一方では、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な施策であります。開発によって遺跡が消滅することは
まことに惜しいことではありますが、その反面、それまで間に包まれていた先人の営みに光明が当たるのも
事実であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、財團法人岩手県文化振興事業団
は、埋蔵文化財センター創設以来、岩手県教育委員会の指導と調節のもとに、開発によってやむを得ず消滅
する遺跡の緊急発掘を行い、記録保存する処置をとってきました。

本書は、気仙郡住田町上有住字小松地区の「新交流ネットワーク道路整備事業」の施行に伴い、平成12年
度に発掘調査を実施した小松Ⅱ遺跡の調査結果をまとめたものであります。

遺跡は、縄文時代の集落跡で、縄文時代後期や晩期末の竪穴住居跡や土坑が検出されています。気仙川下
流域は発掘調査が進んでおり、縄文時代の生活が解明しつつありますが、上中流においては発掘例が少なく、
貴重な資料となりうると確信しております。

本書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに、埋蔵文化財に対する关心と理解をいっそう深め
ることに役立つことを願う次第であります。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にご協力と援助を賜りました住田町教育委員会をはじめと
する関係機関、屋外・室内作業員など関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成14年2月

財團法人 岩手県文化振興事業団

理事長 村 上 勝 治

例 言

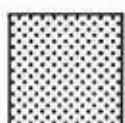
1. 本書は、一般県道釜石住田線クロスロード整備事業にかかる気仙郡住田町上有住字小松177に所在する小松II遺跡の発掘調査報告書である。本遺跡の岩手県遺跡台帳番号はN F 7-23で、略号はKM II-00となっている。
2. 発掘調査は平成12年4月9日から6月16日に実施され、室内整理は11月1日から1月31日まで行われた。調査面積は2000m²である。
3. 今回の発掘調査による成果の一部は、平成12年度の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書の「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報」で公表しているが、本書を正式な報告書とする。
4. 発掘調査及び整理は、吉田光・鳥居達人が担当した。
5. 執筆編集で、I 調査に至る経過は佐々木課長補佐、II IIIは鳥居、IV Vは吉田と鳥居が執筆し、編集は鳥居が担当した。
6. 航空写真・基準点測量及び鑑定業務は次の方々に依頼した。

航空写真 東邦航空株式会社

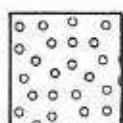
基準点測量 中井測量設計株式会社

石質鑑定 花崗岩研究会（代表矢内圭三）

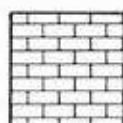
7. 本報告書挿図中に使用した土色表記は、農林省農林水産技術会議事務局作成、財團法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色貼」9版1989年によっている。
8. 本報告書の作成にあたり、住田町教育委員会の方々に協力・ご指導をいただいた。
9. 発掘調査による出土遺物及び記録資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。
10. 図版内にある略号等の凡例は以下の通りである。



焼土



炭化物



崖錐堆積物

S

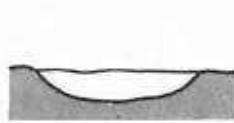
礫

P

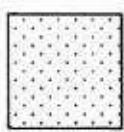
土器

◎

セクションポイント



検出面または地山



内里

推定線

目 次

序

例言

〔本 文〕

I 調査に至る経過	3
II 遺跡の立地と環境	3
1 遺跡の位置	3
2 遺跡周辺の地形・地質	3
3 遺跡の基本層序	5
4 周辺の遺跡	5
III 野外調査と整理の方法	8
1 野外調査	8
2 整理の方法	9
IV 検出遺構と出土遺物	15
1 竪穴住居跡	15
2 竪穴住居状遺構	21
3 土坑	31
4 焼土と柱穴状土坑	50
5 出土遺物	58
V まとめ	85
1 遺構	85
2 遺物	86

表1 周辺の遺跡	10	表3 土器観察表	81
表2 柱穴状土坑観察表	57	表4 石器観察表	84

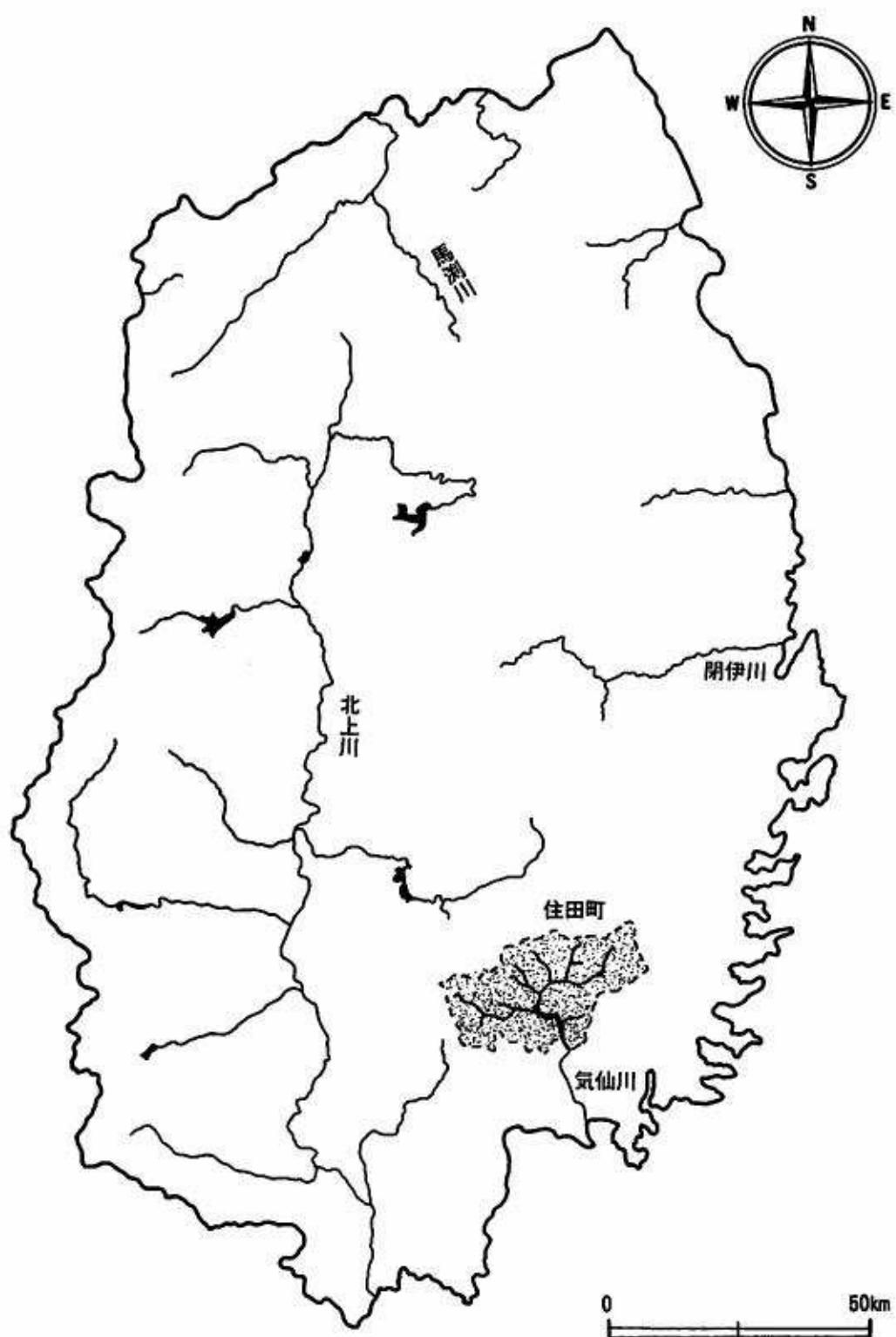
〔図 版〕

第1図 岩手県全図	1	第11図 3号竪穴住居跡	19
第2図 遺跡位置図	2	第12図 4号竪穴住居跡	22・23
第3図 地形区分図と地質図	4	第13図 1号竪穴住居状遺構	24
第4図 周辺の地形と調査区	6	第14図 2号竪穴住居状遺構	27
第5図 土層断面図と基本層序	7	第15図 3号竪穴住居状遺構	28
第6図 周辺の遺跡図	11	第16図 4・5号竪穴住居状遺構	29
第7図 グリッド設定図	13	第17図 6号竪穴住居状遺構	30
第8図 遺構配置図	13	第18図 1~3号土坑	33
第9図 1号竪穴住居跡	16	第19図 4~9号土坑	34
第10図 2号竪穴住居跡	18	第20図 10~14号土坑	39

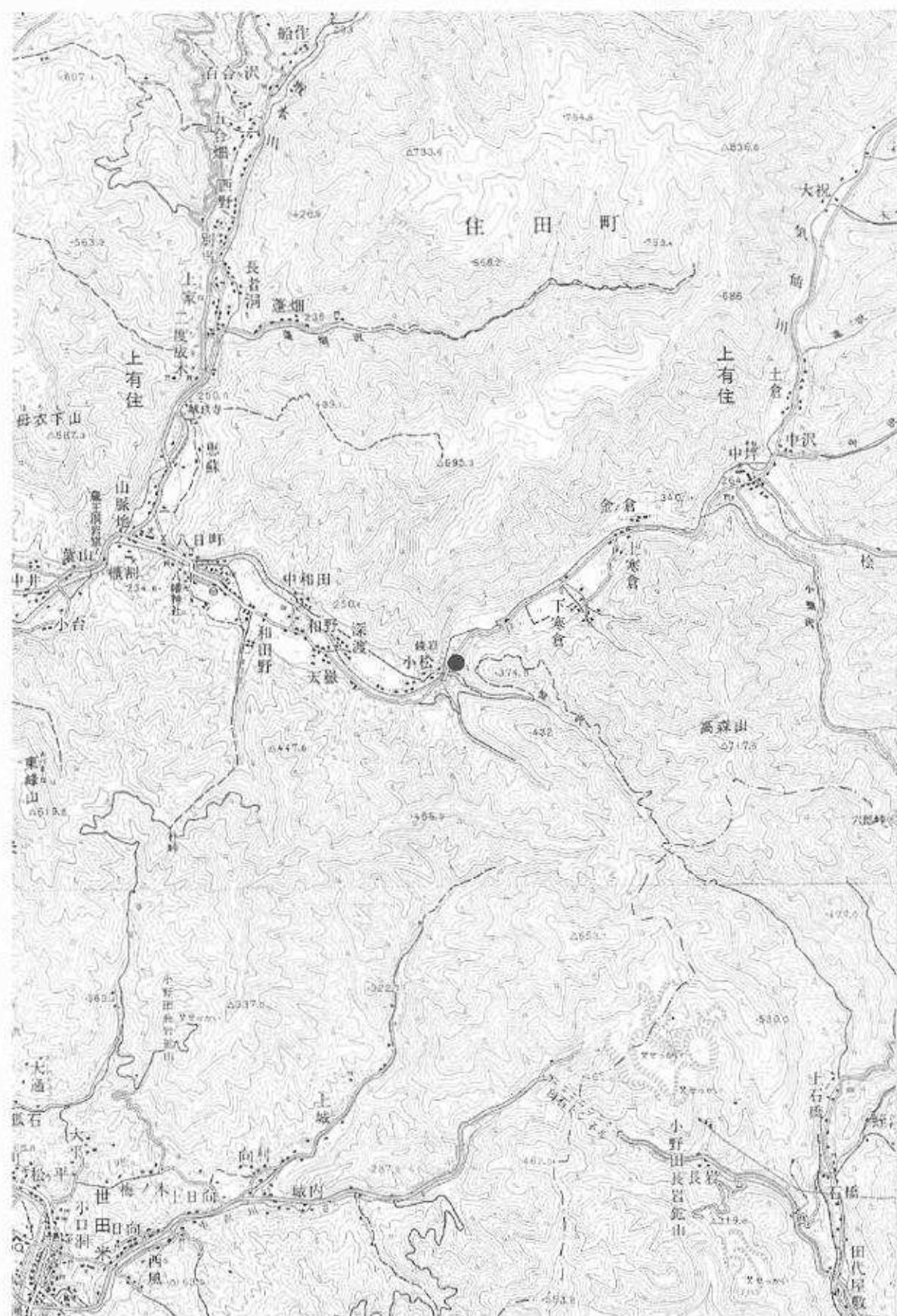
第21図	15~18号土坑	40	第35図	遺構内出土土器⑤	68
第22図	19~22号土坑	43	第36図	遺構内出土土器⑥	69
第23図	23~26号土坑	44	第37図	遺構内出土土器⑦	70
第24図	27~31号土坑	48	第38図	遺構内出土土器⑧	71
第25図	31~36号土坑・1号焼土	49	第39図	遺構内出土土器⑨	72
第26図	柱穴群1	52	第40図	遺構外出土土器①	73
第27図	柱穴群2	53	第41図	遺構外出土土器②	74
第28図	柱穴群3①	54	第42図	遺構外出土土器③	75
第29図	柱穴群3②	55	第43図	遺構外出土土器④	76
第30図	柱穴群4	56	第44図	遺構外出土土器⑤	77
第31図	遺構内出土土器①	64	第45図	遺構外出土土器⑥	78
第32図	遺構内出土土器②	65	第46図	遺構外出土土器⑦	79
第33図	遺構内出土土器③	66	第47図	出土石器	80
第34図	遺構内出土土器④	67			

[写真図版]

写真図版1	遺跡遠景	89	写真図版21	33~36号土坑	109
写真図版2	調査前後風景・作業状況	90	写真図版22	柱穴群1・SKP30	110
写真図版3	各区域土層状況	91	写真図版23	柱穴群2	111
写真図版4	1号竪穴住居跡	92	写真図版24	柱穴群3	112
写真図版5	2号竪穴住居跡	93	写真図版25	柱穴群4・1号焼土	113
写真図版6	3号竪穴住居跡	94	写真図版26	遺構内出土土器1	114
写真図版7	4号竪穴住居跡	95	写真図版27	遺構内出土土器2	115
写真図版8	1号竪穴住居状遺構	96	写真図版28	遺構内出土土器3	116
写真図版9	2号竪穴住居状遺構	97	写真図版29	遺構内出土土器4	117
写真図版10	3号竪穴住居状遺構	98	写真図版30	遺構内出土土器5	118
写真図版11	4・5号竪穴住居状遺構	99	写真図版31	遺構内出土土器6	119
写真図版12	6号竪穴住居状遺構	100	写真図版32	遺構内7遺構外出土土器1	120
写真図版13	1~4号土坑	101	写真図版33	遺構外出土土器2	121
写真図版14	5~8号土坑	102	写真図版34	遺構外出土土器3	122
写真図版15	9~12号土坑	103	写真図版35	遺構外出土土器4	123
写真図版16	13~16号土坑	104	写真図版36	遺構外出土土器5	124
写真図版17	17~20号土坑	105	写真図版37	遺構外出土土器6	125
写真図版18	21~24号土坑	106	写真図版38	遺構外出土土器7	126
写真図版19	25~28号土坑	107	写真図版39	遺構外出土土器8・石器	127
写真図版20	29~32号土坑	108			



第1図 岩手県全図



第2図 遺跡位置図

I 調査に至る経過

小松Ⅱ遺跡は、一般県道釜石住田線金ノ倉～山脈地工区クロスワード整備事業の施工に伴い、その事業区内に存する事から発掘調査を実施することになったものである。

本路線は、釜石市と住田町を結ぶ重要な道路であるとともに、滝観洞への観光道路としての役割も担っている。

本工区は、人家連担部の険路区間の解消を図るべく、平成3年度に事業に着手し、現在、事業の促進を図っているところである。

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の位置

遺跡のある気仙郡住田町は岩手県の南東部にあり、南に陸前高田市、北に遠野市と隣接する。町域の三方を山嶺に囲まれて険しい山々と谷が連なり、五葉山に発する有住川が上有住・上有住を西流し、これに種山高原に発する大股川が小股川をあわせ東流して世田米で合流し、気仙川となって広田湾に注ぐ。耕地や市街地はこの川沿いに開けているが、総面積の90%が山林原野でしめられている。

住田町はかつては産金地として知られ、近世には仙台藩と盛岡藩との藩境の地に位置し、交通の要所でもあった。現在でも、遠野・江刺・陸前高田・大船渡・釜石各市まで国道や県道が巡らされている。

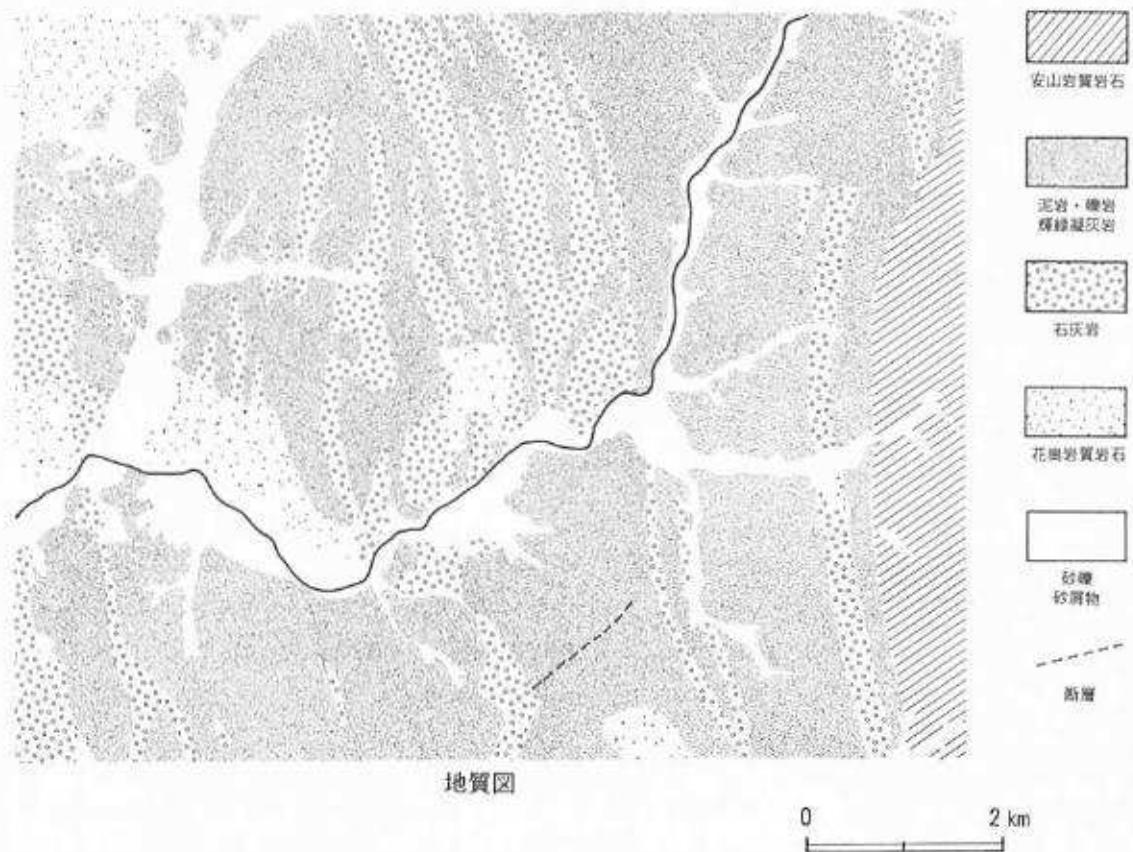
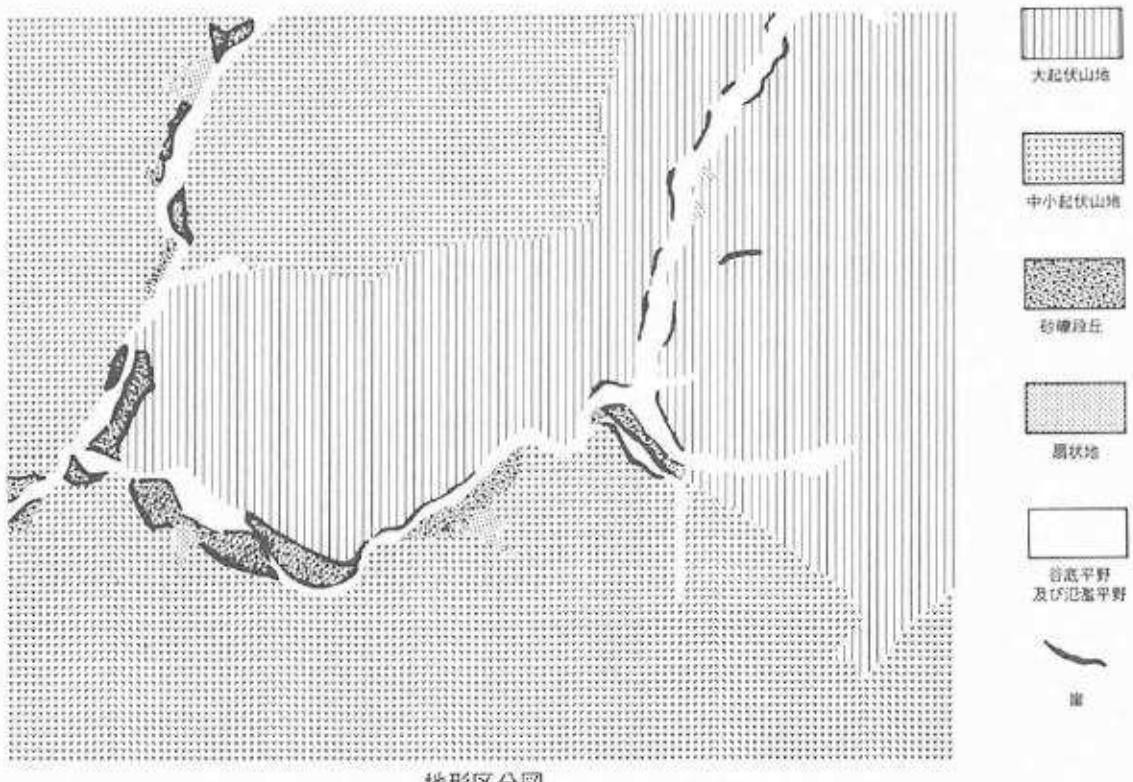
住田町上有住字小松177-1に小松Ⅱ遺跡はある。JR東日本上有住駅から南西に10kmほど離れ、商店街のある旧宿場町からは気仙川上流に2kmほどさかのぼった左岸にあり、気仙川河口からは34kmはなれている。遺跡の標高は204～205mで平坦であり、開墾によるものと思われる。気仙川からの比高は9m～10m前後である。

2 周辺の地形と地質

遺跡の北側前方から東側にかけて北上高地の準平原の尾鱗となっている大起伏山地が横たわる。五葉山を発する気仙川はこの山地を深く削りながら檜山川などの支流をあわせ、八日町付近で坂本川と合流する。長い間削られた山地は急な断崖を作り上げるが、それは小松付近において顕著にみられ、その範囲をみると気仙川が過去においていろいろと流路を変えていることが想像させる。また河川は人々の活動の場を作り上げる。土倉や中埠、八日町付近に低地、下寒倉や小松などに砂礫段丘が形成され、多くの遺跡のこの範囲の中に存在する。小松Ⅱ遺跡も下寒倉付近の扇状地地形の南隅に位置するが、気仙川の川幅が狭くなった地区に形成された段丘状の地形である。

第4図に周辺の地質図をあげた。この地域の基盤はいわゆる南部型古生層といわれる泥岩や輝緑凝灰岩を中心としている。この古生層は石灰岩の発達が著しい特色があり、図幅内であれば気仙川を縦に幾筋にも通っていることがわかる。これらの石灰岩はいくつかの鍾乳洞を作り出した。小松洞窟、藏王洞窟、気仙川の上流の滝観洞等である。所々に露出している花崗岩はいわゆる遠野花崗閃緑岩である。この岩石が発達している区域は準平原の地形を示すことが知られている。

さて、小松Ⅱ遺跡の周辺をみてみると、これらの岩石が複雑に分布していることがわかる。また遺跡背後には断層帯が通る。これらのことから地盤としては安定していないと推測される。実際小松Ⅱ遺跡は砂礫段



第3図 地形区分図と地質図

の上に載っているが、遺構には2から3mもの石灰岩が埋まっているものもある。先にも述べたが気仙川が急激に狭まった地形にもなっており、川原石なども遺跡内に散在している。

3 遺跡の基本層序

遺構内の埋土は、気仙川から供給された河川性堆積物と後背の山地を起源とする崖錐堆積物で構成されている。

B III・IVの東西断面で土層の堆積状況を見る。中央付近はI層耕作土直下にⅣb層（砂礫層）の高まりが見られ、この西側（現気仙川）はI層下位にVI層・VIIa層、東側（山体側）は全層が堆積している。この東側の山体沿いは、現気仙川の上流方向から旧河川跡と見られる凹地形が連続し、IIIa・b（黒褐色土）がよく発達している。VIIa層には最大数mに及ぶ崖錐堆積物が混入している。さらにV層（黒褐色土）でも崖錐堆積物が混入する。

VI層はⅣa層の漸位層と見られ、VIIa層が分布している場所には常に存在する。山体側ではこのVI層下位局所的にⅣ層中せり火山灰層が堆積している。中せり火山灰層は灰白色層下位に明黄褐色～黄褐色層常にセット関係で観察され、上位層が厚く固くしまっている。（20cmと数cm）

遺構内北側のA IV区の東西断面で土層の堆積状況を見る。山体側（東側）は凹地形を呈し、Ⅳb層を地山とするため、雨が降るたびに山体から浸透水が湧き出てくる。このため昭和40年代に重機で盛り土（II層）をして改良を行っている。現気仙川側はⅣa層を地山とする。A IV区全面にわたりその上位にV～I層が堆積している。II層はB区よりも厚く最大50cmである。山体側の一部でVII層中せり火山灰が検出されている。

遺跡中央付近は調査区外に5m越える崩落岩あるため狭窄し、遺跡を2分しているように見える。調査区外ではあるが、遺構や遺物の広がりを考えると、この範囲にも遺跡が広がっている可能性が高い。

4 周辺の遺跡

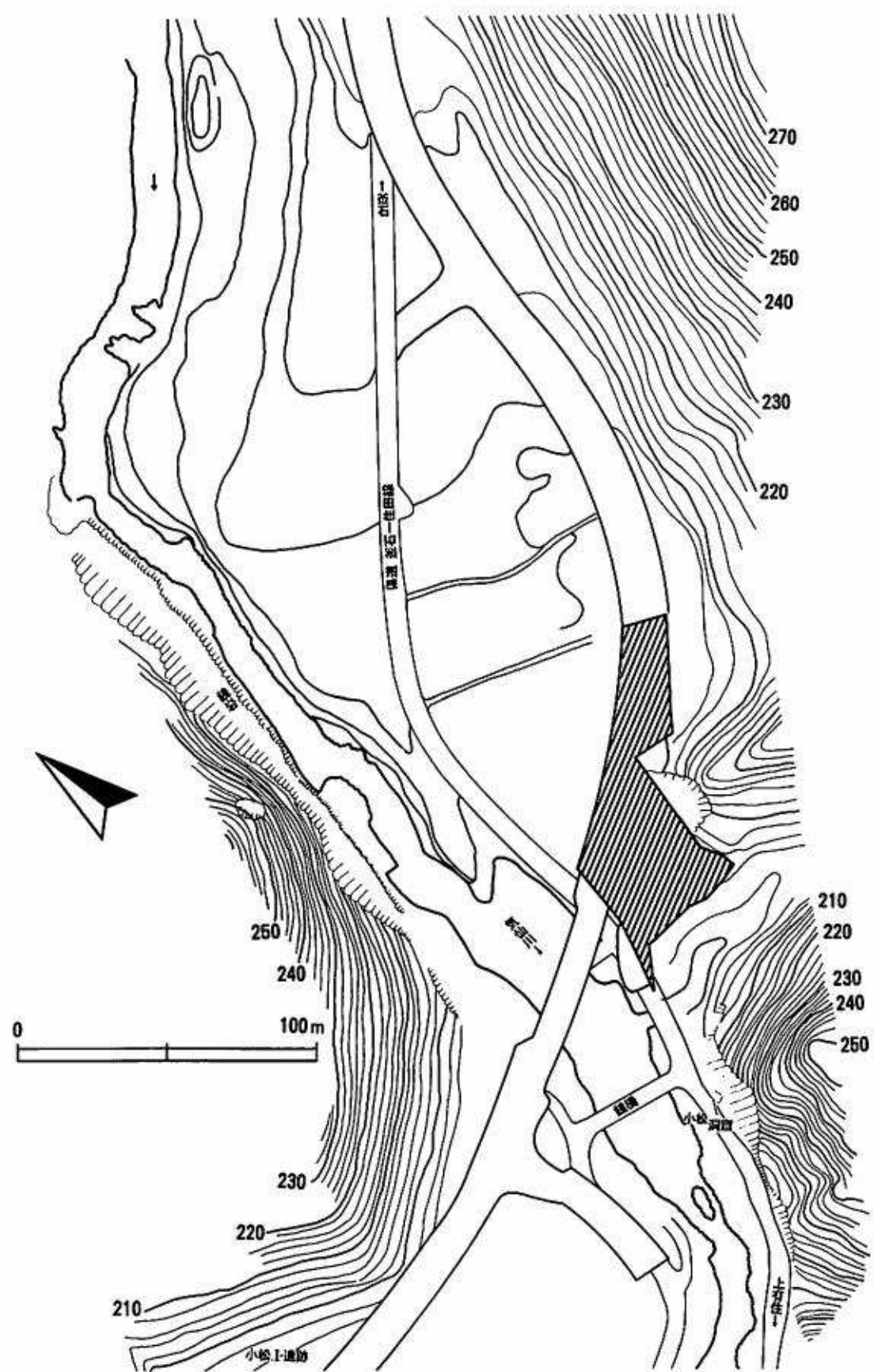
住田町のある気仙地方（大船渡市、陸前高田市、気仙郡三陸町・住田町）には縄文時代の遺跡が数多く知られている。特に貝塚の分布は、東京湾周辺、仙台湾周辺とともに密集地域の一つに上げられている。また、石灰岩洞窟を利用した洞窟遺跡も多いことも特色である。

これらの遺跡の研究は全国的にみても早くから行われていて、その成果は日本の縄文文化研究に大きな進展をもたらしてきた。その代表的なものに貝塚では大洞貝塚、洞窟遺跡では関谷洞窟遺跡（38）があげられる。大洞貝塚は縄文時代晚期の土器標式「大洞式」土器で著名であり、多くの報告書に紹介されている。

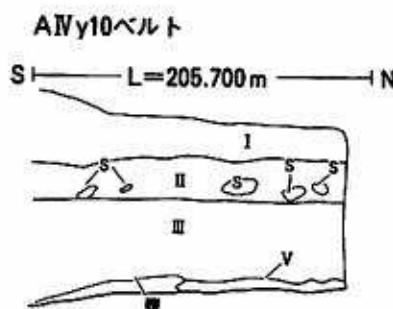
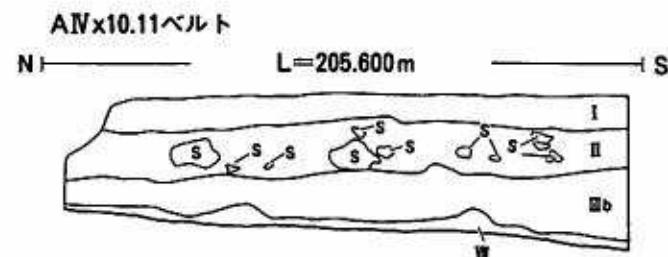
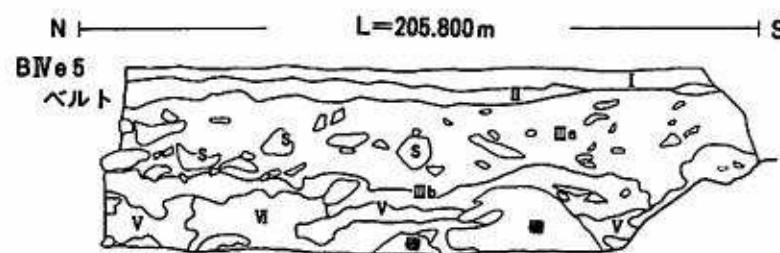
関谷洞窟は昭和43年に発掘調査が行われ、9層の文化面が確認された。最下層は早期中葉の貝殻文尖底土器で最上層は土師器・須恵器である。土器の編年はもちろんのこと洞窟遺跡の性格をつかむ上で貴重な遺跡である。

数々の発掘実績を持つ気仙地方の中で、住田町の気仙川流域は調査遺跡が少ない。5から36は昭和36年に住田町教育委員会によってまとめられた「住田の遺跡」からの抜粋である。この報告書は当時の上有住小学校の根来功範氏が県教育委員会に調査を依頼され、休日を利用して町内各地を歩き回って調べ上げた貴重な資料である。これをみると上有住・下有住の気仙川沿いに多くの遺跡が眠っており、それは後期から晩期の土器を出土させるものが多い。特に13の長者洞遺跡からは土偶のほぼ完形が出土しており、根来氏も比較的重要と思われる散布地のひとつにあげている。

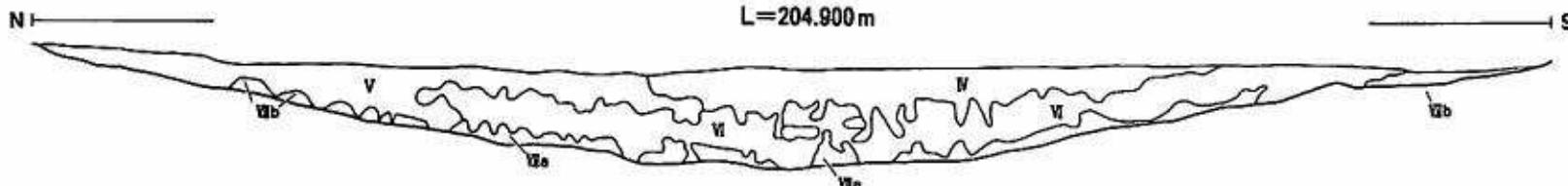
近年、県道住田一釜石線の道路改良工事などの原因で発掘調査が行われ、遺跡の分布状況が明らかにされ



第4図 周辺の地形と調査区



BMg・h1ベルト



層位	層厚(cm)	色調等
I	30	7.5YR2/1黒色シルト 崩壊含む ややしまる
II	0~30	10YR3/3暗褐色砂礫(平均数cmの亜角~角礫) しまる
III a	0~50	7.5YR3/1黒褐色シルト 下部に多量の崩壊礫(最大径数m 平均径数十cm亜角礫) ややしまる
III b	10~30	7.5YR2/2黒褐色粘土質シルト ややしまる 縄文晩期~弥生初頭の遺構検出面・包含層
Nb		
IV a	0~20	10YR3/2黒褐色粘土質シルトと4/4褐色シルト(50%) 混合土炭化物片含む ややしまる
IV b	20~30	7.5YR3/2黒褐色小礫(10mm大の亜円礫) 混じりの砂質シルト 炭化物片含む ややしまる
V	0~30	5 YR3/1 黒褐色シルト 炭化物片含む ややしまる 崩壊含む 縄文中期~後期初頭遺物包含層
VI	10	7.5YR2/2黒褐色シルト質粘土と4/4褐色粘土(30%) の混合土 ややしまる 縄文前期遺物包含層
VII	20	中せり火山灰
VII a	0~	褐色砂質粘土 縄文前期遺構検出面
VII b	0~	段丘礫

つつある。4の中和田遺跡は、平成11年度に岩手県文化振興事業団が発掘調査した新しい遺跡で、前期初頭の住居跡が検出されているが、土器は早期から後期、また弥生前半と出土している。2の小松Ⅰ遺跡では早期の住居跡と前期初頭の住居跡が検出されているが、砂礫が深く堆積し、その下に中せり火山灰が確認できる。これらのことから上記の後期・晩期の土器片が出土する遺跡でも早期から前期の遺構が検出される可能性もある。

岩手県でも数少ない洞窟遺跡の発掘例がこの気仙川沿いに2例ある。前に触れた関谷洞窟のように長い間の累積した資料は得られていないが、3の小松洞窟では早期の生活跡である焼土遺構が検出された。その出土土器は、小松Ⅰ・Ⅱ遺跡出土土器と時代が重なり注目される。また蔵王洞窟19では岩手県でもっとも古い押型文土器が最下層から出土している。蛇王洞Ⅱ式土器など近辺の遺跡と異なった特色を持つこの洞窟と近隣の遺跡がどうか関わってくるかも注目されるところである。

最後に小松Ⅱ遺跡南東側に当たる、盛川の支流鷹生川沿いの遺跡に触れる。この河川は気仙川と同じ五葉山に発するものであり、支流には発掘調査が行われている遺跡がある。

42の上鷹生遺跡と45の上甲子遺跡は平成3年から4年にかけて岩手県文化振興事業団によって発掘調査された。この2つの遺跡は後期の住居跡や晩期から弥生の住居跡が検出されたこと、出土土器の時代構成が後期から晩期を主体とすること、標高がどちらも200m前後であることなど本遺跡の特色を語る上での参考となる資料である。

また、上鷹生遺跡では南方系の土器（天王山式）や北海道系の土器（後北式）が出土するなど、弥生時代後期から末期の人々の暮らしの痕跡が残る点でも類似する。

III 野外調査と整理の方法

1 野外調査の方法

(1) グリッドの設定

小松Ⅱ遺跡の北西方向に小松Ⅰ遺跡がある。そこで2つの遺跡を囲むように南北200m、東西400mに区画し大グリッドを設定した。そして、平面直角座標（第X系）に合わせ、南北を100mずつA・Bの2つに分け、東西をIからIVの4つに分けた。その大グリッドを4mずつの小グリッドに分けて北西隅から南にaからy、東に1から25に分けた。北西隅のグリッドはA I a 1、南東隅のグリッドはB IV y 25と呼称することとした。

基準点は2箇所、補助点は2点設営した。その成果値は以下の通りである。

基準点	X座標	Y座標	Z座標（標高）
基1	-90250.000	68250.000	205.302
基2	-90234.000	68300.000	205.532

(2) 粗掘りと精査

まずは土層と遺物の有無の確認のために、トレンチを入れた。その際、土器の出土状況を知るためにグリッドをはずさないように心がけた。調査区の西側が表土が浅く、遺構も確認されないことから西側隅から重機を入れ表土剥ぎを行った。

検出は鋤籠で丁寧に剥いだ後に移植べらを使って行ったが、山体側は崩落による巨大な石灰岩が遺構を覆っていると考えたためにハンマーで石を破壊した後に検出している。

精査は基本的には竪穴住居跡は4分法、土坑等は2分法による覆土の観察を行ったが、広がりを持つ大型住居や重複関係にある遺構等は適宜ベルトを設定した。遺構は、土層断面および平面を写真撮影と実測で記録しながら調査した。

遺構番号は遺構種別毎の検出順に連番としている。精査の課程で欠番となったものは本文に明記している。遺物の取り上げは、遺構外出土のものはグリッド単位で層位を記入し、遺構内では可能な限り平面図に載せ、レベルを入れて取り上げた。グリッド位置が明確でないものや堆土から出土したものはその区域名（大グリッド名）となっているものもある。

(3) 遺構の記録

遺構の呼称は以下の通りである。

竪穴住居跡及び住居状遺構	S I	土坑	S K
柱穴状土坑	S K P	焼土	S R

断面図の作成は、遺構の上面に水平の水糸を張って基点を設定して行い、平面図では基本的に地表面に直角座標系の軸線を合わせて基線とする測量法によって実測したが、デジタルカメラによる実測も併せて実施した。縮尺については20分の1を原則にしたが、範囲に応じて対応した。

写真では精査の段階において撮影を行った。使ったカメラは35mmモノクロ、カラーリバーサル、6×7cm判（モノクロ）である。また、調査終了後に空中写真撮影を行っている。

2 整理の方法

(1) 遺構図面

遺構図面は点検・修正の後、必要に応じて第2原図を作成した。挿図中の縮尺は40分の1を基本にしているが、任意の縮尺についてはスケールに付してある。なお、使用したスクリーン・トーンは凡例の通りである。

土層注記は基本層位にローマ数字を、遺構の埋土にはアラビア数字を用いた。攪乱はKで表示している。

精査の課程あるいは整理段階において欠番になったものや変更になった遺構もある。それらは本文で示しているが、遺物の整理の関係から旧名を（ ）で明記している。各の記載順は遺構検出順であり、時期では区別していない。

(2) 遺物の処理

出土した土器・石器などの遺物は、水洗い・記名の後、出土状況に合わせて仕分けをし、接合復元の作業を実施した。復元できた土器は遺構内外問わずなるべく掲載するように心がけた。そして、写真撮影を行い実測図・拓影図を作成し、トレースして報告書に掲載した。

(3) 遺物図版

遺構内出土遺物は遺構順に、遺構外出土遺物は種類別に掲載した。挿図中の遺物の縮尺は3分の1を基本にしているが、任意の縮尺についてはスケールを付している。

また、石器など図化の必要性のないと判断したものは写真図版のみとなっている。

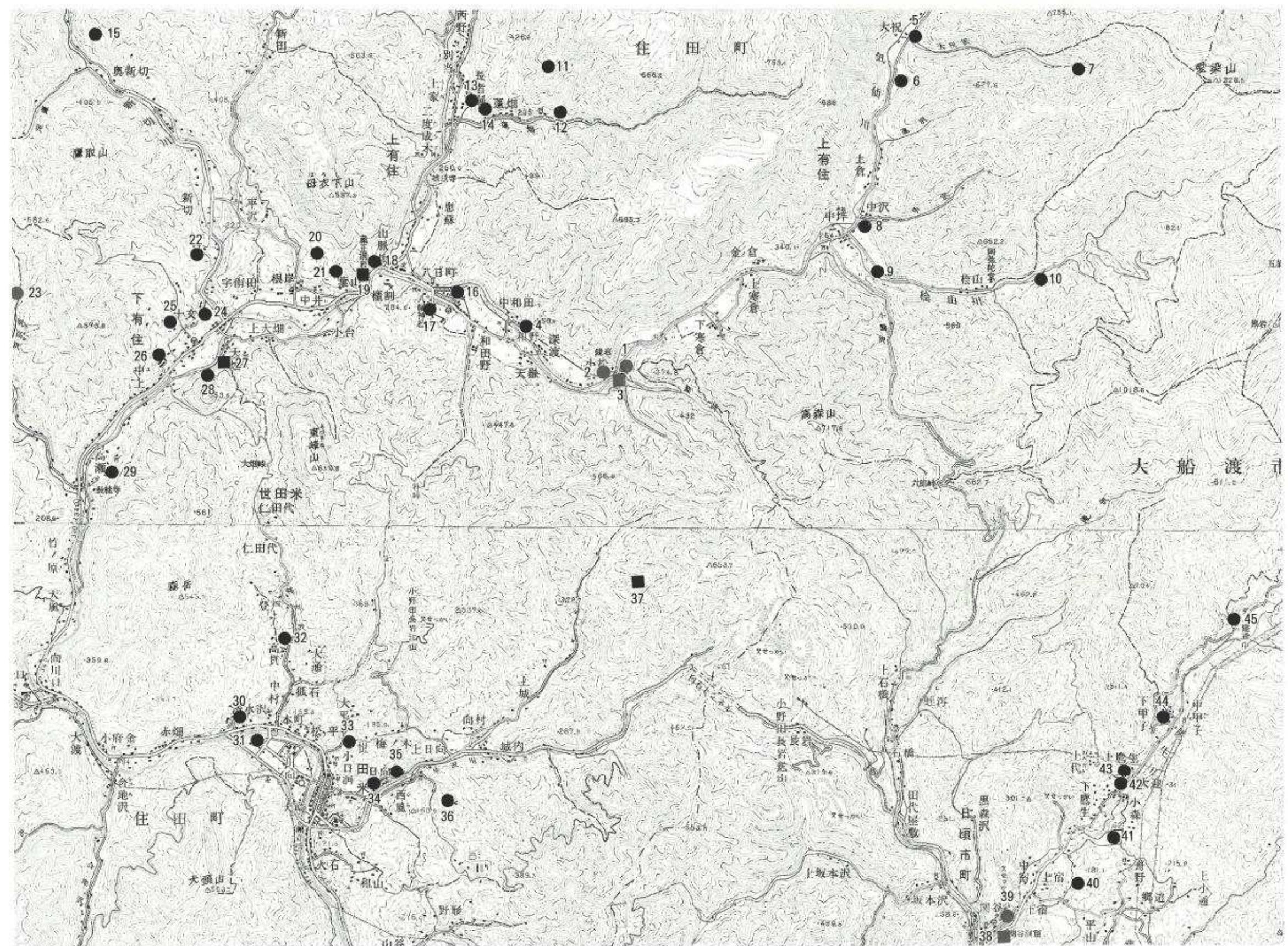
実測図の表現方法と計測値の推定など表示方法は凡例の通りである。

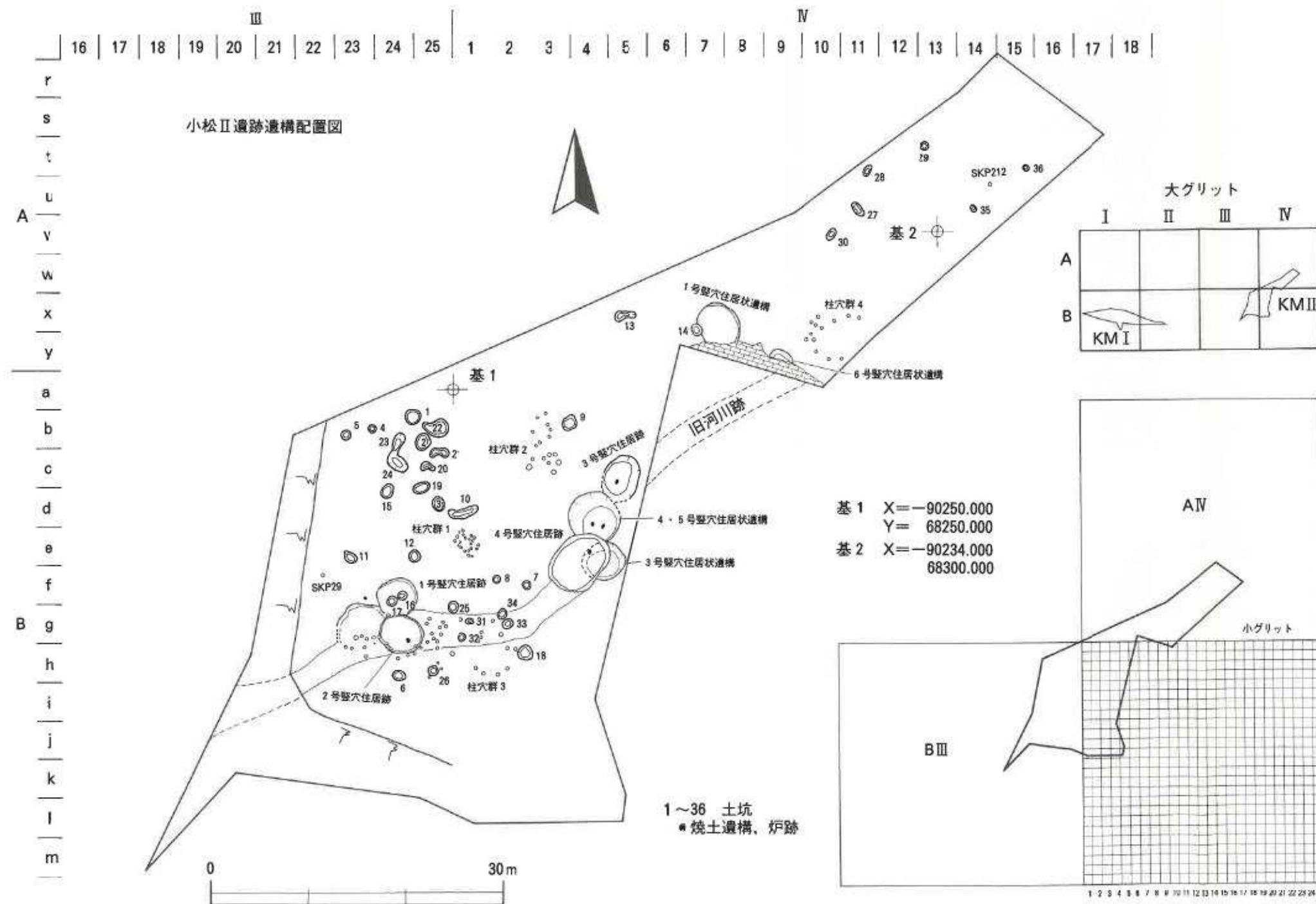
(4) 写真図版

遺構写真は、各遺構の平面断面を中心に、竪穴住居跡は地床炉（焼土）・遺物出土状況も合わせて掲載した。遺物写真は立体土器は4分の1、土器破片や石器は2分の1を基本にしており、縮尺を明記している。

No	遺跡名	種別	遺跡の性格・遺構・遺物	報告書
1	小松Ⅱ	集落跡	報告遺跡	
2	小松Ⅰ	集落跡	早期中葉から前期初頭住居跡 平成12・13年度発掘調査	
3	小松洞窟	洞窟	早期焼土遺構 繩文・弥生土器 早期骨角器 動植物遺存体 平成7~10年調査	C
4	中和田	集落跡	前期竪穴住居跡 早・前・後・晚期土器 弥生土器 平成11年発掘調査	A 355集
5	大祝	散布地	後・晚期	B
6	大祝平	散布地	後・晚期	B
7	長畑	散布地	後期 洞窟の存在	B
8	中坪Ⅰ	散布地	後・晚期 大洞C1式土器	B
9	中坪Ⅱ	散布地	後・晚期	B
10	檜山	散布地	後期	B
11	奥土倉	散布地	後期 消滅	B
12	蓬畑	散布地	後期 消滅	B
13	長者洞	散布地	後・晚期 大洞C2式土器 独鉛石 土偶	B
14	上家	散布地	後期	B
15	梨ノ木洞	散布地	前期 尖頭器 石匙	B
16	八日町裏	散布地	後・晚期	B
17	八日町	散布地	後期	B
18	御殿平	散布地	後・晚期 環状石斧 藏王洞窟の上段の遺跡	B
19	藏王洞窟	洞窟	早期 蛇王洞Ⅱ式土器・骨角器・歯骨 昭和39年度発掘調査	D
20	中井	散布地	中・後期	B
21	沢田	散布地	後期	B
22	羽穴	散布地	後期?	B
23	尻高沢	散布地	後・晚期 土師器	B
24	十文字	散布地	後期	B
25	苗代沢	散布地	中期	B
26	中上	散布地	後・晚期 石匙 磨製石斧	B
27	音ノ下	散布地	後期	B
28	音岩洞窟	洞窟	後・晚期 奥に向かって下がる。	B
29	下清水	散布地	後期	B
30	赤畑	散布地	前?・中・後期	B
31	川向	散布地	後期	B
32	浄福寺	散布地	後期	B
33	小口洞	散布地	後・晚期	B
34	下日向	散布地	後期	B
35	上日向	散布地	後・晚期	B
36	杉山	散布地	後・晚期	B
37	湧清水洞窟	洞窟	早・前・後期 弥生・中世 27体の後期埋葬人骨	B
38	関谷洞窟	洞窟	繩文土器・弥生土器・土師器・須恵器など 県指定史跡 昭和43年発掘調査	E
39	関谷	散布地	後・晚期	F
40	上宿	散布地	後・晚期	F
41	大野林Ⅰ	散布地	後・晚期	F
42	上鷹生	集落跡	後期竪穴住居跡13棟 晚期竪穴住居跡4棟 弥生土器 北海道系土器	A 253集
43	鷹生	集落跡		F
44	下甲子Ⅲ	散布地		F
45	上甲子	集落跡	後期中葉竪穴住居跡5棟 晩期末葉から弥生時代初頭竪穴住居跡6棟	A 254集
参考資料		A	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター発行報告書	
		B	住田町教育委員会発行【住田の遺跡】1964年から抜粋	
		C	岩手県立博物館発行報告書	
		D	石器時代1965 芹沢長介 林謙作	
		E	縄文時代の気仙 大船渡市立博物館	
		F	上鷹生遺跡発掘調査報告書による	

表1 周辺の遺跡表





第7図 グリット設定図

第7図 グリット設定図

第8図 小松II遺跡遺構配置図

V 検出遺構と出土遺物

調査の概要

検出遺構は、竪穴住居跡4棟、竪穴住居状遺構6基、土坑36基、柱穴状土坑90基、焼土遺構1基である。精査・整理の結果、登録を抹消したものは以下の通りであり欠番となっている。

竪穴住居跡（S I）01・02・05・07・09・10・11・14・15

土坑（S K）01・04・07・13・14・16・20・32・39・40

また、竪穴住居跡から竪穴住居状遺構に変更した番号は以下の通りである。

06・13・16・17・18

そしてSK47土坑は6号竪穴住居状遺構に変更した。

住居跡であるかないかは、炉跡や焼土遺構があるかないかが大きな判断基準となっているが、詳細は各遺構で説明する。

柱穴状土坑（S K P）は検出順に連番で登録しているが、精査の混乱を避けるために欠番が多く生じている。後述するのでここでは触れない。

1 竪穴住居跡

縄文時代の竪穴住居跡4棟が検出された。前期前葉と思われるもの1棟、中期末葉に属するもの1棟、晩期末葉からや弥生時代初頭に属するもの1棟と詳細な時期不明なもの1棟である。調査区南西側の埋没した旧河道沿いに広がる傾向があり、中期末葉の1棟は直径2~3mもの石灰岩に埋もれる。

1号竪穴住居跡（S I 03） 第9・31図 写真図版4・26

遺構

〈位置〉 調査区南西側グリッドB III f 24

〈検出状況〉 耕作土I層を剥いだ後、Ⅳ層精査中に暗褐色土のプランを検出。埋土断面から壇状の立ち上がりを確認した。

〈重複関係〉 南側で壇の一部がS I 04に切られる。また床面を晚期土坑（SK23・24）が切る。

〈規模・平面形〉 長軸4m08cm、短軸3m38cmで平面形は略円形

〈埋土〉 北側にⅣ層暗褐色土、南側に晚期の包含層Ⅲ層が載る。

〈壁〉 北側で5cm程の残りがあるものの、ほぼ全面削平を受ける。東南埋土ベルトの東側に残る壁はゆるやかに立ち上がる。

〈床面〉 北側でよくしまる。南側に緩やかに傾斜している。貼床は確認なし。

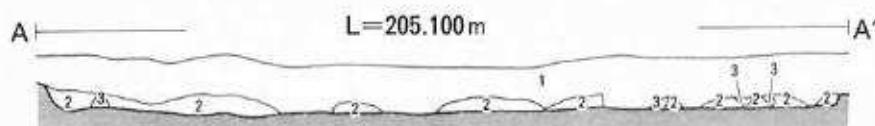
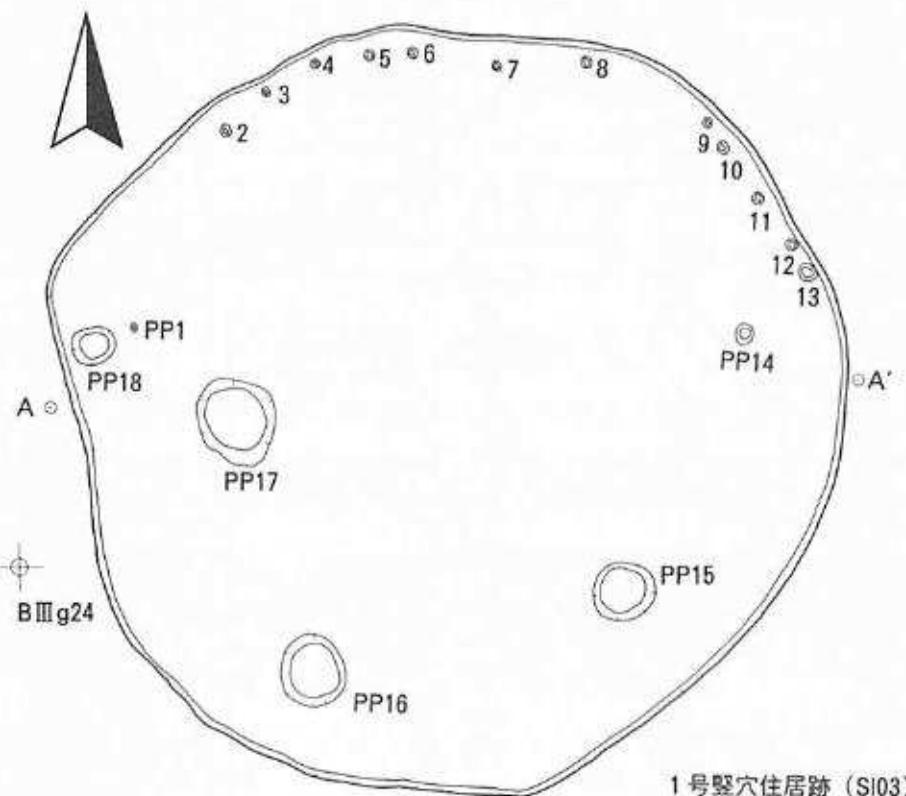
〈柱穴〉 北側に径5~12cm程の壁柱穴が、また床面からは径30~40cmの主柱穴と思われる柱穴が3基確認された。

〈炉・焼土〉 炉はない。西側約1mにS R01があり屋外炉の可能性も否定できない。

遺物

出土遺物は少ない。SK23・24の遺物が床面に出土するために時期差がある。ここでは、埋土1層出土の4点の土器を取り上げた。

1~2は深鉢の破片で、前期前葉に相当する纖維を含む土器片、3はSK23・24に伴うものであろうか



SI03竖穴住居跡 E-W
 1 10YR2/3 黒褐色砂質シルト 粘性なし しまりあり 小礫、莖円1%含む(Ⅰ層)
 2 10YR3/4 錐褐色砂質シルト 粘性ややあり 固くしまる
 3 10YR5/8 黄褐色砂 粘性なし しまりややあり

PP	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
口径cm	6.6	9.5	7	4.5	5.4	12	6.5	5	9.5	7	7.5	12.5	10	12	33×30	38×32	47×41	22
深さcm	10.2	14.8	12.5	4.5	13.4	13	9.3	14.2	7.8	14.3	10.9	9.3		15	5.7	11	6.4	7
備考																		



第9図 1号竖穴住居跡

時期

上記の3・4の遺物は床面に重複する集石土坑の埋土から流れ込んだものと判断する。埋土状況から縄文時代前期前葉の遺構と思われる。

2号竪穴住居跡(S I 04) 第10・31図 写真図版5・26

遺構

〈位置〉 調査区南西側グリッドB III g・h 24

〈検出状況〉 トレンチ掘りで、黒褐色シルト(Ⅲ層)中から土器が出土し、炉も検出したことから住居跡と登録した。

〈重複関係〉 北側でS I 03の南壁を切る。また西側でSK I 13を切る。

〈規模・平面形〉 長軸推定4m 80cm~5m、短軸4m 10cmで平面形は梢円形を呈すと思われる。主軸方位はE-40°-S

〈埋土〉 黒褐色シルトを中心とし、下位に暗褐色シルトが入る自然堆積である。

〈壁〉 V層をほりこんでいる。上部は判別できないが緩やかに立ち上がる。残る壁高は北側で5~8cm、南壁で14~18cmである。

〈床〉 ややしまる程度で、貼り床の痕跡はない。

〈柱穴〉 床面を下げて精査したが検出できなかった。

〈炉・焼土〉 床面のほぼ中央部に位置する。焼成を受けている周囲に礫の抜き取り痕状のくぼみが観察され、石囲い炉の可能性がある。断面の埋土4・5層は掘りすぎであり、基本層のVI層にあたる。

また、焼土の上部に立ち石状の礫がある。

遺物

出土遺物は少なく、深鉢の破片のみの出土である。5・6は床面をやや下げた際に出土した土器片である。

遺構の埋土出土として信憑性のある7・8・9・11は中期から後期にかけての土器である。

時期

遺構はV層をほりこんでおり、出土遺物からも縄文時代中期~後期の遺構として差し支えないであろう。

3号竪穴住居跡(S I 08) 第11・31~33図 写真図版6・26・27

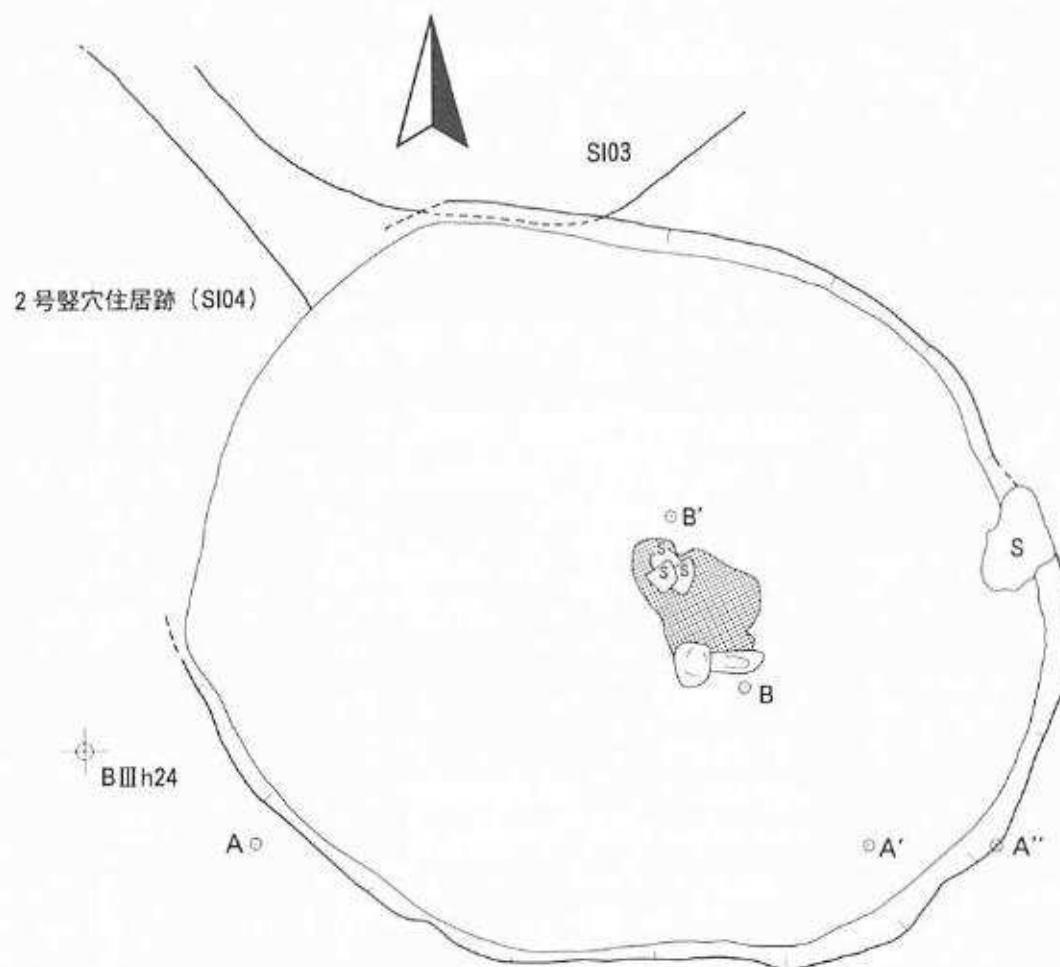
遺構

〈位置〉 B IV d 05・e 05に跨いで広がる。

〈検出状況〉 山裾の表土下に最大数mの崩落岩(石灰岩)を含む黒褐色土層を検出した。本層には縄文時代晩期から弥生時代初頭の土器片を多量に含み、石灰岩の周囲及び直下からも出土した。ベルト断面中位付近に乱れた小規模な焼土断面が観察され、同時期の遺構を検出する可能性もあったが、人力による石灰岩の除去作業が困難を極め、岩を抜き取った跡の凸凹が大きくプランを確定できなかった。この黒褐色土を掘り抜き、暗褐色土に変わった頃から縄文時代中期に属する土器片が出土し始め、黄褐色の地山に変わる少し手前で焼土を検出し、S I 08竪穴住居跡と認定した。

〈規模・平面形〉 南北方向に長軸を持つ梢円形状を呈し、規模は約4.5×3.5mである。

〈埋土〉 南北ベルト断面では8層に区分している。1層目は後背の山体から崖錐堆積物が入り込み、攪乱

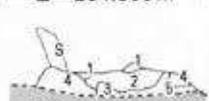


A ————— L = 205.000 m ————— A' ————— A''



SI04竖穴住居跡 (A-A')
 1 10YR2/2 黒褐色砂質シルト 粘性なし しまりややあり (I層)
 2 10YR2/3 黒褐色シルト しまりなし 土器片含む
 3 10YR3/4 踏褐色シルト 粘性ややあり しまりややあり
 4 10YR4/4 踏褐色砂質シルト しまりあり
 5 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性あり しまりあり

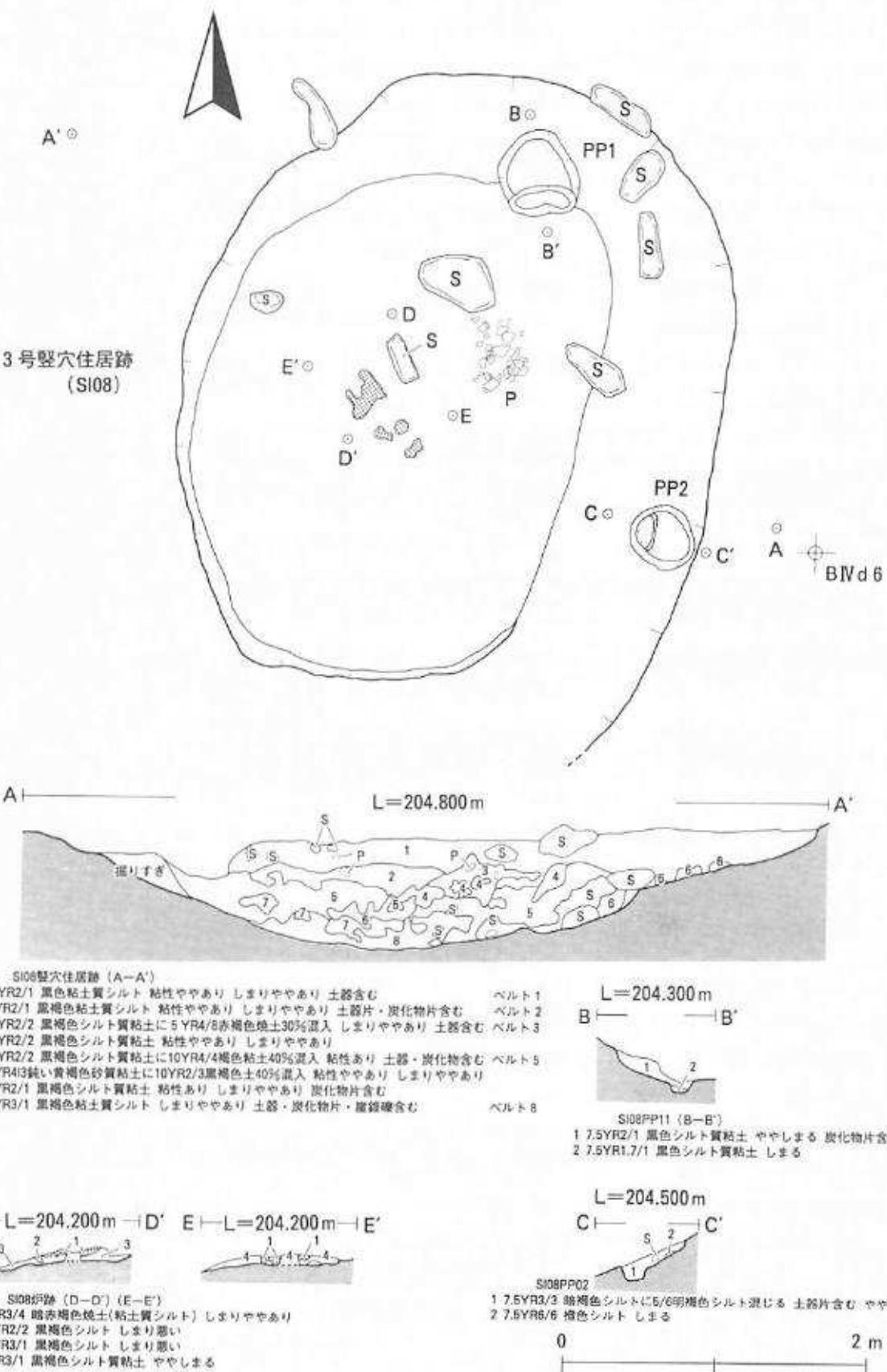
B ————— L = 204.500 m ————— B'



SI04炉跡 (B-B')
 1 5 YR4/8 赤褐色焼土 粘性ややあり しまりあり
 2 10YR3/4 雜褐色シルト 粘性ややあり しまりあり
 3 5 YR4/8赤褐色焼土と10YR2/3黒褐色シルトとの混合土 粘性なし しまりあり
 4 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性なし しまりなし
 5 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性あり しまりあり

0 2 m

第10図 2号竖穴住居跡



第11図 3号竖穴住居跡

を受けていると考えられる。黒褐色土が主体で、中位に黄褐色粘土層が混入する。この中層は全体の埋土状況から人為的堆積土と考えられる。遺物は上部層と床面付近で出土している。

〈壁〉 東側は山体の裾を利用しながら、3方向を掘り込んでいる。いずれも緩やかに立ち上がる。残存する壁高は、北壁52cm、南壁4cm、西壁14cm、東壁37cmであるが、南壁は判別できぬく、上部を掘りすぎていると見られる。

〈床面〉 ややしまる程度である。北側はやや掘りすぎている。

〈柱穴〉 北側と東側の壁付近に2基検出している。ともに主柱穴と考えられる。底面はさらに中心部に小規模な掘り込みがあり、柱が住居中心側に向かって斜めに設置されていたように見える。規模はPP1が約55×50cm、PP2が45×40cm、深さは最大約13cmである。

〈炉・焼土〉 床面中心付近で地床炉4基検出している。このうち規模の大きいものは北東-南西方向に長軸を持つ不定形で、約25×24cm、厚さは最大6cmである。

〈その他〉 床面や山体側壁で大小の扁平な碟を検出している。大きいもので約55×35×8cmである。後背の山体起源のものである。

遺物

地床炉の周辺で一括土器を検出している。(13・14) それらは中期末葉の土器である。遺構の埋土上層部からは縄文時代後期から弥生時代の土器片も出土している。(17~23)

時期

出土遺物や土層断面などから縄文時代中期末葉の遺構と考えられる。

4号竪穴住居跡(S-I 12) 第12・33~36図 写真図版7・27~29

遺構

〈位置〉 調査区南側グリッドB IV d・c・03・04

〈検出状況〉 III層の検出時にはプランが立たなかつたが、土器が多く出土することからベルトを残して精査を開始し(この時点では、黒褐色土が検出面となるいわゆる黒の中の黒であると判断していた)、壁状の立ち上がりや焼土を確認し、住居跡とした。

〈重複関係〉 床面下にSK I 16があり、当遺構の床面はSK I 16の埋土となる。

〈規模・平面形〉 長軸6m80cm 短軸5m15cmで平面形は略楕円形である。床面積は22.2m²。主軸方位はN-45°-E。

〈埋土〉 III層のしまりのある黒褐色シルトを中心であるが、遺構の南側に粘性のある褐色シルトが覆う。このシルトは固くしまるために、当初はIV層と判断し、壁とするプランを立てた。しかし、下位からIII層と同時期の土器が出土することから人為的堆積土であると考え、掘り進めている。また、山体側には崖錐が堆積しており、土器がつぶされて出土している。

〈壁〉 北壁及び西壁は緩やかに立ち上がる。特に西壁は階段状になり、幅の狭いテラスが形成されているかのようである。対照的に東壁と南壁は鋭く立ち上がる。壁高の平均値は北壁で20cm、南壁で24cm、東壁で18cmである。

〈床面〉 北側はややしまる程度である。南側は、掘りすぎているようで判然としない。

〈柱穴〉 7基検出している。黒褐色シルトの埋土を持つPP2・PP3・PP4・PP7が主柱穴を構成する可能性がある。そのうちPP2は深さ約50cmあり、太さは直径12~14cmで碟で支えていたと推定する。

〈炉・焼土〉主軸の北東寄り、北壁から1m離れた位置に地床炉を検出した。規模は60×52cm。断面形でみると焼成を受けている部分がピーカー形であり、また炭化物を多く含んでいることが観察される。この事から土器埋設炉であった可能性がある。

〈付属施設〉北東隅に疊で開まれた施設が検出された。屋外から配石され、やや下がった床面は固くしまる。この事から出入り口ではないかと推定する。

遺物

土器は浅鉢を中心に小型の壺、深鉢などが出土しているが、埋土の上位に崩落した岩石、人為的堆積土があり、床面もはっきりせず、北東側で重複もあることから出土土器には時期差がある。しかし圧倒的に縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭にかけての浅鉢（33～41）が多数を占め、44～56のような壺形土器も多い。土製品では土偶の頭部（57）も出土している。

時期

出土遺物から縄文時代晩期末から弥生時代初頭に属すると考える。

2 壁穴住居状遺構

住居状のプランである遺構の中で

- 炉跡もしくは焼土が検出されない
- 柱穴が検出されないもしくは不規則である
- 壁の立ち上がりを確認できない

遺構を壁穴住居状遺構とした。

住居状遺構は縄文時代前期前葉に属するもの2基、縄文時代中期から後期に属するもの3基、不明のもの1基の計6基検出されている。そのうちの5基は調査区南側の壁穴住居跡周辺に、前期前葉の1基は北側に位置する。すべて埋没した旧沢跡に沿って確認された。中には3m以上の巨疊に埋まっているもの（SK19）もある。

1号壁穴住居状遺構（S106）第13・36～37図 写真図版8・29

遺構

〈位置〉B IV x・y 8・9に跨いで広がる。

〈検出状況・重複関係〉Ⅲ層黒褐色土層で、やや色調の異なるプランを検出し精査を行った。その結果、基本層Ⅵ層上で壁の立ち上がりを確認し、住居状遺構と認定した。

〈規模・平面形〉遺構の南側や西側に崩落した巨岩や疊層があり全体像は把握できなかったが、規模は長軸で4.5～5m、短軸は4～4.2mの楕円形を呈すると推定する。主軸方位はN-30°-E。

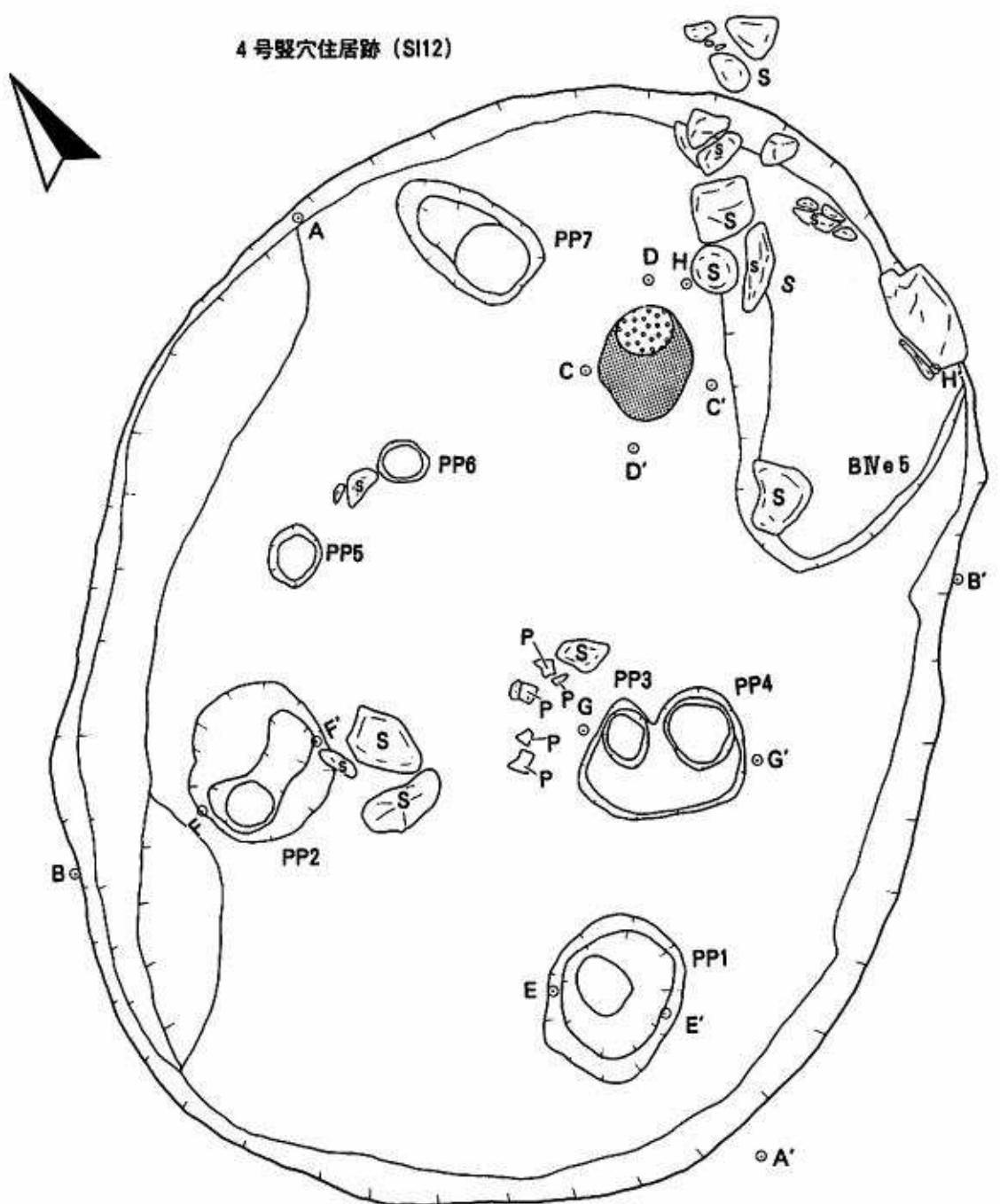
〈埋土〉上位に晩期の土器を包含するⅢ層黒褐色土、下位に基本層Ⅵ層と思われる粘土質の黒褐色土を持つ。床面直上に見られる黄褐色土は中せり起源のものの可能性もある。

〈壁〉残る北壁・西壁は垂直気味に立ち上がる。壁高は北側で21cm、東側で31.4cmを計る。

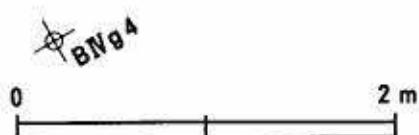
〈施設等〉床面はややしまる程度。柱穴は大小含めて11基確認した。そのうちPP03と11が主柱穴の可能性がある。炉跡・焼土遺構は検出されない。

遺物

出土したすべての土器を取り上げた。埋土の上位からは中期から晩期にかけての土器片（61～63）が出

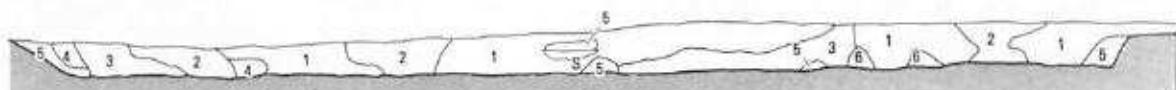


PP	1	2	3	4	5	6	7
口径cm	68×78	68×85	34×27	42×40	55×46	35×30	27×25
深さcm	18	47.9	6.4	7.3	10.4	21.9	18.6
備考	底32×底27×						



第12図 4号竪穴住居跡①(平面図)

A ————— A' L=204.800 m



B ————— B' L=204.800 m



- SH12竪穴住居跡 (A-B-A'-B')
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性ややあり しまりあり 大型の角礫・木根混入 土器片出土
 - 2 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性1よりなし しまりややあり 土器片出土
 - 3 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性あり しまり強い 下位から土器片出土
 - 4 10YR5/8 黄褐色シルト 粘性あり しまりあり
 - 5 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性あり しまりなし
 - 6 10YR5/8 黄褐色シルト 粘性なし しまりあり 底面または壁が(振りすぎ?)

L=204.400 m
C ————— C'



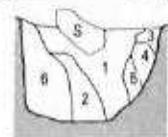
D ————— L=204.400 m ————— D'



L=204.300 m
E ————— E'



L=204.300 m
F ————— F'



H ————— L=204.300 m ————— H'



G ————— L=204.300 m ————— G'

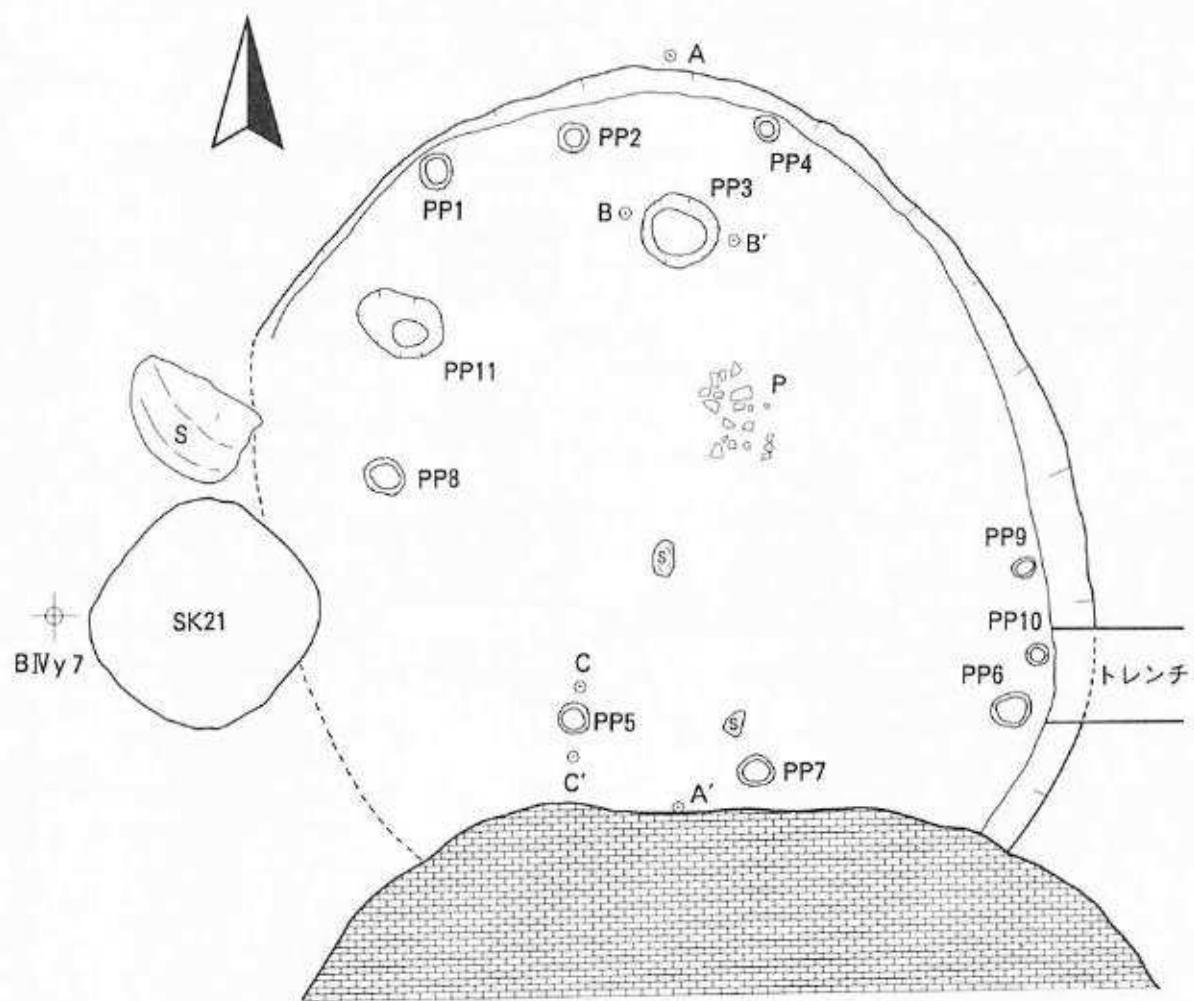


- SH12竪穴もしくは出入り口 (H-H')
1 10YR2/3 黒褐色シルトを主体とし、主に10YR5/8黄褐色シルト(20%)炭化物1%含む
粘性ややあり しまりあり 木根5%含む

- SH12PP01 (E-E')
1 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性あり しまりあり
SH12PP02 (F-F')
1 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性あり しまりあり
2 10YR2/3 黑褐色シルトと10YR5/8黄褐色シルトの混合土 木根による擾乱か
3 10YR2/3 黒褐色粘土 粘性強い しまりあり
4 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性ややあり 固くしまる
5 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性ややあり しまりあり 炭化物1%含む
6 10YR2/3と10YR4/6の色調を持つ混合土 粘性なくもろい 木根による擾乱か

0 2 m

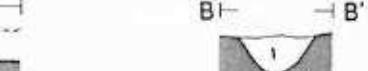
第12図 4号竪穴住居跡②(断面図)



A

 $L = 205.100\text{m}$

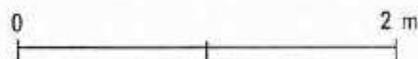
A'

 $L = 204.900\text{m}$ 

- SI06竖穴住居状遺構 (A-A')
- 1 10YR2/2 黒褐色砂質シルト 粘性ややあり しまりなし
 - 2 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性あり しまりややあり 褐色シルトまばらに混入50%
 - 3 10YR3/1 黒色シルト 粘性ややあり しまりなし
 - 4 10YR3/3 増褐色砂質シルト 粘性あり しまりややあり
 - 5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト 粘性あり しまりあり
 - 6 10YR6/4 にぶい黄褐色土 壁か?
- SI06PP03 (B-B')
- 1 10YR2/3 黒褐色粘土 粘性あり しまりややあり

PP	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
口径cm	20×20	16×13	42×38	15×13	21×19	26×23	18×16	22×21	10×9	14×10	48×47
深さcm	20	10.2	19	5	15	14.9	17.6	15.2	9.7	10.3	6.4
備考											

- SI06PP05 (C-C')
- 1 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性なし しまりややあり



第13図 1号竪穴住居状遺構

土しているが、床面から繊維の混入する深鉢（60）が一括で出土している。

時期

出土遺物から、縄文時代前期前葉から中葉に属すると考える。

2号竪穴住居状遺構(S I 13) 第14・37図 写真図版9・29・30

遺構

〈位置〉 調査区南側グリッドB III g 23

〈検出状況〉 当初、沢跡の落ち込みと判断していたが、ベルトを残し精査したところ円形にプランが立ち、また、底面から柱穴状の土坑を検出したことから、竪穴住居跡として登録した。精査中に炉（焼土）が検出されず、出土土器も少なかったことから竪穴住居状遺構とした。

〈規模・平面形〉 一部を残し破壊されているので詳細は不明であるが、平面形は楕円形を呈すのではないかと推測する。

〈埋土〉 よくしまる暗褐色砂質シルトを中心とする自然堆積であるが、西側（S I 04寄り）に人為的と思われる褐色シルトがみられる。S I 03か04構築時の排土の可能性もある。

〈壁〉 北側のみの検出であるが、なだらかに立ち上がり、最大高で29.8cmを計る。埋土にみられるように崩落している。

〈施設等〉 柱穴は5基のみの検出である。また、柱穴状土坑群の一部に含まれ、範囲内と思われるものを図面に取り入れたが、配列は判別できない。

遺物

出土したすべての土器を取り上げた。埋土上位から弥生時代の壺（69）が出土している。この壺の出土地点の北側で同層位（表土下）から弥生時代後期の壺形土器（206）が出土していることから、この面に弥生時代の検出面があったに違いない。他は早期末葉から前期中葉にかけてのものである。

時期

埋土状況や出土遺物から、縄文時代早期末葉から前期中葉の遺構と思われる。

3号竪穴住居状遺構(S I 16) 第15・37図 写真図版10・30

遺構

〈位置〉 B IV e・f 4～5区に跨いで広がる。

〈検出状況・重複関係〉 S I 12の床面を掘りすぎると時期の違う土器片が出土する事から、下方になんらかの遺構が存在しているのではないかと予想していた。そこで、S I 12の精査終了が床面を下げてみたところ約30cm下位で多量の炭化物を含む黒色粘土層が平面的に広がる面を検出した。この範囲からは完形に近い小型の壺や土器片が出土し、また山側を中心とする3方向で壁が検出されたことから住居状遺構と認定した。

〈規模・平面形〉 東西方向に主軸を持つ楕円形状を呈し、規模は4.7×4 mである。

〈埋土〉 S I 12床面の掘り下げ断面では上位に貼り床と思われる粘土質の黄褐色土、中～下位に暗～黒褐色土があり、下位に従って炭化物を多く含む。また、山側からのびる東西ベルトでは3層に区分している。黒褐色土が主体で、床面付近から埋土の表面を突き抜く崩落した岩が堆積している。

〈壁〉 細やかに立ち上がる。残存する壁高は北壁が23cm、東壁が51cm、南壁が32cmである。

〈その他〉焼土は確認できなかった。炭化物を含む面は南北方向に長軸を持つ楕円形状を呈し、約 2.1×1.7 mの広がりを持つ。炭化物を含む層の厚さは数cmある。

遺物

この遺構は上記の通り、4号竪穴住居跡（S I 12）の床面の下で検出されたものであることから、出土土器にはS I 12床面下出土とした土器も組み入れた。71は中期前葉の土器と考えられるが、遺構の床面で出土した半完形の土器は粗製土器で明確な時代はつかめない。しかし、ほかはすべて中期後葉から後期中葉の土器群に収まるようであり、その土器も当期に該当すると考えている。

時期

出土遺物から縄文時代中期後葉～後期前葉に属すると考えられる。

4・5号竪穴住居状遺構（S I 17・18） 第16・37・38図 写真図版11・30

遺構

〈位置〉ともにB IV d・e 4～5区に跨いで広がる。本遺構の南北両脇にはS I 08・S I 12住居跡が隣接する。

〈検出状況・重複関係〉本遺構の中心付近に観察用の東西ベルトを設定していたために遺構認定が遅くなつた。両脇の住居跡同様に断崖疊に混じって比較的多くの土器片を探集していた。観察用ベルトの西側端（畠側）に小規模な壁上の掘りこみを確認するとともに、焼土を検出し住居跡と認定した。しかしながら、壁状の掘りこみ面と焼土レベル面に30cm以上の高低差があること、両面から出土する土器片の時期に違いが認められたために重複する住居状遺構があると判断した。すなわちS I 18がS I 17の下位に位置し、S I 18の上部はS I 17に掘り込まれている。

〈規模・平面形〉S I 17の山体側半分以上は調査の不手際と崩落した岩石による破壊とから検出できなかつた。S I 17は5.4mの円形状と推定される。S I 18は楕円形状を呈し、規模は 3.8×3.4 mである。

〈埋土〉2遺構を通したベルトでは5層に区分しているが、それぞれの遺構で見るとS I 18は2層に、S I 17は5層に区分できる。ともに黒色～黒褐色土が主体であるが、S I 18は赤みが強い黒褐色である。

〈壁〉遺構認定が遅くなつたためにほとんど壁が立たない状況である。ともに最大数cmである。

〈床面〉ややしまる程度である。

〈炉〉2基検出した。両遺構の想定されるレベルで考えると2基ともにS I 18に伴う地床炉と考えられる。大きい規模のものは北西～南東方向に長軸を持つ不定形で約50～45cm、小さい規模のものは南北方向に長軸を持つ不定形で約20cmである。

〈付属施設〉S I 17で土坑を2基検出している。P P 1では関係に近い土器が埋設されていた。規模はP P 1が約 95×70 cm、P P 2が 90×60 cmで深さはそれぞれ22cm、10cmである。

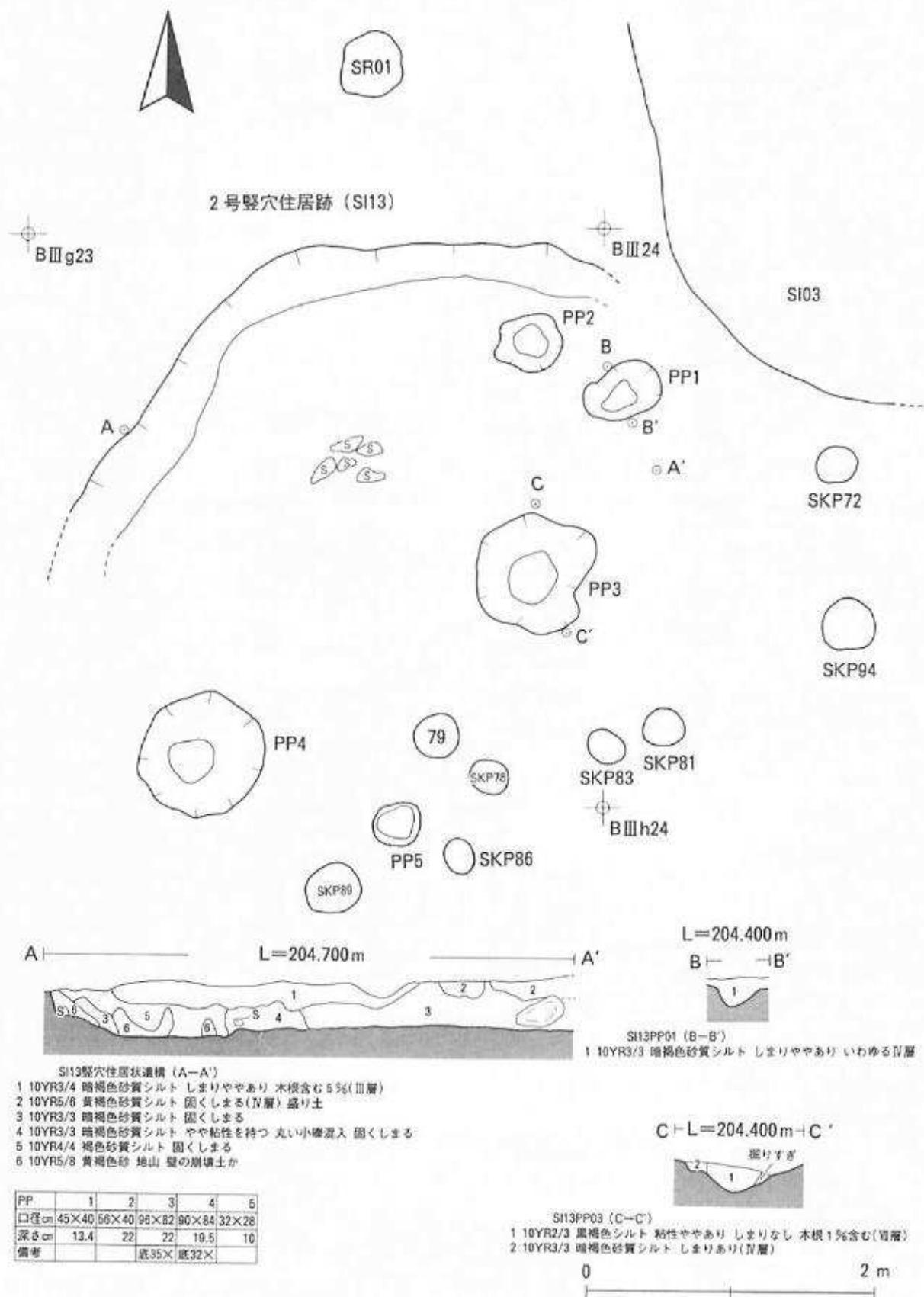
〈その他〉S I 18の床面で扁平な碟を検出している。大きさは約 40×35 cmで、後背の山体起源のものである。

遺物

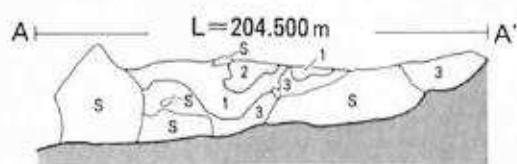
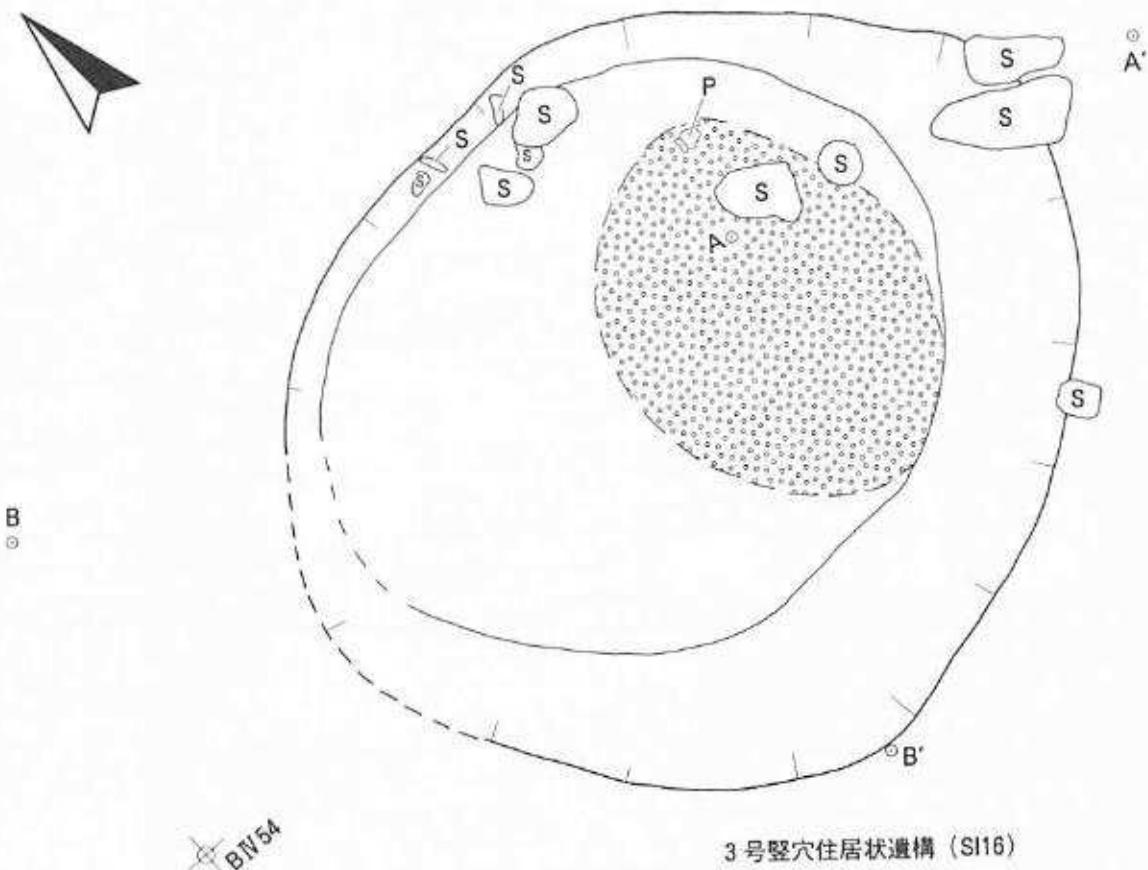
79は埋設土器の浅鉢である。80は、半完形の深鉢で粘土紐貼付側面圧痕の特色を持つ。

時期

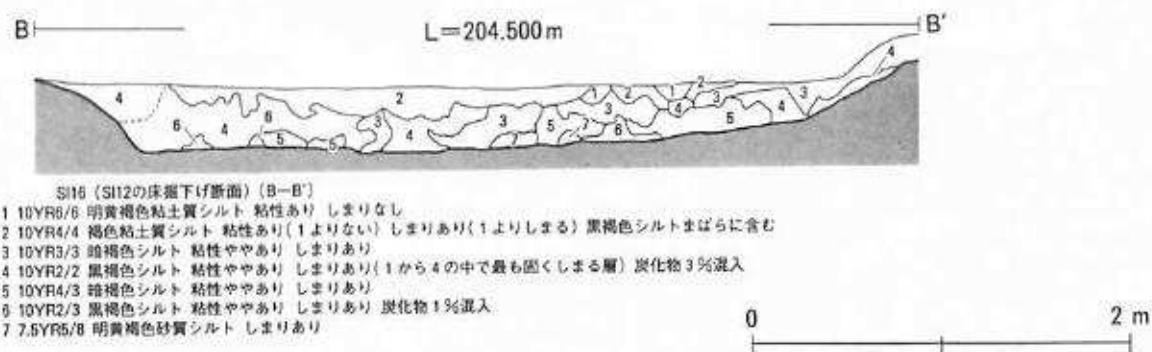
4号は縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭、5号は縄文時代中期中葉に属すると考えられる。



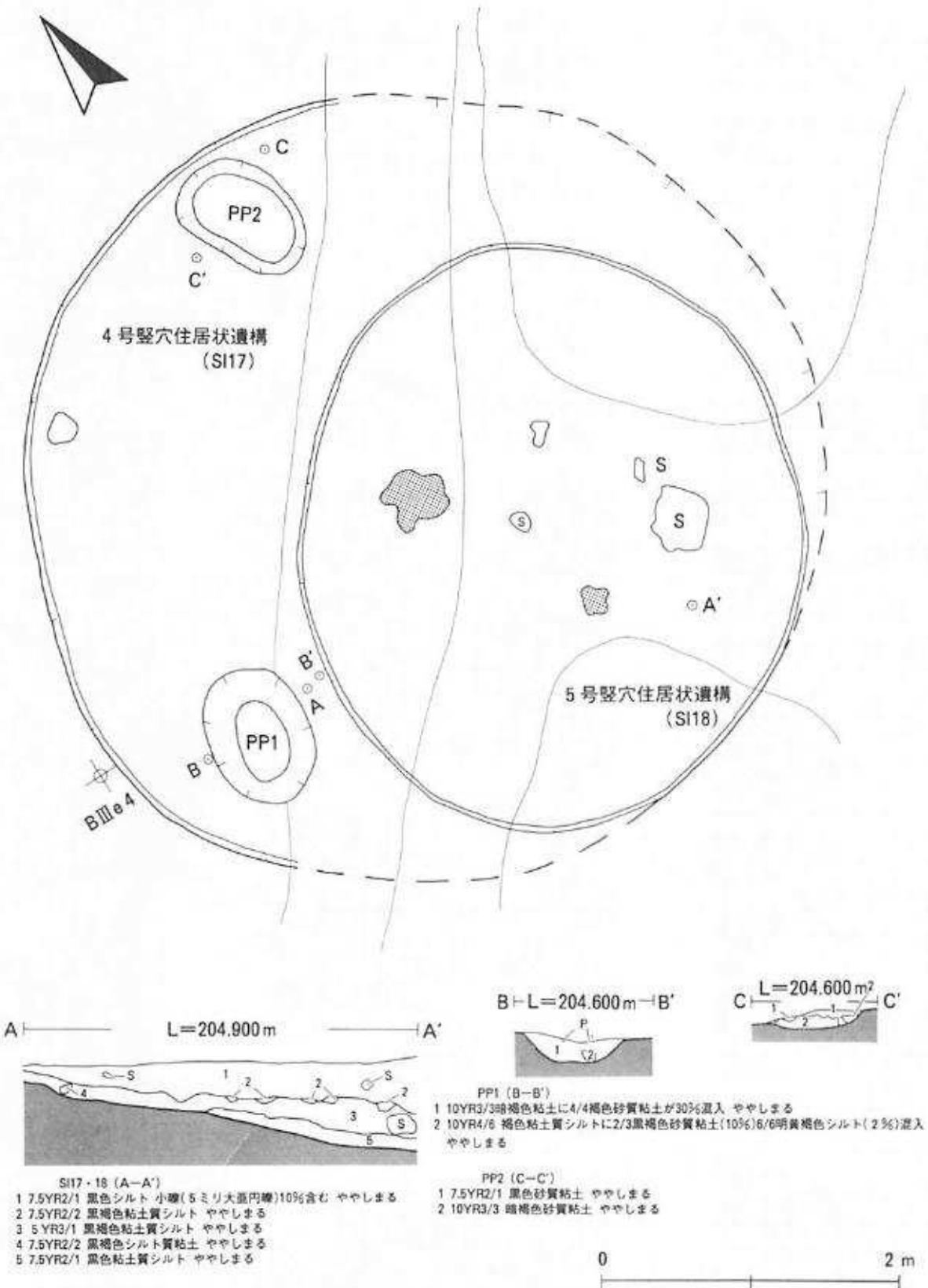
第14図 2号竪穴住居状遺構



SI16 N-Sベルト (A-A')
 1 7.5YR2/1 黒色シルトに4/4褐色粘土5%混入 土器片含む ややしまる
 2 7.5YR2/2 黒褐色シルト質粘土 ややしまる
 3 7.5YR3/1 黑褐色シルト質粘土 ややしまる



第15図 3号竪穴住居状遺構



第16図 4・5号竪穴住居状遺構

6号竪穴住居状遺構 (SK47改めS19)・第17・18図 写真図版12・30・31

遺構

〈位置〉 A IV y 9区に位置する。

〈検出状況〉 山体から崩落した数mの岩塊の周囲から土器片が出土することから、人力で岩の割れ目に繫を打ち込み除去した。その結果、岩塊直下の黒褐色土中から土器片が出土した。この黒褐色土を掘り下げたところ炭化物片が比較的多く散在する床面と見られる面を検出した。本遺構の半分は調査区外の山体側にのびるために全貌は把握できないが、予想される規模から住居状遺構と登録した。

〈規模・平面形〉 北西—南東方向に主軸を持つ橢円形状と推測される。規模は1.8以上×2.5mである。

〈埋土〉 2層に区分された。黒褐色土が主体で、上層部は淘汰の悪い数十~数mの断崖堆積物が50%以上混入する。上部層、下部層から土器片が出土している。

〈壁〉 しっかりととした緩やかな壁が立ち上がる。残存する壁高は、西壁が約62cm、東壁が約28cmである。

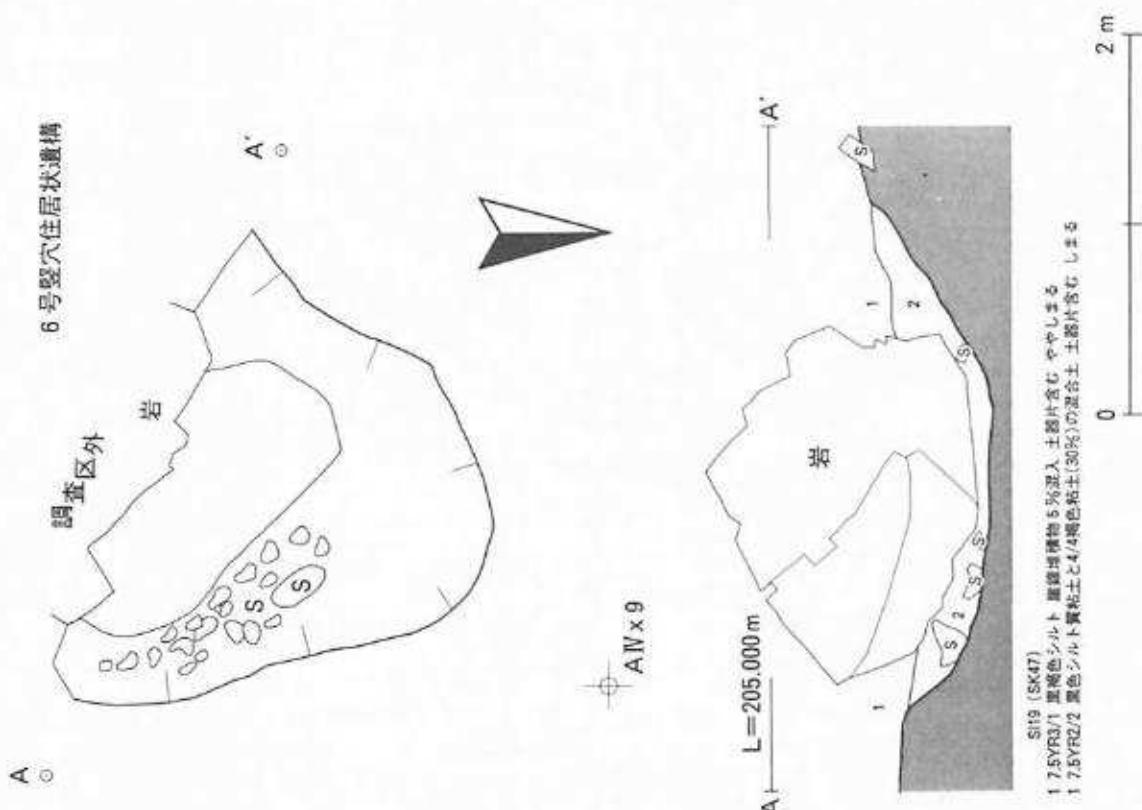
〈床面〉 炭化物片が散在し、全体的に固くしまる。

遺物

口唇部に縄文を充填した小型深鉢(86)と時期不明の粗製深鉢(87)が出土している。

時期

縄文時代後期の遺構と考えられる。



第17図 6号竪穴住居状遺構

3 土坑

縄文時代に属する遺構から時期不明に至るまであわせて36基検出した。分布は埋没沢からやや離れた微高地に位置するものが多い。時期の判別できるものは埋土状況などから縄文時代前・中期に属するものと、縄文時代晚期から弥生時代に属するものに分かれる。

晩期から弥生期にかけて土坑のうち、SK02・03・05・11・18・23・24・34の8基は集石土坑もしくはそれに類するものである。また、自然作用の可能性のあるもの（SK15・26～29）も土坑としている。

1号土坑(SK02)－集石土坑 第18・38図 写真図版13・31

遺構

〈位置〉 調査区南側グリッドB III b 24・25

〈検出状況・重複関係〉 VII層上面で黒褐色土のプランを検出。精査中、埋土に大型の礫を認めたことから墓坑の可能性をふまえ精査した。

〈規模・平面形・上部礫状況〉 全体の規模は開口部 1m74cm × 1m42cm の略梢円形。集石部は 1m06cm × 82cm の梢円形で 60cm あまりの礫が北側に、45cm の礫が中央部に配置されており、その周りに 10～20cm の礫がある。深さは 25cm。

〈断面形・埋土・底部礫状況〉 皿状の断面形で、上部はなだらかに立ち上がる。埋土は黒褐色シルト（Ⅲ層）の单層で壁際に崩落した暗褐色土がみられる。人為的堆積と思われる。図面内底部にある大型の礫は地山である。

〈その他〉 周辺に小型（5cm）の柱穴状土坑が 4 基検出されている。

遺物

3 片の深鉢の破片が出土している。89は繊維の混入する土器片である。ほかの 2 点は時代を決定できる明確な根拠を見いだせない。すべて埋土の上位（集石上部）での出土である。

時期

土器片は流れ込みと判断している。類似する集石遺構の出土状況から縄文時代晚期から弥生時代にかけての遺構と考えられる。

2号土坑(SK03)－集石土坑 第18・38図 写真図版13・31

遺構

〈位置〉 調査区南側グリッドB III b・c 25

〈検出状況・重複関係〉 SK02を検出した面の南側で、黒褐色土の円形プランを確認。埋土を 10cm ほど半裁したところで礫を検出した。そこで、SK02と同類の遺構と判断し、集石土坑と登録した。

〈規模・平面形・上部礫状況〉 全体の規模は開口部 1m60cm の真円形。集石部は長軸 1m45cm、短軸 1m 37cm のほぼ真円形で北側に 35cm、中央部から東寄りに 45cm ほどの礫が配置されている。深さは最大で、74cm を計る。

〈断面形・埋土・下部礫状況〉 逆台形状の断面形を呈し、埋土は集石部までは、黒褐色土の自然堆積、配石部以下は黒褐色土中心の人為的堆積と考えられる。崩落土と思われる褐色土が壁際にある。遺構の西側壁にみられる礫は地山である。

〈その他〉 SK02と同様の小型の柱穴が確認された。

遺物

92・93は集石部の埋土から出土した土器で、繊維を含む土器もみられる。94・95は集石部の下位の埋土出土土器である。

時期

縄文時代晚期から弥生時代にかけての遺構と考えられる。

3号土坑(S K05)－集石土坑？－ 第18・38・39図 写真図版13・31

遺構

〈位置〉 調査区南側グリッドB III d 25

〈検出状況・重複関係〉 S K02・03と同面Ⅶ層で黒褐色土のプランを検出。埋土を少しづつ除去しながら探ったが礫は確認できず、土坑とした。

〈規模・平面形・上部礫状況〉 全体の規模は開口部 1 m 54cm × 1 m 35cm の略楕円形であるが、中段の開口部でみると 1 m 10cm 程度、底部では 70cm の真円形となる。深さは、最大で 90cm を計る。図面にはないが上面南壁際に礫が埋まっていた。(精査中に落下、写真図版断面に掲載)

〈断面形・埋土・下部礫状況〉 フラスコ状の断面形を呈し、埋土は中位にある礫を境に上位は黒褐色土の自然堆積、下位は人為的堆積と考えられ、底部に 20cm ほどの礫が配置されている。

〈その他〉 周辺に小型の柱穴が複数確認される。

遺物

出土したすべての土器を掲載しているが、中期中葉に属すると思われる96をのぞき、同時期のものであると判断する。

時期

縄文時代晚期から弥生時代にかけての遺構と考えられる。

4号土坑(S K06) 第18図 写真図版13

遺構

〈位置〉 調査区南側グリッドB III b 23・24

〈検出状況〉 Ⅶ層上面検出

〈規模・平面形〉 開口部径 95×65cm で略楕円形を呈す。主軸方位は N-45° - W。深さは西側壁高で 17.6 cm を計る。

〈断面形・埋土〉 断面形は皿形状であるが、東側底部がややくぼむ。埋土は暗褐色土主体となる自然堆積

時期

出土遺物はなく不明である。

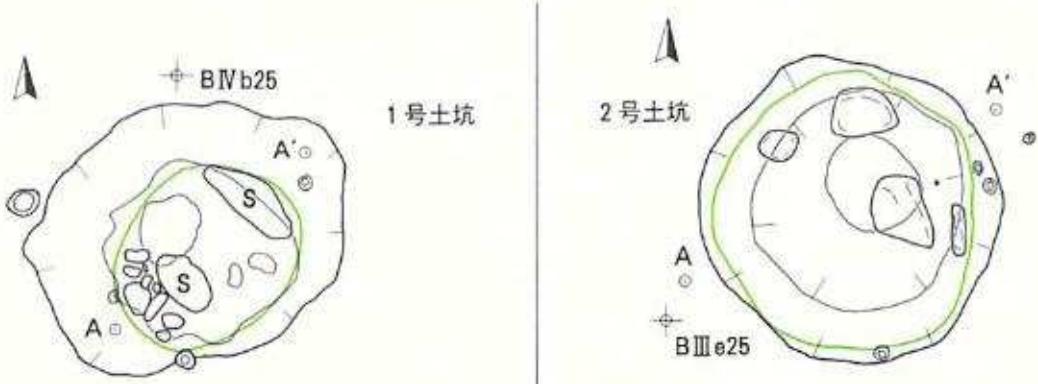
5号土坑(S K08) 第19図 写真図版14

遺構

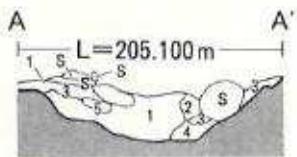
〈位置〉 調査区南側グリッドB III b 23

〈検出状況・重複関係〉 Ⅶ層上面で検出

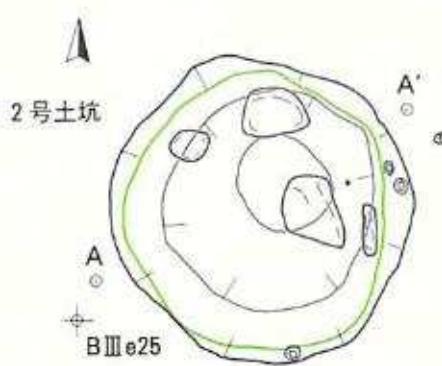
〈規模・平面形〉 開口部径 1 m 15cm × 96cm で略楕円形を呈す。主軸方位は N-15° - E。深さは東側壁高



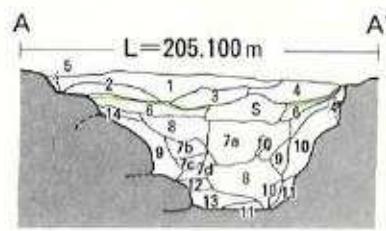
1号土坑



- SK02
 1 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり しまりややあり 塵化物微量に含む
 2 10YR2/2黒褐色土と4/6褐色土との混合土 粘性なし しまりなし
 3 10YR3/3 暗褐色土 粘性なし しまりなし
 4 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり しまりややあり
 5 10YR2/1 黒褐色土と4/6褐色砂との混合土 粘性なし しまりなし



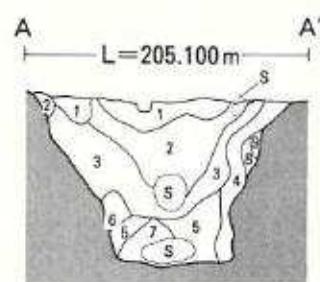
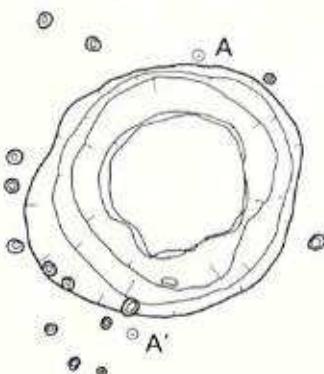
2号土坑



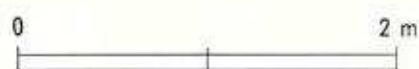
- SK03
 1 10YR3/4 暗褐色土 粘性なし しまりなし
 2 10YR2/1 黑色土と4/6褐色土との混合土 粘性・しまりまるでなし
 3 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり しまりややあり
 4 10YR3/3 暗褐色土 粘性なし しまりややあり
 5 不明
 6 不明
 7 10YR2/1 黒色土 a. 粘性なし しまり全くなし(塹化物含む)
 b. 粘性なし しまりややあり
 c. 粘性なし しまりなし
 d. 粘性あり しまりなし
 8 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり しまりあり 塹化物含む
 9 10YR3/1 黑褐色土 粘性あり しまりあり
 10 10YR3/3 暗褐色土 粘性あり よくしまる しまりややあり
 11 10YR5/6 黄褐色土 粘性なし よくしまる
 12 10YR3/4 暗褐色土 粘性あり しまりあり 小礫多く含む
 13 10YR3/4 暗褐色土 粘性あり しまりあり 砂多く含む
 14 不明
 *不明のうち5は暗褐色土、6と14は8と同一土層である可能性が高い



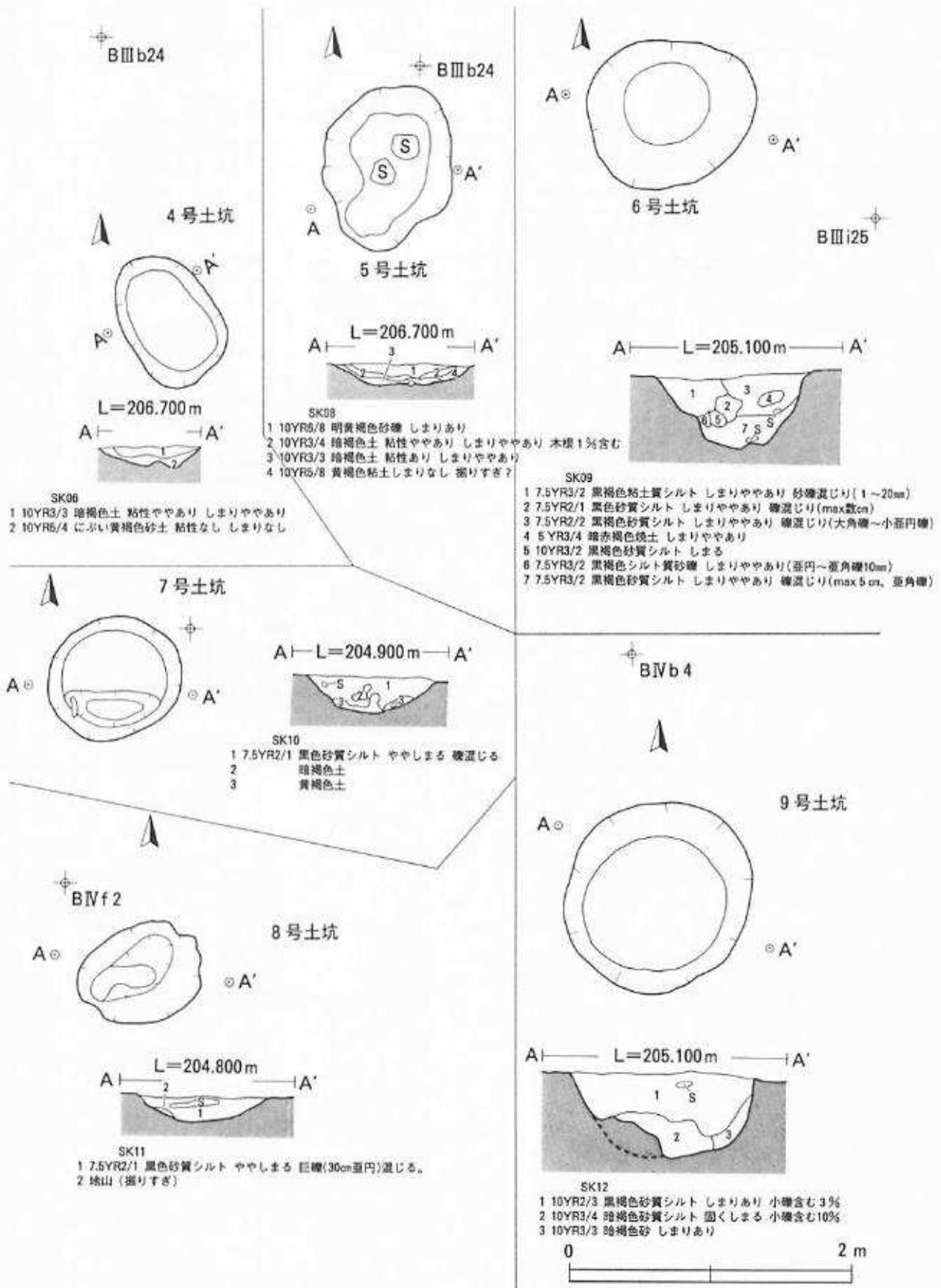
3号土坑



- SK05
 1 10YR1.7/1 黒色砂質シルト しまりなし 土器片含む
 2 10YR2/1 黑色砂質シルト しまりややあり 土器片含む
 3 10YR2/2 黒褐色砂質シルト 粘性あり しまりややあり 土器片出土
 4 10YR2/3 黑褐色砂質シルト 粘性あり しまりなし
 5 10YR2/2 黑褐色砂質シルト 粘性あり しまりややあり 磁を少量含む
 6 10YR2/3 黑褐色砂質シルト 粘性あり しまりあり 4よりやや明るい感じ
 7 10YR3/3 暗褐色砂質粘土 しまりあり 土器片出土(前期か)
 8 10YR3/3 暗褐色砂質粘土 固くしまる
 9 掘りすぎ



第18図 1～3号土坑



第19図 4 ~ 9号土坑

で15.3cmを計る。

〈断面形・埋土〉 断面形は皿形状で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は暗褐色土を上位にもつ自然堆積。

時期

出土遺物はなく不明である。

6号土坑(S K09) 第19・39図 写真図版14・31

遺構

〈位置〉 調査区南側グリッドB III h 24

〈検出状況・重複関係〉 Ⅶ層疊層面(地山)での検出

〈規模・平面形〉 開口部径 1 m 20cm × 1 m 05cm で真円に近い略梢円形を呈す。深さは北側壁高で49.2cm、南側壁高で53.5cmを計る。

〈断面形・埋土〉 断面形は、深い皿形状で、西側に段を持つ。埋土はその段の付近に焼土があり、下位は黒褐色土の人为的堆積、上位は自然堆積と思われる。

〈その他〉 平面形が真円形に近く、やや深めの構造はSK12に似る。

遺物

1点のみ(102)の出土であるが、浅鉢の破片と思われる。

時期

縄文時代の遺構と考えられる。

7号土坑(S K10) 第19図 写真図版14

遺構

〈位置〉 調査区南側グリッドB IV f 2

〈検出状況・重複関係〉 Ⅶ層疊層面(地山)での検出

〈規模・平面形〉 開口部径 94×88cm のほぼ真円形を呈す。壁高は北側で10cm

〈断面形・埋土〉 断面形は皿形状であるが、南側で底部がややくぼみ、垂直気味に立ち上がる。埋土は暗褐色土の混入する黒色シルトを中心で自然堆積か。

時期

遺物はないが、埋土状況などから縄文時代に属する可能性が高い。

8号土坑(S K11)-集石土坑一 第19図 写真図版14

遺構

〈位置〉 調査区南側グリッドB III f 2

〈検出状況・重複関係〉 Ⅶ層疊層面(地山)での検出

〈規模・平面形〉 開口部径 88cm × 72cm の略梢円形。深さは南西側壁高が最大で、24.9cmを計る。

〈断面形・埋土〉 断面形は皿形状であるが、SK10と同じように南側でややくぼみ立ち上がる。

〈その他〉 埋土上位に50cm大の扁平な碟が埋まり、また実測図には残らないが(写真図版参照)底部にも大型の碟があることから集石土坑の可能性もある。

時期

出土遺物はないが、一連の集石土坑群のひとつと考えられ、よって縄文時代晚期から弥生時代に属すると考えられる。

9号土坑(S K12) 第19・39図 写真図版15・31

遺構

〈位置〉 調査区南側グリッドB IV b 3・4

〈検出状況・重複関係〉 VII層(地山面)上面での検出である。重複しないが柱穴群3と隣接する。

〈規模・平面形〉 開口部径 1m57cm×1m42cmのはば真円に近い梢円形。主軸方位はN-40°-E。深さは最大で58.4cmを計る。

〈断面形・埋土〉 断面形は皿形状であるが、西側壁中程に段を持ち、東側はやや垂直気味に立ち上がる。

埋土は西側壁の段を境に上位に黒褐色、下位に暗褐色シルトが覆う。

〈その他〉 平面形・断面形がSK09に似る。

遺物

出土した土器は大洞BCに比定される

時期

縄文時代晚期前葉に属すると考えられる。

10号土坑(S K15) 第20・39図 写真図版15・31

遺構

〈位置〉 調査区南側グリッドB III d 25・B IV d 1

〈検出状況・重複関係〉 VII層(暗褐色土層)上面での検出で、西側でSK05と隣接する。

〈規模・平面形〉 開口部 3m16cm×87cmの溝状の梢円形で西側がやや北向きに湾曲する。南北壁は垂直気味に立ち上がるが東西壁はなだらか。深さは底部中心部と北壁上の比高から18.4cmを計る。

〈断面形・埋土〉 断面形は、南北断面は皿形状、東西断面は船底形で、埋土は黒褐色シルトと中心で、小礫が混入する。

〈その他〉 形状がSK19に似る。水の浸食による雨裂溝の疑いもある。

遺物

晩期末から弥生初頭の浅鉢の破片(106)が出土している。

時期

土器片の所属時期の可能性が高いが、判然としない。

11号土坑(S K17) 第20・39図 写真図版15・31

遺構

〈位置〉 調査区南側グリッドB III e 23

〈検出状況・重複関係〉 VII層面の下、ほぼⅧ層(地山)面での検出である。

〈規模・平面形〉 1m34cm×98cmの梢円形。北西部に50cm×45cmほどの浅い張り出しと、南壁際に径40cm、深さ23cmの柱穴状土坑が確認された。深さは北壁高で16.5cmを計る。

〈断面形・埋土〉断面形は皿形状で、埋土は砂質の黒褐色シルト中心である。

遺物

黒褐色土中から深鉢の破片（107）が出土している。

時期

縄文時代前期前葉に属する可能性が高い。

12号土坑(S K 18)一集石土坑? — 第20・39図 写真図版15・31

遺構

〈位置〉調査区南側グリッドB III e 24・25

〈検出状況・重複関係〉VII層褐色土層面での検出

〈規模・平面形・上部疊状況〉開口部径1m05cm～1m10cm、底部径形80～90cmの真円形。深さは西壁で最大29.7cmを計る。上位に目立った疊はない。

〈断面形・埋土・底部疊状況〉断面形は逆台形状。埋土は黒褐色シルト（III層）を中心とする。底部に20cm大の疊が置かれる？。

遺物

縄文時代末葉から弥生時代の甕の破片（108・109）が出土した。

時期

出土遺物から、縄文時代晚期～弥生時代に属し、集石土坑群のひとつと考えている。

13号土坑(S K 19) 第20・39図 写真図版16・31

遺構

〈位置〉調査区北側グリッドA IV x 5

〈検出状況・重複関係〉VII層面の下、ほぼ埴層（地山）面での検出である。

〈規模・平面形〉1m42cm×96mの不整な格円形状。主軸方位はN-45°-Wであるが東側に弯曲する張り出しが確認される。深さは北壁高が9.7cmと浅く、底部中心と西壁上との比高でも17.8cmを計る程度

〈断面形・埋土〉南北断面形は皿形状で、南壁が垂直気味に立ち上がる。東西断面は皿形状でS K 17に似る。

〈その他〉水の浸食による自然作用の疑いもある。

遺物

小型の深鉢らしき口縁部（110）が出土している。

時期

遺物は出土しているが流れ込みの可能性が高く、よって時代は不明である。

14号土坑(S K 21) 第20図 写真図版16

遺構

〈位置〉調査区北側グリッドA IV x・y 7

〈検出状況・重複関係〉グリッド内の崖錐を削除後、S I 06の精査中に検出した。当初は住居跡の柱穴と判断していたが、形状から土坑とした。

〈規模・平面形〉開口部径 1 m 14cm × 1 m 07cm のやや角のある真円形。壁は垂直気味に立ち上がる。深さは、北壁高で 11.7cm を計る。

〈断面形・埋土〉断面形は逆台形状で東側底面がやや高い。埋土は崖錐礫と黒褐色土の混入土で、固くしまる。

〈その他〉崖錐の落下による堆みの疑いもある。

時期

2回目の崖錐の崩落した時期と同時期で、縄文時代後期から晩期の遺構の可能性がある。

15号土坑(S K 22) 第21図 写真図版16

遺構

〈位置〉調査区南側グリッド B III d 24

〈検出状況・重複関係〉Ⅲ層面の下、ほぼⅣ層(地山)面での検出である。

〈規模・平面形〉開口部径 1 m 24cm × 1 m 12cm の真円に近い略椭円形。深さは東側壁高が最大で、25cmを計る。

〈断面形・埋土〉断面形は底面がやや平らな逆台形状。東壁は緩くなだらかに、西壁は垂直気味に立ち上がる。埋土は上位に黒褐色、下位に暗褐色シルトが覆う自然堆積で、上位に礫の混入が見られる。

時期

遺物はないが縄文時代の遺構と考えられる。

16号土坑(S K 23)一集石土坑 第21図 写真図版16

遺構

〈位置〉調査区南側B III f 24

〈検出状況・重複関係〉S I 03竪穴住居跡精査中に大型の円形プランを検出。柱穴と判断し、S I 03 PP 01と登録したが、埋土下位から多量の礫が出土し S K 23集石土坑と改めた。よって、S I 03の床面を切る。また、南側で S K 24と隣接する。

〈規模・平面形・上部礫状況〉開口部 1 m ~ 1 m 10cm のほぼ真円形。深さは、下位にある集礫まで 15cm 足らずであるが、礫をはずすと最大で 36cm を計る。検出面に礫はみられない。

〈断面形・埋土・底部礫状況〉逆台形を呈し、埋土は褐色砂をブロックで含む黒褐色土の単層で人為的堆積と思われる。下位に 20~30cm 大の礫が多数出土した。その配置に規則性は認めらないが、意図的に積まれているかのようである。

時期

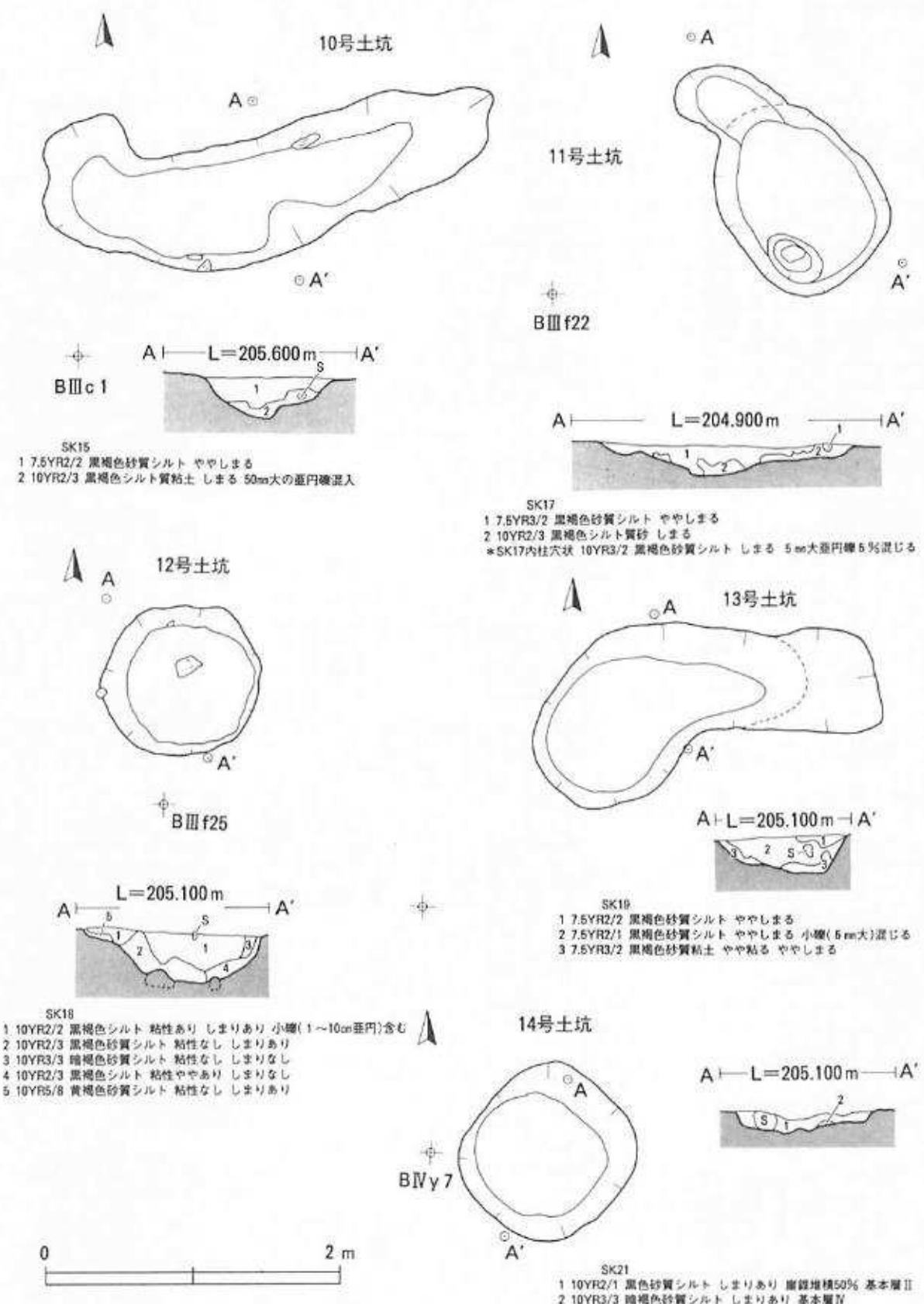
出土遺物はないが、埋土状況などから縄文時代晩期から弥生時代に属する可能性が高い。

17号土坑(S K 24)一集石土坑 第21・39図 写真図版17・31・32

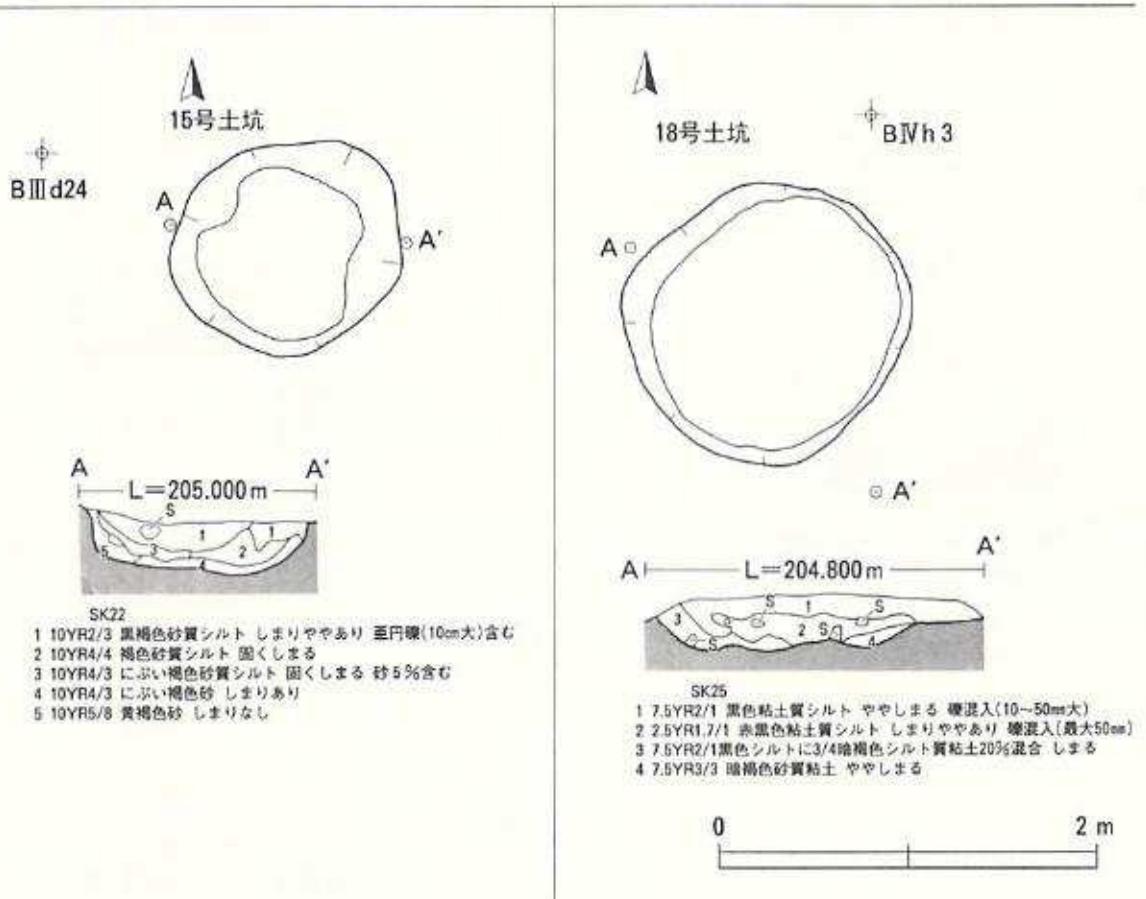
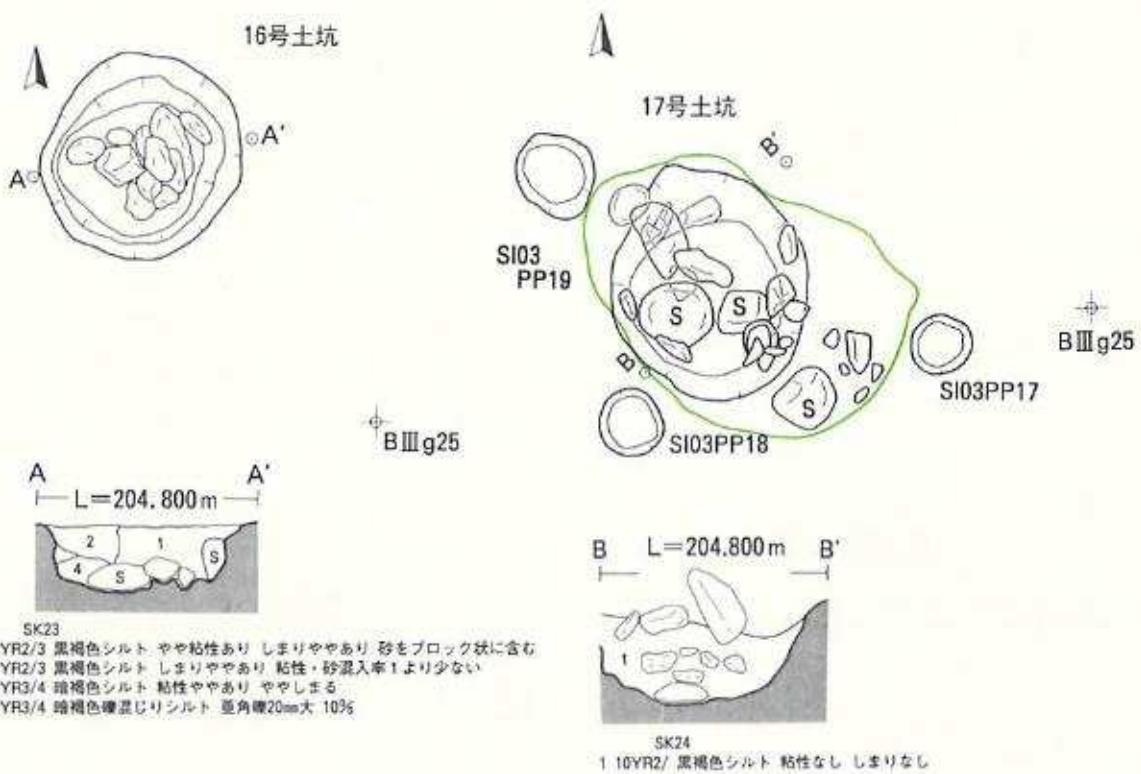
遺構

〈位置〉調査区南側B III f 24

〈検出状況・重複関係〉S K 23と並んで検出されている。ただし、上面で礫が検出されていることから、最初から集石土坑と登録している。



第20図 10~14号土坑



第21図 15~18号土坑

〈規模・平面形・上部集石状況〉開口部径 1 m 20cm × 1 m 10cm の真円に近い略楕円形。集石部の広がりは 1 m 82cm × 1 m 15cm を計り、楕円形を呈す。深さは下位に設置されている？疊までは 33cm 、疊をはずすと 45cm を計る。集石は小型の疊でハの字を型どり、中心部に大型の疊を置き、さらに傍らに立ち石状に埋め込むように配置されている。

〈断面形・埋土・下部集石状況〉断面形は皿形状。埋土は黒色土の単層で、数個の疊を埋めている。埋土上位にある立ち石状の疊は下位の疊を埋めてから設置されているのが見て取れる。

〈その他〉周囲に柱穴状の土坑が 3 基見られる。この土坑は住居跡（S I 04）の柱穴と判断しているが、当遺構に関わる可能性もある。

遺物

集石の埋土からは縄文時代後期の破片（111）、集石の内部から変形工字文を施す浅鉢の破片が出土している。

時期

縄文時代晚期から弥生時代に属すると考えられる。

18号土坑（S K 25） 第21・39図 写真図版17・32

遺構

〈位置〉調査区南側グリッド B IV h 2 埋没沢跡の左岸沿いに位置する。

〈検出状況・重複関係〉黒褐色土層（Ⅲ層）検出時で多くの土器を出土させ、プランは不確実であったが S I 07 竪穴住居跡として精査を開始した。その後、住居跡でないことが判明したが、その床面と思われた面（V層を掘り込んでいる？）で検出した。

〈規模・平面形〉開口部径 1 m 54cm × 1 m 50cm の不整な真円形でやや角が立つ。壁は緩やかに立ち上がり、深さは東側壁高が 11.8cm 、西側壁高で 6.1cm を計る。

〈断面形・埋土〉断面形は皿形状で底面は緩やかに起伏する。埋土は黒褐色シルト中心で、上位には 10~50mm ほどの疊が混入する。

遺物

遺構の周辺から比較的多くの土器を出土させたが、文様等の把握できる個体うち代表的なものを掲載している。（117~125）器種は浅鉢や壺形土器が多い。土製品も出土している。

時期

縄文時代晩期末葉から弥生時代の遺構である。

* S K 26~29 は、土坑状の窪み群として一括で述べる。

19~22号土坑（S K 26・27・28・29） 第22図 写真図版18

遺構

〈位置〉調査区南側グリッド B III b · c · d 25

〈検出状況・重複関係〉Ⅲ層を薄く剥いでいる最中のほぼⅣ層上（地山）での検出である。南から北へ 60cm ~ 1 m 間隔で並ぶ。西側で大型で、深い土坑（S K 02 · 03 · 30 · 31）と隣接する。

〈規模・平面形〉長軸は 1 m 40cm ~ 2 m 60cm 、短軸は短くて 60cm 、S K 29 は 1 m 80cm を計る。平面形は 4 基とも不整な楕円形で、中程でやや彎曲する。深さは 5 ~ 10cm 程度。

〈断面形・埋土〉断面形は皿形状であるが、北側でやや垂直に立ち上がり、南側でなだらかになる特色がある。埋土はほぼ暗褐色シルトの単層で、しまりはよい。

〈その他〉SK26内に20~40cmの柱穴状の窪みが、また周辺には5cm以下の小柱穴状の窪みが多く検出された。

時期

出土遺物はなく時期は判断できない。近隣にある深い土坑と旧川跡との関連から雨裂溝の可能性もある。

また、下記のSK30・31との関連から風倒木痕であるかもしれない。

* SK30・31は同一遺構の可能性があり、まとめて述べる。

23・24号土坑(SK30・31) 第23・39図 写真図版17・32

遺構

〈位置〉調査区南側グリッドB III b・c 24

〈検出状況・重複関係〉Ⅶ層面の下、ほぼⅧ層(地山)面での検出である。

〈規模・平面形〉SK30は南北にのびる溝状の円形状で長軸は3m~3m20cmと推定され、短軸は70cm~1m05cmである。SK31はSK30の南壁を切る?ように東西にのびる梢円形状で長軸3m20cm、短軸1m20cmを計る。1つの遺構と考えるならばその形状はくの字型に屈曲するが、深さはその屈曲部で最大となり、北壁上との比高は70.4cmを計る。

〈断面形・埋土〉断面形はSK30の東西断面がフ拉斯コ形状で西側壁がなだらかに立ち上がり、東壁がハングするようである。SK31の南北断面は皿状である。埋土は深くなっている屈曲部を見ると炭化物を含んだ黒褐色の砂質のシルトが西側から入り込むほかは暗褐色土の砂質のシルトが中心となる。全体的によくしまる自然堆積である。

〈その他〉2つの土坑が重複していることも考えられるが、その新旧については判別できない。

遺物

SK30の埋土から纖維を含む土器片が出土している。

時期

縄文時代前期前葉の土器片が出土し、埋土状況からも中期以前の遺構であると考えられるが、自然作用の疑いもある。

25号土坑(SK33) 第23図 写真図版19

遺構

〈位置〉調査区南側グリッドB III g 25・B IV g 1

〈検出状況・重複関係〉Ⅷ層(地山・川原石)での検出

〈規模・平面形〉開口部径1m07cm×1m04cmの不整な真円形。深さは北壁高で40.1cmを計る。

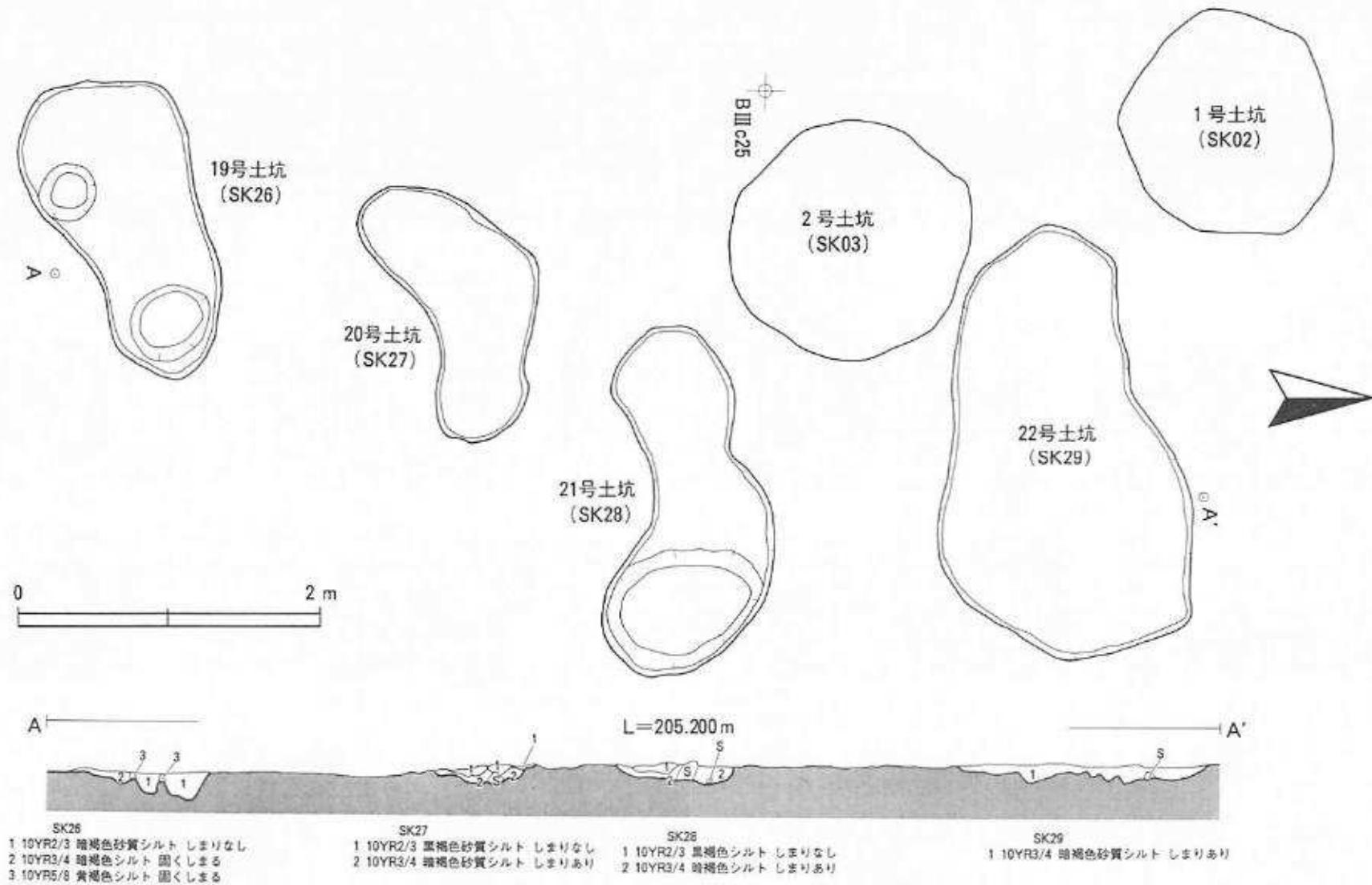
〈断面形・埋土〉断面形は皿形状で、壁はそれぞれ緩やかに立ち上がる。埋土は炭化物を含む黒~黒褐色土を主体とする。

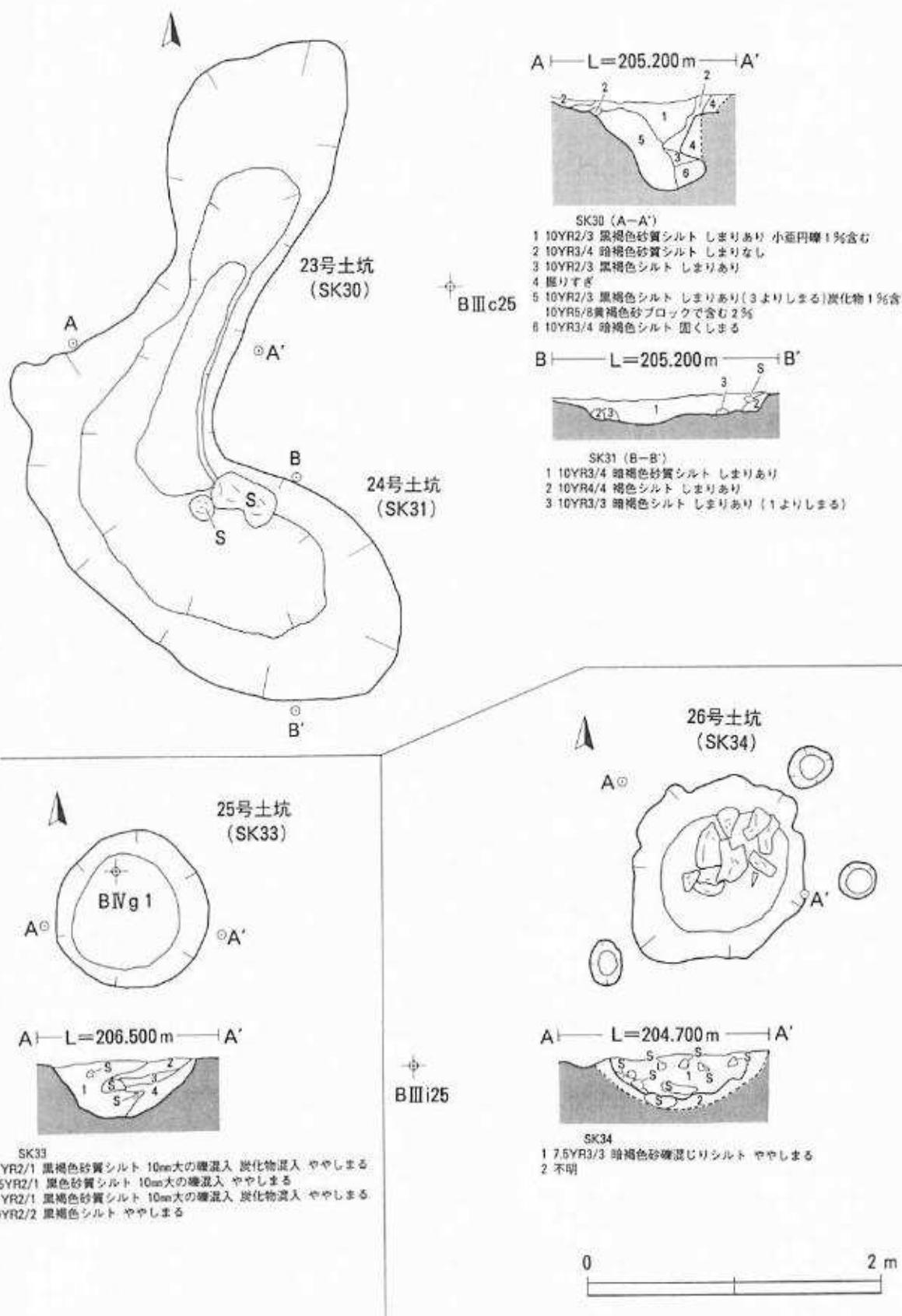
時期

遺物は出土していない。時期も不明である。

第22図 19~22号土坑

—43—





第23図 23~26号土坑

26号土坑(S K34)－集石土坑 第23図 写真図版19

遺構

〈位置〉 調査区南側B III h 25

〈検出状況・重複関係〉 番層(地山・礫層)での検出。埋没沢跡の左岸にあたる。周囲には柱穴群3がある。

〈規模・平面形〉 開口部径 1m 40cm × 1m 22cm の不整な梢円形状。底部に20~30cmほどの礫が積まれている? 深さは東壁上と底部(礫取り外し)との比高で、40cmを計る。

〈断面形・埋土〉 断面形は皿形状。東側壁がやや垂直気味に立ち上がる。埋土は10cmほどの礫が多く混入する黒褐色シルトの單層。

〈その他〉 周囲に3基の柱穴状土坑(径20cm程度)が巡る形状はSK24に似る

時期

出土遺物はないが一連の集石土坑群のひとつと考えている。よって縄文時代晚期から弥生時代の遺構と思われる。

27号土坑(S K35) 第24・39図 写真図版19・32

遺構

〈位置〉 調査区北側グリッドA IV u・v 11

〈検出状況・重複関係〉 番層(地山・礫層)検出

〈規模・平面形〉 開口部径 1m 72cm × 80cm の略梢円形状。壁は緩く立ち上がる。

〈断面形・埋土〉 断面形は皿形状。埋土は炭化物の混入する黒褐色土が主体である。

遺物

粘土紐貼り付け痕のある深鉢の破片(131)が出土した。

時期

縄文時代前期の遺構である可能性が高い。

28号土坑(S K36) 第24図 写真図版19

遺構

〈位置〉 調査区北側グリッドA IV u 11

〈検出状況・重複関係〉 番層(地山・礫層)検出

〈規模・平面形〉 開口部径 1m 02cm × 62cm の略梢円形状

〈断面形・埋土〉 断面形は逆三角形状で、西壁がほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色土の單層である。

時期

時期は不明である。

29号土坑(S K37) 第24図 写真図版20

遺構

〈位置〉 調査区北側グリッドA IV t 12

〈検出状況・重複関係〉 番層(地山・礫層)検出

〈規模・平面形〉開口部径85×64cmの楕円形状

〈断面形・埋土〉断面形は皿形状。埋土は黒褐色土の单層。

時期

時期は不明である。

30号土坑(S K 38) 第24図 写真図版20

遺構

〈位置〉調査区北側グリッドA IV u 10

〈検出状況・重複関係〉Ⅷ層(地山・礫層)検出。重複している可能性がある。

〈規模・平面形〉開口部径1m 16cm×67cmの楕円形状であるが、50~60cmの真円形の柱穴状土坑が2基重複している可能性がある。

〈断面形・埋土〉断面形は皿形状。壁はやや垂直気味に立ち上がる。埋土は黒褐色土の单層。

時期

時期は不明である。

31号土坑(S K 41) 第24図 写真図版20

遺構

〈位置〉調査区南側グリッドB IV g 1

〈検出状況・重複関係〉埋没沢跡の埋土上位、V層黄褐色土での検出。

〈規模・平面形〉開口部径1m 76cm×78cmの中程がくびれるひょうたん型状か、あるいは開口部80~90cmの真円形の土坑が2基重複しているか断面観測でも判別できなかった。深さは北側壁高で46cmを計る。

〈断面形・埋土〉断面形は逆台形状を呈す。北側壁がなだらかに立ち上がる一方で、南壁は垂直気味に立つ。埋土はよくしまる褐色シルト(V層)を上位に、北側下位に礫の混入する黒褐色シルトが見える。全体的に礫の混入が多い。

〈その他〉柱穴群3の範囲内にある。

時期

出土遺物はないが、埋土状況から縄文時代前期の遺構の可能性が高い。

32号土坑(S K 42) 第25図 写真図版20

遺構

〈位置〉調査区南側グリッドB IV g 1

〈検出状況・重複関係〉埋没沢跡の底面、Ⅶ層下からほほⅧ層(地山)面上での検出

〈規模・平面形〉開口部径80~87cmの不整な真円形。深さは最大でも10cmほど。

〈断面形・埋土〉断面形は皿形状、中央部でやや窪みを持つ。埋土は暗褐色砂質シルトの单層で非常に固くしまる。

〈その他〉柱穴群3の範囲内にある。

時期

出土遺物はないが、埋土状況などから縄文時代前期に属する可能性が高い。

33号土坑(S K 43) 第25図 写真図版21

遺構

〈位置〉 調査区南側グリッドB IV g 2

〈検出状況・重複関係〉 埋没沢跡の底面、Ⅶ層下からほぼⅧ層(地山)面上での検出

〈規模・平面形〉 開口部径84~90cmの不整な真円形。深さは最大でも12cmで浅い。

〈断面形・埋土〉 断面形は皿状で、東側が緩くながらに立ち上がる。埋土は褐色シルトの混合土で固くしまる。

〈その他〉 柱穴群3の範囲内にある。

時期

出土遺物はないが、埋土状況などから縄文時代前期に属する可能性が高い。

34号土坑(S K 44) 第25図 写真図版21

遺構

〈位置〉 調査区南側グリッドB IV g 2

〈検出状況・重複関係〉 埋没沢跡の底面、Ⅸ層下からほぼⅩ層(地山)面上での検出。S K43と隣接する。

〈規模・平面形〉 開口部径 1 m 18cm×98cmの不整な梢円形状で、深さは最大で18cmを計る。

〈断面形・埋土〉 断面形は皿形状。埋土は褐色シルト(Ⅹ層)の単層

〈その他〉 柱穴群3の範囲内にある。

時期

出土遺物はないが、埋土状況などから縄文時代前期に属する可能性が高い

35号土坑(S K 45) 第25図 写真図版21

遺構

〈位置〉 調査区北側グリッドA IV u 14

〈検出状況・重複関係〉 Ⅶ層(地山・礫層)検出

〈規模・平面形〉 開口部径85×75の不整な真円形。

〈断面形・埋土〉 断面形は逆三角形状で、南壁がやや垂直気味に立ち上がる。埋土はしまりない。

時期

時期は不明である。

36号土坑(S K 46) 第25図 写真図版21

遺構

〈位置〉 調査区北側グリッドA IV t 15

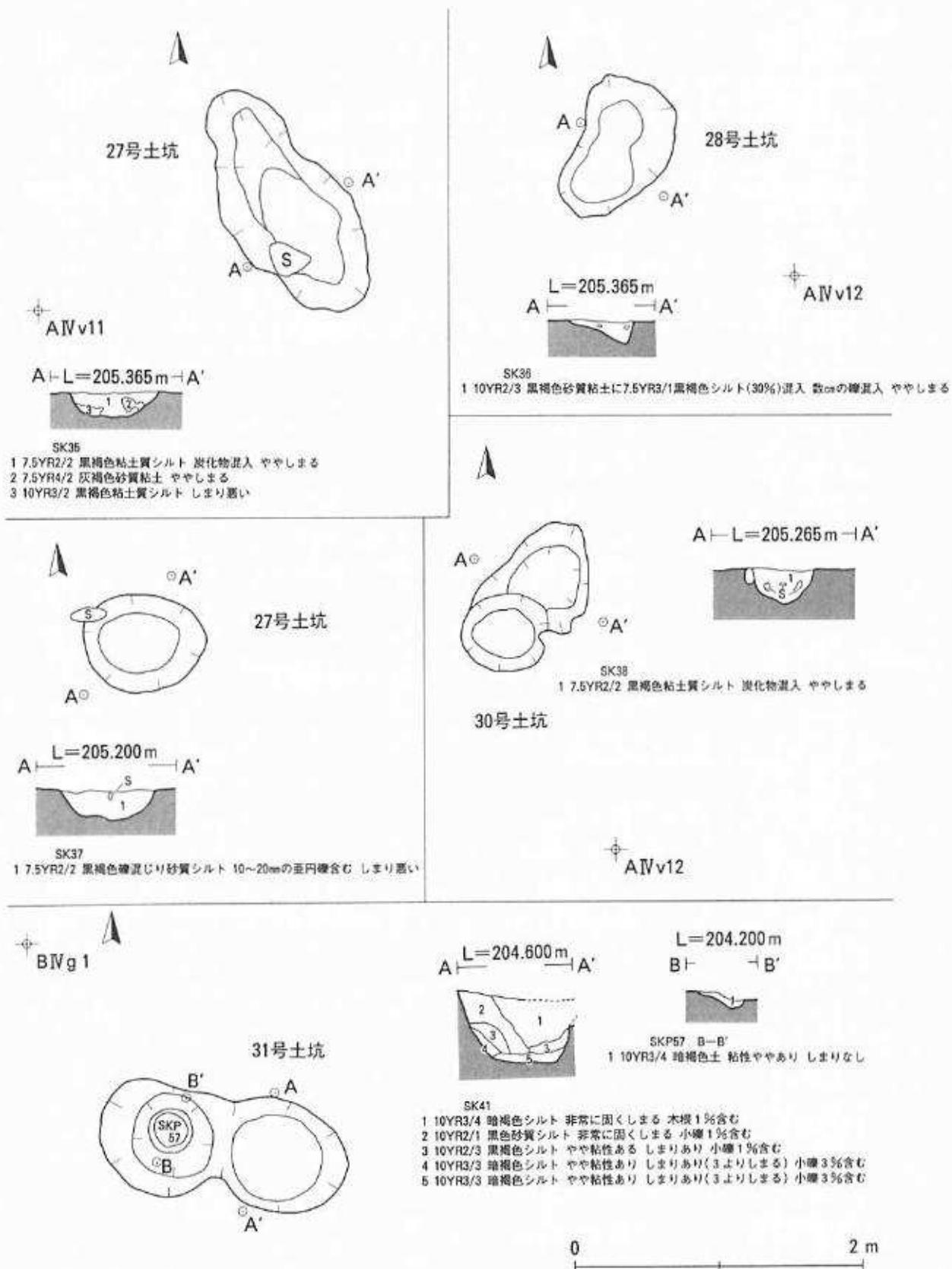
〈検出状況・重複関係〉 Ⅶ層(地山・礫層)検出

〈規模・平面形〉 開口部径98cm×86cmの不整な真円形

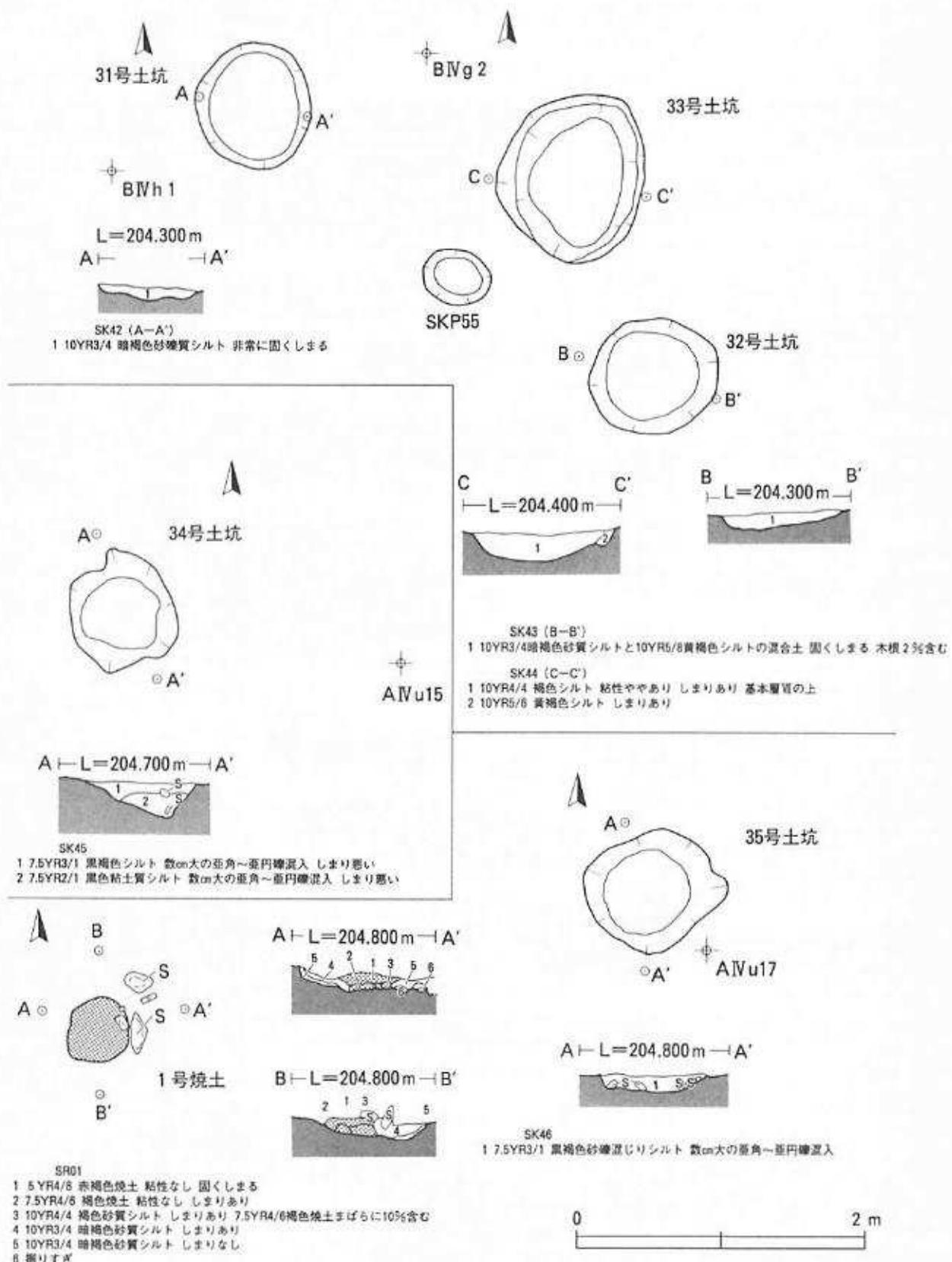
〈断面形・埋土〉 断面形は皿形状で、埋土はしまりない。

時期

時期は不明である。



第24図 27~31号土坑



第25図 32~36号土坑、1号焼土遺構

4 焼土遺構・柱穴状土坑

焼土遺構は、住居跡に伴わないので1基検出している。

円形のプランを持つ小型の土坑は調査区全体で90基が検出されている。単独で検出されたものは3基のみで、すべて4つの集中区の中に収まる。位置や規模は表2にまとめている。

S R 01焼土遺構 第25図 写真図版25

遺構

〈位置〉 調査区南側グリッドB III f 23

〈検出状況・重複関係〉 Ⅷ層褐色砂質シルト層面で検出した。重複はないが南側に1m離れてS K I 13北壁が落ち込む。また東側にはS I 03がある。

〈規模・平面形〉 焼成部は44×40cmの真円形。東側に30cm大の石灰岩が置かれる。石灰岩に焼成は認められない。

〈断面・厚さ〉 焼土は非常に焼成がよく固くしまる。厚さは10~12cm。石灰岩は埋め込まれている様子が見える。

時期

出土遺物はないが、周辺の出土遺物から縄文時代前期から中期に属すると考えられる。また、S I 13の屋外炉の可能性もある。

S K P 29・30・212 第26・30図 写真図版22

遺構

S K P 29と30はともにⅧ層褐色土面での検出である。平面形は29は梢円形状であるが底面はどちらも真円形を呈す。断面形は皿形状で壁はなだらかに立ち上がる。埋土はどちらも暗褐色の砂質シルトを中心とする。

S K P 212は調査区北側Ⅸ層（礫層・地山）での検出で、平面形は梢円形状を呈す。壁はやや垂直気味に立ち上がる。埋土は黒褐色土の单層。

時期

3基とも出土遺物はない。よって明確な時期は特定できないが、S K P 29・30は縄文時代前期から中期に属すると考えられる。

柱穴群1(S K P 01~S K P 25) 第26図 写真図版22

遺構

調査区南側の段丘状に高まる地点に位置する。Ⅸ層（地山・川原石）での検出である。25基の開口部最小値の平均値は31.2cmである。掘っ立て柱建物跡状の柱穴列は一部認められるものの全体の構造を把握できない。埋土は礫を伴った黒褐色土の单層。

時期

不明である。

柱穴群2(SKP 26～SKP 47) 第27図 写真図版23

柱穴群1の北東側に位置する。検出面は地山面で柱穴群1と同じである。1に比べ大型のものが多く18基の開口部最小値の平均値は37.9cmである。規則性は認められない。

埋土は柱穴群1と同じ单層で礫を伴う。

時期

不明であるが柱穴群1と同時期である可能性が高い。

柱穴群3(SKP 48～SKP 90) 第28・29図 写真図版24

遺構

旧河川は調査区の東側を北西から南西に流路を取ると考えられるが、グリッドB IV f・g・3・4付近で流れを西に変える。その地点から西側にかけて、42基の柱穴状小土坑が検出された。

検出面は旧河川底面の地山面である。

柱穴群のある地表面は南北は、北から南に向かってなだらかな斜面を形成する。その幅約8m。東西は東側がやや高くなり、ほぼ平坦に西に向かう。その西側は県道に削平されているため判別しないが、現気仙川の位置から考えれば急激に落ち込むのではないかと推測される。

旧河川は上位にV層、下位にVI層黒褐色シルトが覆う自然堆積。

柱穴は開口部径30～40cm(A)のものと径20cm前後(B)のものに大別できる。

Aは主に西側に分布する。周囲には同時期と思われる土坑(SK)が6基存在する。住居跡状の配列は確認できない。また、断面形から見ても明確な掘方は認められない。

Bは中央部から西側に位置する。SKP 70・71は開口部径18cmで、深さは斜めに30cmほど入り込む。その方向で円形状に10基ほどの柱穴が配列しているのが確認された。床面には焼土などの施設もなく土器も出土していないことから住居状とは登録していないが、自然地形を利用した住居跡の痕跡であろうか。

全体的に見て、東西に長くのびるその形状は自然地形を利用したロングハウス状にも見える。

時期

周辺から、前期前葉の土器が出土する。また、埋土状況から見ても当時代に属すると考えてよいと思う。

柱穴群4(SKP 200～SKP 211)(7号竪穴住居状遺構) 第30図 写真図版25

遺構

調査区北側の南東よりに位置する。旧河川の右岸端にあり、南に向かってなだらかに傾斜している。

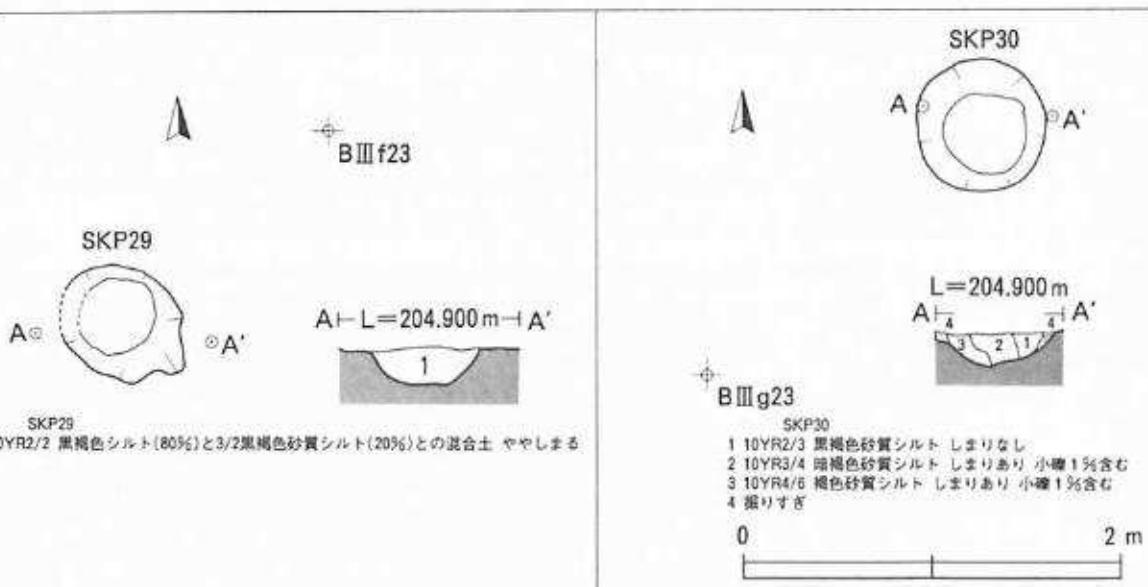
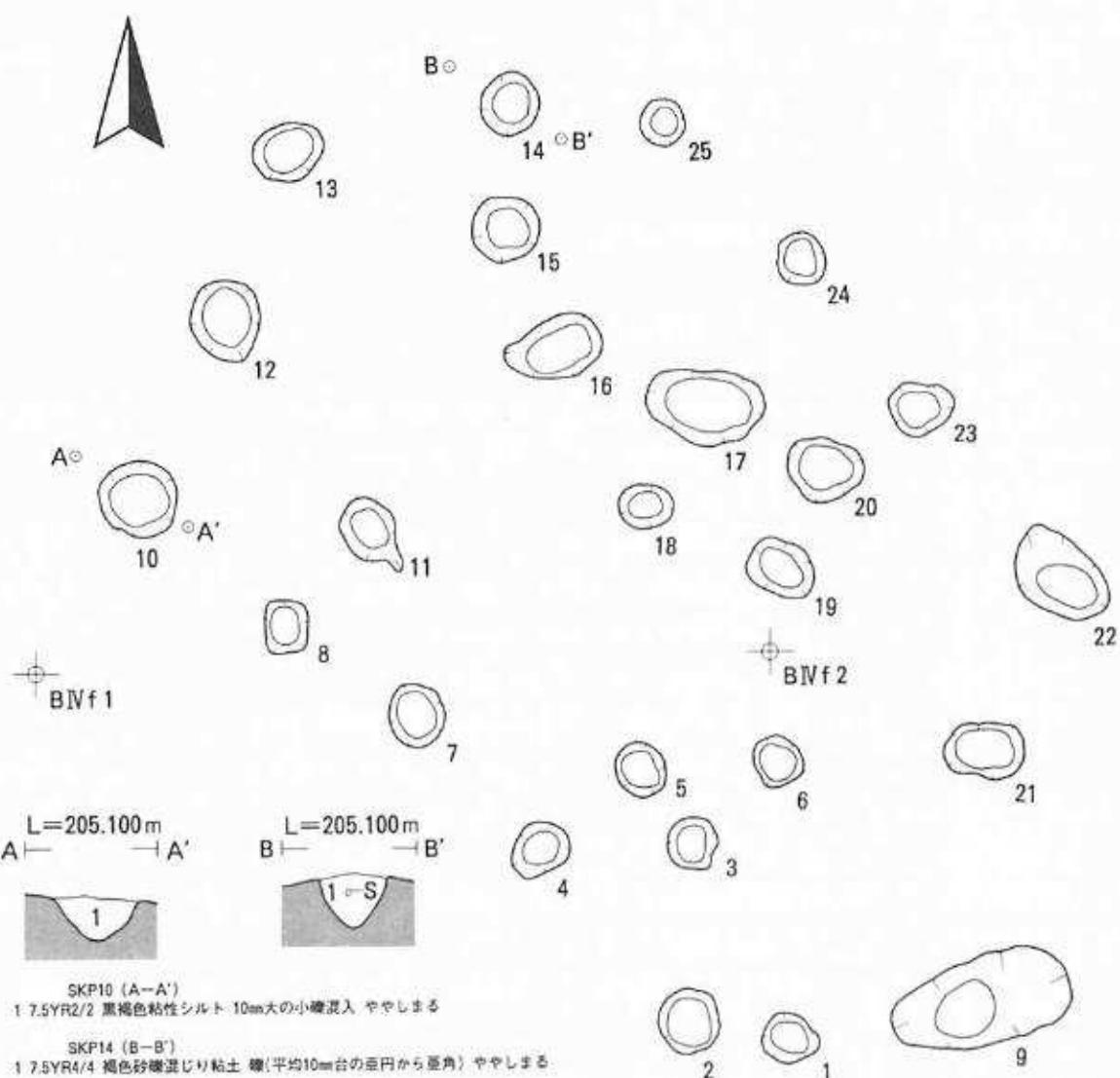
検出面はVII層褐色シルト面。平面形が真円形を呈するものがほとんどで、12基の口径の平均値は25.7cm。深さは最大のもので22cmを計るが、10cm前後のものが多く、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

円形もしくは梢円形状の配列が認められ、土器片も散在する。

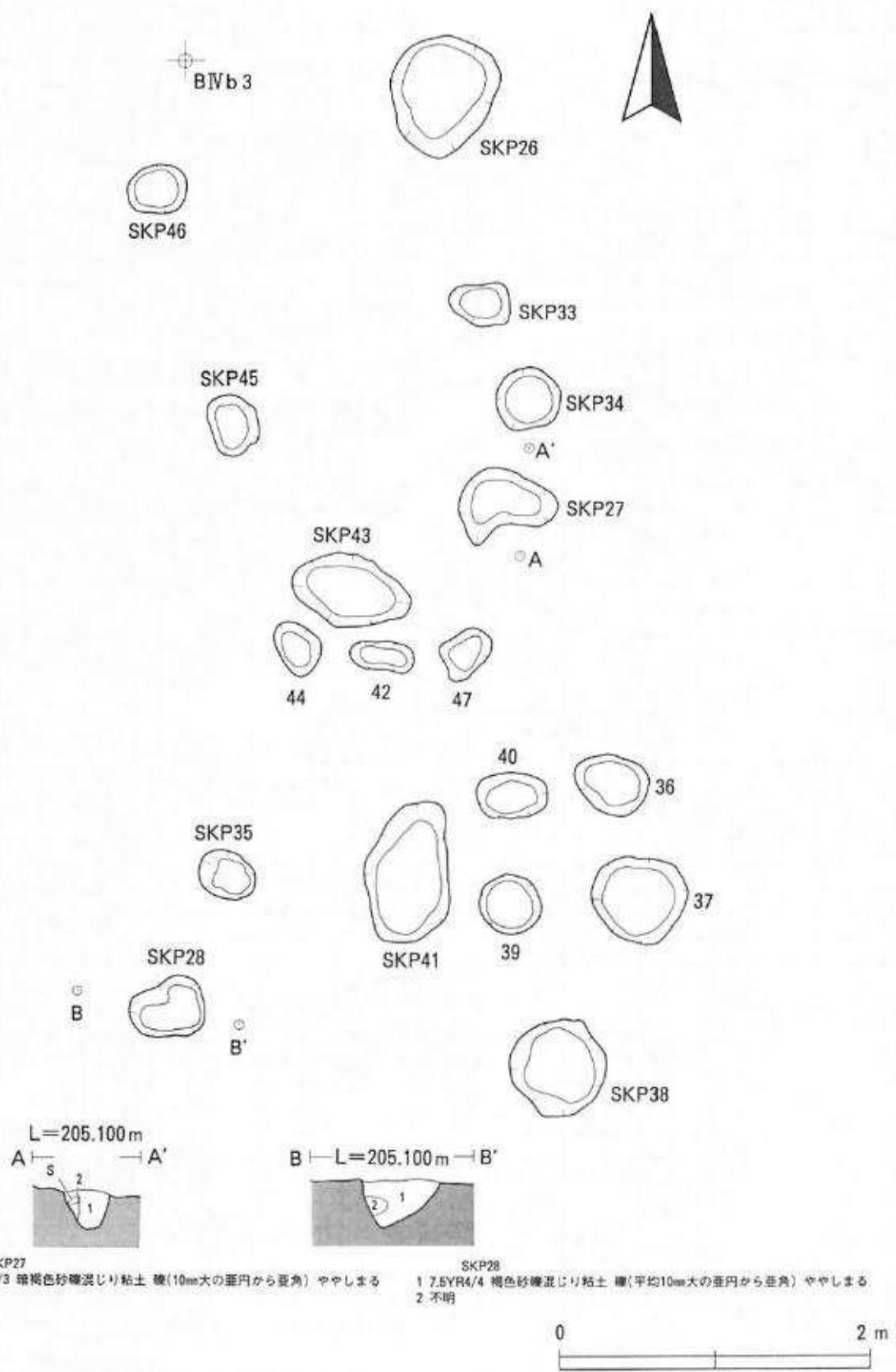
埋土は、すべて黒褐色土の单層。

時期

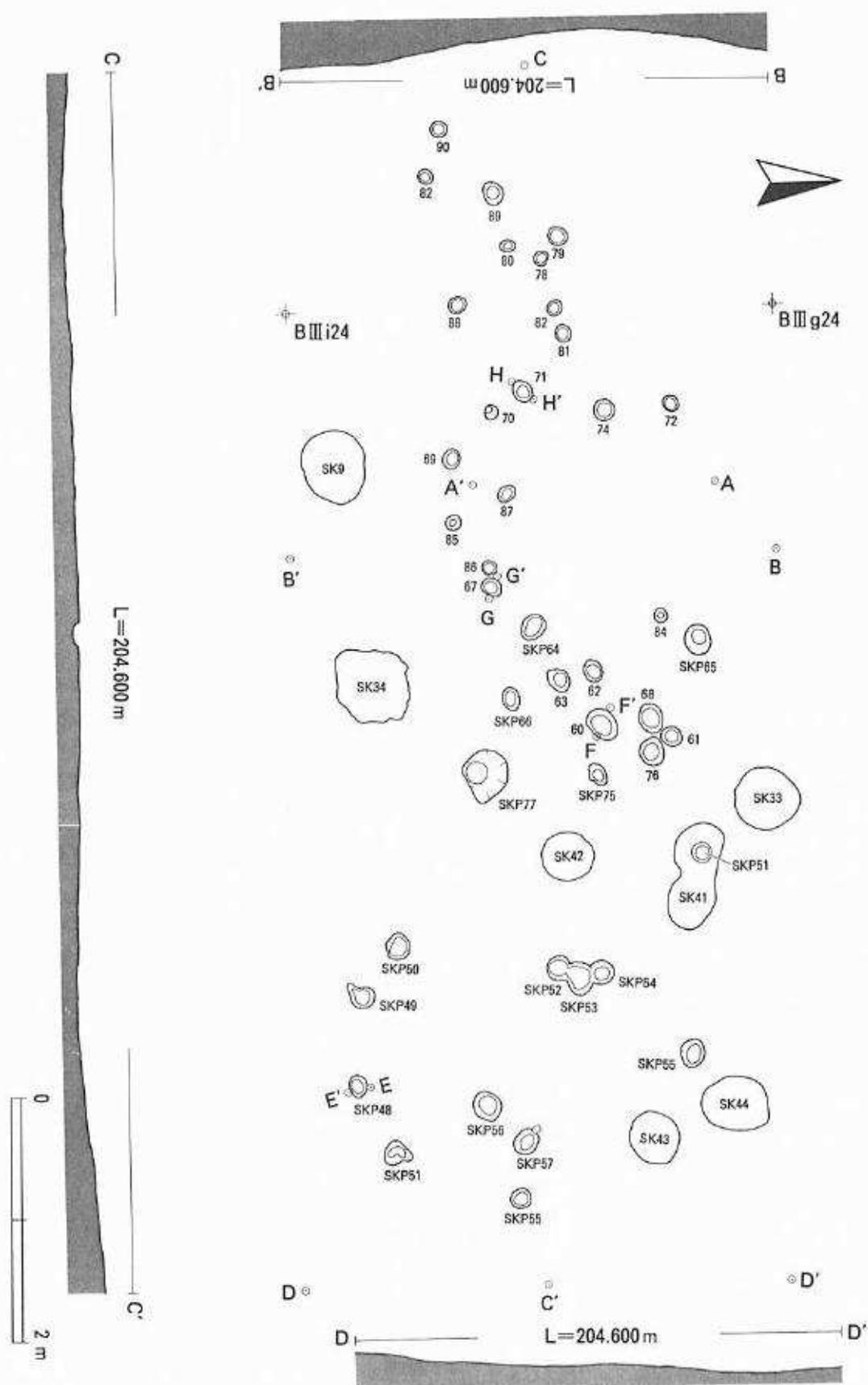
縄文時代中期に属すると考えられる。



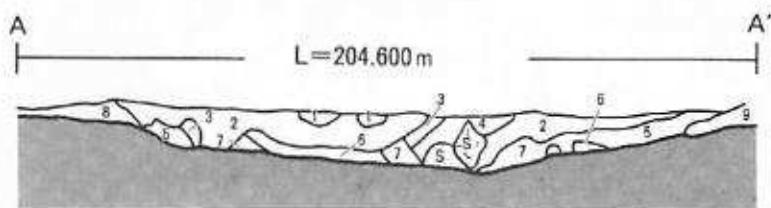
第26図 柱穴群1 SKP29・30・212



第27図 柱穴群2

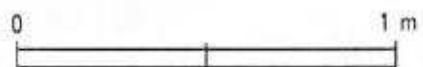
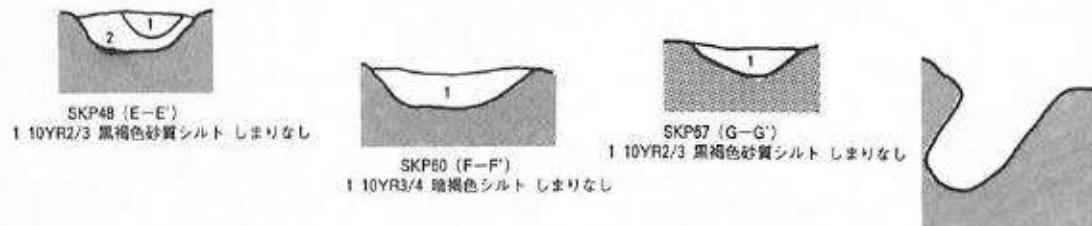
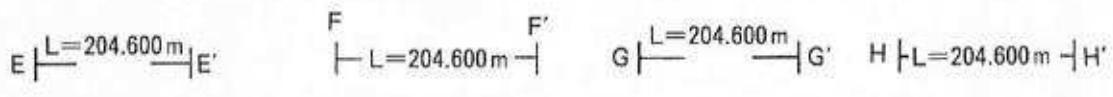


第28図 柱穴群3

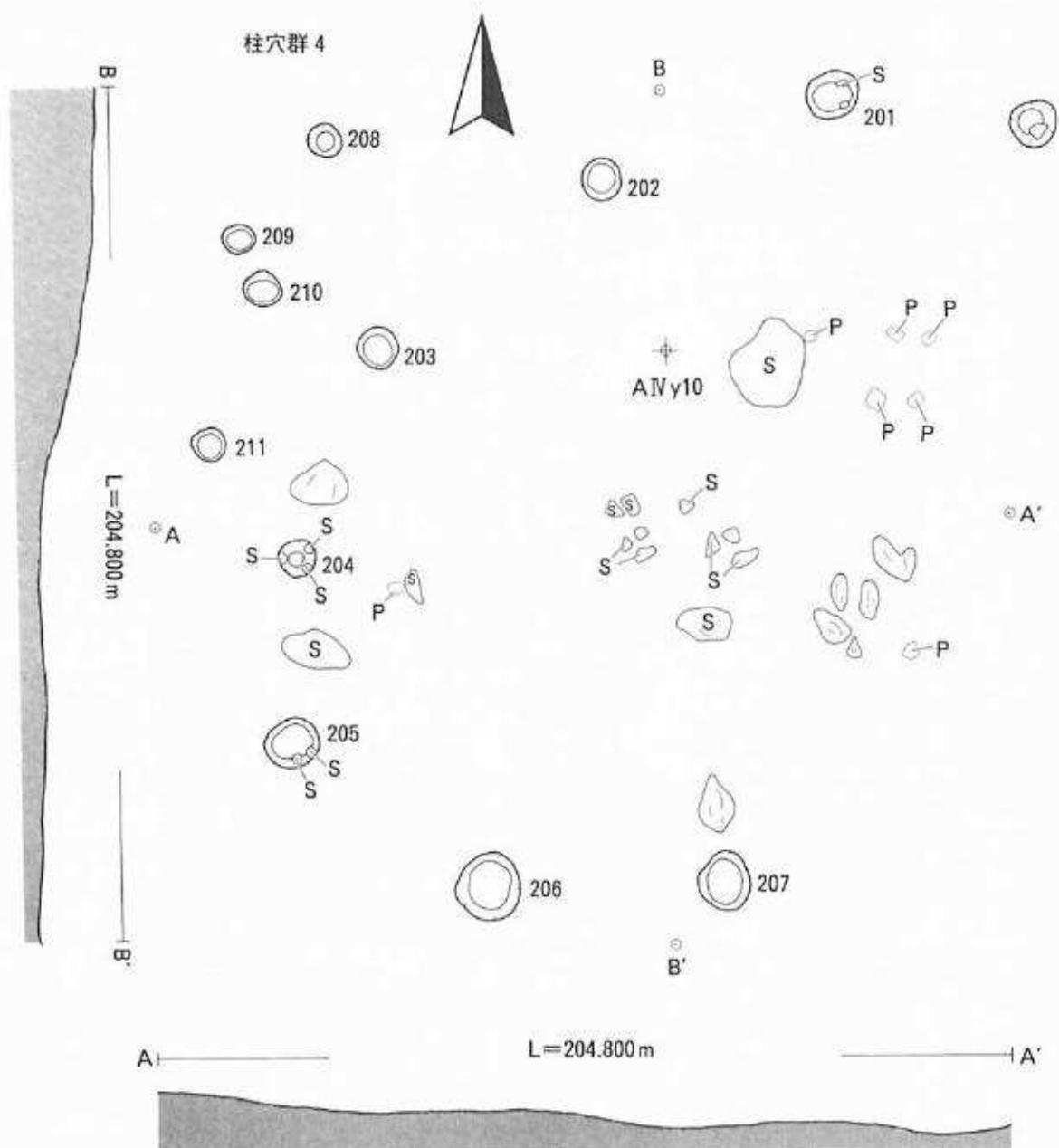


SI15?

- 1 10YR3/4暗褐色シルトと10YR5/8黄褐色砂質シルトをブロックで含む混合土 固くしまる
- 2 10YR2/3 黒褐色砂質シルト しまりあり 小礫10%含む いわゆる便層
- 3 10YR2/2 黒褐色砂質シルト しまりあり 2よりやや色調が暗い
- 4 10YR4/4 暗褐色砂質シルト しまりややあり
- 5 10YR4/4 暗褐色砂質シルト 固くしまる やや粒の大きい小礫含む 5%
- 6 10YR4/4 暗褐色砂質シルト とても固くしまる(5より固い) 5cmの大の小礫含む
- 7 10YR5/8 黄褐色シルト とても固くしまる 中せり火山灰起源の粘土か?
- 8 10YR8/8 黄褐色シルトや黒褐色シルト等を混合する(擾乱?)
- 9 地山



第29図 柱穴群3断面図



第30図 柱穴群4 SKP212

SKP	口 径 cm	深さcm	位 置	群	備 考	SKP	口 径 cm	深さcm	位 置	群	備 考
1	30×29	10	B IV f 1	1		53	43	8	B IV g 1	3	暗褐色シルト
2	35×35	16.7	B IV f 1	1		54	36	3	B IV g 1	3	褐色シルト
3	28×28	9.9	B IV f 1	1		55	38	8	B IV g 2	3	暗褐色砂質
4	34×30	19.8	B IV f 1	1		56	34	3	B IV h 2	3	暗褐色シルト
5	30×26	5.9	B IV f 1	1		57	57	12	B IV h 2	3	
6	27×27	15	B IV f 2	1		58	32	4	B IV h 2	3	黒褐色シルト
7	35×30	18.7	B IV f 1	1		59	40	5	B IV g 1	3	
8	28×25	2.7	B IV e 1	1		60	48	9	B III g 25	3	
9	98?×45	23.6	B IV e 1	1		61	46	4	B III g 25	3	黒褐色砂質
10	43×42	19.9	B IV e 1	1		62	50	7	B III g 25	3	褐色粘土
11	36×30	21.6	B IV e 1	1		63	26	7	B III g 25	3	暗褐色シルト
12	45×38	6.2	B IV e 1	1		64	24	1	B III g 25	3	
13	40×33	9.4	B IV e 1	1		65	37	5	B III g 25	3	
14	35×32	24.4	B IV e 1	1		66	36	19	B III h 25	3	
15	38×36	5.2	B IV e 1	1		67	30	7	B III h 25	3	
16	54×32	5.8	B IV e 1	1		68	27	11	B III g 25	3	
17	60×42	6.5	B IV e 2	1		69	29	20	B III h 25	3	
18	30×25	2	B IV e 2	1		70	22	7	B III h 25	3	深さ26cm
19	38×30	5.4	B IV f 2	1		71	30	44	B III h 24	3	斜め
20	45×40	7.1	B IV e 2	1		72	27	2	B III g 24	3	暗褐色砂質
21	44×38	12	B IV e 2	1		73					欠
22	60×36	4.6	B IV e 2	1		74	36	5	B III g 24	3	
23	35×28	5.8	B IV e 2	1		75	29	3	B III g 25	3	褐色シルト
24	28×26	9.1	B IV e 2	1		76	30	7	B III g 25	3	
25	26×24	8.4	B IV e 2	1		77	68	18	B III h 25	3	黒褐色砂質
26	68×56	2.5	B IV b 3	2		78	24	12	B III g 25	3	
27	64×35	23.2	B IV b 3	2		79	30	12	B III g 25	3	
28	48×37	21.3	B IV c 2	2		80	24		B III h 23	3	
29	72×57	20	B III f 23			81	26	7.6	B III g 24	3	
30	70×70	18	B III f 22			82	24	1.1	B III g 23	3	
31				欠		83	24	6	B III h 23	3	
32				欠		84	22	4.1	B III g 23	3	黒褐色砂質
33	38×26	5.3	B IV b 3	2		85	26		B III h 24	3	暗褐色砂
34	44×40	9	B IV b 3	2		86	24	3.2	B III h 25	3	暗褐色砂
35	38×32	11.8	B IV c 3	2		87	30	8.9	B III h 24	3	暗褐色砂
36	52×37	6.5	B IV c 3	2		88	28	10.1	B III h 23	3	
37	62×56	5.2	B IV c 3	2		89	40	17	B III h 23	3	
38	60×60	14.9	B IV c 3	2		90	26	7.4	B III h 23	3	
39	44×38	15.7	B IV c 3	2							欠
40	48×30	2.5	B IV c 3	2		200	27	17.5	A IV x 10	4	
41	94×60	3.3	B IV c 3	3		201	32	6.5	A IV x 10	4	
42	40×15	1.6	B IV b 3	2		202	22	12.4	A IV x 9	4	
43	72×48	17.1	B IV b 3	2		203	24	13.2	A IV x 9	4	
44	35×25	5.2	B IV b 2	2		204	22	9.3	A IV y 9	4	
45	40×30	6.9	B IV b 3	2		205	31	11.1	A IV y 9	4	
46	42×32	12.3	B IV b 2	2		206	38	8.4	A IV y 9	4	
47	32×25	4.8	B IV b 3	2	暗褐色砂質	207	34	12.2	A IV y 10	4	
48	32	11	B IV h 2	3	黒褐色砂質	208	20	10	A IV x 9	4	
49	32	8	B IV h 1	3	黒褐色砂質	209	18	10	A IV x 9	4	
50	28	7	B IV h 1	3	黒褐色砂質	210	22	9.9	A IV x 9	4	
51	22	5	B IV h 2	3	暗褐色シルト	211	18	22	A IV y 9	4	
52	32	4	B IV g 1	3	褐色シルト	212	42×32	17	A IV u 14		

表2 柱穴状土坑観察表

5 出土遺物

今回の発掘調査では縄文・弥生土器が大コンテナで7箱出土している。石器は極端に少なく10点のみである。また、その他では土偶などの土製品が出土している。

① 土器 第26~45図 写真図版26~38図

縄文土器がほとんどであるが弥生土器も見られる。また平安時代の壺も出土している。

掲載・記述にあたって以下の通りに時期区分を行った。

第Ⅰ群 縄文時代早期から前期

第Ⅱ群 縄文時代中期

第Ⅲ群 縄文時代後期

第Ⅳ群 縄文時代晚期

第Ⅴ群 縄文時代晩期末葉から弥生時代

第Ⅵ群 その他の土器

第Ⅶ群 時代不明の土器

第Ⅷ群 土製品

これらの小区分については、従来の土器形式に準拠した。

第Ⅰ群土器

出土数は少なく、時代の判別できる破片すべてを掲載している。

1類 早期中葉の土器群 (128)

調査区北側の黒褐色土層や南側の疊層上から出土している。貝殻条痕文だが小破片のために詳細不明。胎土に多くの小石を混入させ、薄手である。

2類 早期後葉の土器群 (64・65・129~133)

いわゆる条痕文や表裏縄文を特色とするものをまとめた。条痕文土器には貝殻背圧痕による横位の文様を表裏に施すもの (64・129・130) と表に縦、裏に横位の施文を施すもの (131) がある。後者には繊維が多少含まれているようである。表裏縄文を施す土器の138は焼成がもろく、胎土に繊維を含まない。

3類 前期初頭~前葉の土器群 (1・2・5~7・60・67・89・92・103・107・126・134~142)

第Ⅰ群の土器の中で最も多い出土量である。遺構内出土の1は大木1式、2、5~7は大木2aもしくは2bに属する。住居状遺構の床面一括で出土した土器 (60) は小波状口縁の深鉢で大木2a式、66・89・92・103は詳細は不明だが繊維を混入させることから当時期とした。107は上川名II式もしくは大木1式と思われる。遺構外では134は上川名II式、135~137が大木1式、138~140が大木1式か2a式、141・142が大木2b式に比定される。

4類 前期中・後葉の土器群 (8・9・68・80・127・143)

出土量は少なく、掲載した5点の破片も摩滅が激しく、詳細は把握できないが中葉期特有の粘土紐貼り付け痕や、後葉期に伺える沈線の特色を持つ土器を掲載した。8は中葉期、9は後葉期に属すると考えている。

80は鋸状沈線、127は梯子状の粘土紐貼り付けの装飾体を持つ特色から大木5式か。143は摩滅が激しいが中葉期の大木3~4式ととらえている。

第Ⅱ群土器

出土数はV群に次いで多く、遺構内で完形品が出土している。

1類 中期前葉の土器群 (71・81・82・144~146)

71は口縁部上位に区画された部位に斜位の連続沈線を施し、その上に横位の平行沈線を巡らす。波状口縁と思われる。81は胴上位に最大径を持つ深鉢で簡略された粘土紐貼り付けによる渦巻き文縁に縄文の圧痕を巡らす。大木7b式から8aへの変遷期の土器か。同遺構から出土の82も同時期の土器片と考える。

また遺構外出土145も81と同類の土器であるが、口縁部の区画が4単位で、その区画内を縄文原体圧痕で埋める。81よりやや古い形のものか。

2類 中期中葉の土器群 (10・11・83・96・147~155)

遺構内出土の10は粘土紐による、11は沈線による渦巻き状の装飾体を施すが、小破片で判断が付きにくく、前葉1類に属する可能性がある。83・96・147・148は大木8a、149~155は8b式に比類する。

3類 中期後葉の土器群 (13~15・61・72・93・156~159)

遺構内出土の13・14は胴部の中位にやや膨らみを持つ大型の深鉢と、胴下位で細くなる小型の深鉢で磨り消しによる大柄のJ字やS字の文様を施す。隆線文系に近く大木10式のやや新しい同遺構の床面から出土した15は大型の深鉢で櫛目状の条痕文を施す。61は上記の磨り消しによる文様とは逆の充填による文様態（J字か）を施す破片。72は肥厚された口縁部下に刺突文が巡る。156と同一個体だとすれば（その可能性が高いが）その器形は胴中央がやや膨らみ胴下部で細くなる壺形となるであろう。93は小型で土製品か？157は磨消が中途な例。また158は磨消、159は縄文を充填している。

第Ⅲ群土器

1類 後期前葉の土器群 (17~19・73・84~86・110?・161~163)

17~18は同一個体と思われ、平口縁。19はS字状装飾体。原体圧痕を施した小波状の隆帯は口縁部を巡り、頂部で突起となる。88も同器形の土器片と思われる。73・84・85は沈線による渦巻き文もしくは円文を施す。161・162は小波状の口縁、163は沈線による渦巻き文を施す。

2類 後期中葉の土器群 (12・24・75~77・164~166)

24は山形口縁の小型深鉢で沈線区画内を縄文で充填する。74~76は磨消が施され、74・75は大柄な磨消文様となる土器か。164は往口土器の胴部資料。165・166は器種は定かではないが沈線文様を持つ。そのうち165は貼り瘤がみられるが、弥生時代の壺（V群C類）の可能性も比定できない。

3類 後期後葉の土器群 (25~27・62・111・167~171)

25は沈線のみの施文の薄手の破片でこの類に組み入れた。26は平口縁の入組文？を施す深鉢の口縁部。27・62・171は羽状縄文の深鉢。111は平口縁で台状の突起が付く。平行沈線と磨消による曲線文内に縄文を充填する。167は胴部がくびれ、頂部が台状を呈する山形口縁で胴部文様はいわゆる「入組帶縄文」である。168は大波状口縁の破片で丁寧な磨消が施されている。

第Ⅳ群土器

出土数は少ない。

1類 晩期前葉の土器群 (28・104・172・173)

遺構内で出土した28・104は大洞BC式土器。172については壺形土器と考えられ、内部に煤が付着し、よ

く磨かれている観がある。口唇部に刺突を施す173については後期後葉に属する可能性も否定できない。

2類 晩期中葉の土器群（3・29）

大洞C1・C2式に比定する土器であり、遺構内のみに出土した。3・29はどちらも注口土器と思われ、雲形文を特色とする。

3類 晩期後葉の土器群（30・117・118・174～176）

工字文を特色とする土器である。いずれも小破片であるために器形が明確でないが、浅鉢が多いようである。遺構内出土の118については工字文が認められるが、2対の瘤状の突起が施されていることから晩期末葉大洞A'に属する可能性もある。175についても118と同様の疑問が残る。

第V群土器

全土器群の中で最も多い出土量がある。その中で完形に近い土器や施文のはっきりしている土器を選択して掲載している。器種においてのみ分類したが、時期はそれぞれの項の中で考察している。

A 鉢（31・32・97・112・119・177）

31は小型の鉢形土器は流水形の瘤を持たないで変形工字文を施す。32は粗製土器で内部において底部は腕型になる。よって鉢形に分類している。97・112・119は深鉢と思われ、内面に煤が付着し厚手である。

時期

遺構内におけるこれらの鉢形土器は、その出土状況から晩期末葉から弥生時代に属すると考えられるが、晩期から弥生時代と大きく捉えなければならないのかもしれない。31は弥生時代中期に属するだろうか。

B 浅鉢（20・33～41・79・94・106・114・120・121・178～190）

同群に属する器種の中で最も出土量が多い。変形工字文を主体とする土器がほとんどである。口縁部の形態からいくつに分かれる。

1類 内湾し立ち上がりが見えないもの（20・33・94・106・113・178～180）

全体像を把握できる個体がないが、全体的に薄手で小型のものが多い。すべてが平ら口縁で、貼瘤を持つ変形工字文は2段である。179はπ字状の施文がみられる。

2類 ゆるく内湾して垂直気味に立ち上がる（34・79・120・181～186）

34・181のように山形口縁のものと79・120のような平口縁のものとに分かれる。79や182のように内外面とも器面が朱いものがあり、全体的に丁寧に磨かれている観がある。また34や182は変形工字文を胴部中心より下位まで施文する。埋設土器である79や外面上に煤が付着する大型の181などから、器というより特殊な使い方をされていたのかもしれない。

3類 内湾して外傾もしくは外反するもの（35～38・114・187～189）

これらはすべて突起を持つあるいは刻みを持つ山形口縁である。口唇部に沈線を施文される場合がほとんどである。35のような大型のものはボタン状突起と山形口縁を、36のような小型のものは2個1対を基本とした山形口縁を呈するのではないかと予想される。上記の1・2類にみられる器面が朱いものはみられず、変形工字文を施すが比較的雑な感じがする。

4類 内湾せずに外傾もしくは外反するもの（39・121・190・191）

この類は浅鉢と言うよりは碗とした方がいいかもしれない。39は刺突文を施す2個1対の突起を持ち、山形口縁である。121は貼瘤を持たない流水型の変形工字文を器面全体に施す。190は口唇部に沈線を施す山形

口縁の椀？で、変形工字文は貼瘤をもつ平行沈線のみで施文する。（いわゆる変形工字文A型）唯一内面を黒色処理している。191はπ字状の施文を持つ変形工字文を施す。その直線的な形態から、121のような浅鉢か、31のように胴部が膨らむ器形となるかもしれない。

5類 不明な胴部資料（40・41）

40は口縁部が欠損しているがやや内済する要素を持つことから、2類に近いと考える。41は上記の浅鉢にない沈線内に刻みを施す。貼瘤状の突起もみられるが、沈線内に縄文を充填している。詳細はわからないが、小型の浅鉢と考えこの類に組み入れた。

時期

これらの浅鉢はほとんどが晩期末葉から弥生前期に属すると考えられ、そのうち4類の121は小田野編年（小田野1987）の第I b期の土器群に類似する。

C 壺（42・43・63・69・95・98・99・122・192～195）

42・43・99・194の口縁部は195の壺形の口縁部と同器形と考えられる。ただし43は小型の壺の口縁部であろう。いずれも変形工字文を施す。42・43・192は口縁部の上部内側に沈線が巡るが、99はない。95は192と同類の大型壺の胴部破片。98は集石土坑の底部で出土した壺で、外面が漆膜で覆われる（？）。192と同様にやや肩が張る器形となる可能性が高い。122は貼り瘤は確認できないが変形工字文と考えられる。ほかの破片より厚みがあり、広口壺の可能性もある。192は無文の壺で外面はよく磨かれている。胴部下位から底部状況はわからないが、ややしばむ器形か。69は胴部に縄文が施文される。器形から広口壺の可能性がある。195は壺の胴部の資料で、肩部がやや張る器形となる。

時期

これらは縄文晩期末葉～弥生時代前期に位置づけられると考える。ただし69の出土地点からあまり離れない（10m前後）同層位から203が出土しており、その土器から考えれば69の時期は弥生時代後期まで下るかもしれない。

D 変形土器（21・44～56・100・101・108・109・123・124・196～204）

変形土器はS I 08やS I 12埋土を中心に出土している。口縁部を磨り消し後に横ナデ、内部をミガキ調整しているものが多い。口縁部の形状から5タイプに分かれる。

1類 口縁部が短く外傾する（44・196・197）

44は、口縁部が小さく外傾し小波状、196は6単位と思われる突起を持つ。最大径は胴最上部にあり、底部までの絞り込みもゆるい。197は口縁部に4単位と思われるボタン状の突起と6単位と思われる刻みのある山形突起を施す。

2類 口縁部がやや短く外反する（45・46・100・198）

45・46は口縁部がやや外反するが、最大径は肩部にある例。100・198も同器形と思われ、これらは変形土器の中ではやや薄手で平口縁となる傾向が見える。また胎土に小石が多めに混入する。

3類 口縁部が長く、外傾する器形（47・101・199・200）

47は口縁部が長く外傾し、磨り消しから横ナデする調整も丁寧な感じがする。口縁部と胴部の膨らみの径がほぼ同じとなるが、胴部の膨らみは小さい。199はやや口縁部の方の径が大きくなる器形か。200は胴部の中央部で最大径となり、胴下部でややしばむ器形。このタイプは小波状口縁となる傾向がある。

4類 口縁部が垂直気味に立ち上がる (21・48~50・123・124・201・202)

48・49は小波状口縁で口縁上部がやや外反する。48は口縁部から胴部にかけてなだらかに落ち込むのに対して、49は口縁部と胴上部に明確な段を持つ。50・123は48と同型で平口縁で口唇部に原体圧痕が施される。124は口唇部に刻みが入る。201は、口縁部がややキャリバー状に内湾し、小波状。以上のタイプは胴部があまり膨らまないと思われ、唯一の半完形である202から、底部の絞りも緩やかになるのではと予想される。また、ほかに例のない口唇部に原体圧痕や刻みなどを施すものや、1類に似た突起などを口縁部に施す土器もみられる。しかし大波状口縁の202は口縁部の形状はあまり外反しないが、胴部が大きく膨らみ、口縁部と胴部の境目に原体圧痕を施すという他と違う特色を持ち、4類とは別に分類しなければならないかもしれない。

5類 口縁部に沈線を施文する。(203)

当類には他の壺形土器と明らかに異なる203のみを該当させた。いわゆる天王山式土器である。口縁部の状況は長く外傾する3類に似るが、胴中央で大きく膨らみ、底部でしほむ器形である。口縁部に刺突文、頸部から胴上部にかけて沈線による弧状のモチーフが描かれる。非常に焼成よく固い。

6類 器形の明確でない口縁部の破片や胴底部についてまとめた (51~56・108・109)

51・56はその器形から壺形土器とした。51は胴上部での膨らみが大きくなる4類に、56は胴中央部で膨らむ200に似た器形で3類に分類できるか。43は口縁部を磨り消さずほぼ垂直に立ち上がる。胴部の膨らみが大きいことから壺の可能性も考えられる。53は口唇部に装飾体を、54は隆体を施す。55は無文であり、深鉢か壺の可能性も考えられる。108・109については摩滅が激しく、また小破片のために判別できない。

時期

これら壺形土器は弥生時代に属する。そのうち5類は弥生時代後期に位置づけられる。

E その他 (22・204~209) (208は写真のみ)

22は台付浅鉢の台か。205・206は高壺の脚部か。207は台付き浅鉢 208は内黒の椀の脚部?。209の蓋は錯文らしき施文がある。

時期

晩期末から弥生時代に属すと考えれるが、そのうち209は小田野編年（小田野1987）の第Ⅲ期の土器群に類似する。

第IV群土器

出土数は少なく1類は1破片、2類は2破片のみの出土で、2類は状態のよい方を掲載した。

1類 繩縄文時代の土器 (210)

後北C 2式の壺形土器の小破片である。当时期に属する土器片は1点のみであり、他の弥生土器との関連は把握できなかった。

2類 平安時代の土師器 (211)

内黒。回転糸切りで底部が切り離されている。

第Ⅸ群土器

遺構内で出土した時期不明な土器片と遺構内外の出土底部をまとめた。

1類 時期不明な口縁・胴体部破片 (4・16・68・71・72・86・87・90・91・102・113)

4はミニチュア土器か? 16は大型の深鉢、もしくは壺形土器で口縁部が肉厚する。胴部は櫛目状に磨かれ
る。底部が大型で、底部から胴下部の立ち上がりが緩やかである。胎土はやや小石が多く混入する。天王山
式の土器と考えたが、確信がない。68は磨り消しが施された深鉢の破片。71・72は縄文時代中期後葉の土器
群(Ⅱ群3類)に属する土器の出土した同遺構内の出土土器で、当時期に當てはめるべきであろうが、71は
粗製土器のために確証が得られない。ただし床面に近い出土状況から中期後葉から後期前葉頃の土器と思
われる。72は71と違い出土層位において信頼性が薄く、また器形も浅鉢の可能性もあり、時期は縄文時代中期
後葉から弥生時代と幅が広くなる。その他はすべて土坑で出土している深鉢の小破片。90は縄文時代中期に
属するであろうか。102は比較的多く出土している変形工字文を施す浅鉢の破片にも似る。

2類 時期不明な底部 (112・212~216)

212は底部の立ち上がりから壺形土器と思われる。ほかはすべて深鉢と考えている。

第Ⅹ群土器 (23・57~59・105・125・217~226) (218は写真のみ)

土偶などの土製品をまとめた。

判別確かな土偶の出土は1点のみ。57は弥生時代の土偶の頭部。58は土偶の脚部であろうか。217・218は
不明な土製品で、小さな刺突文が施される。

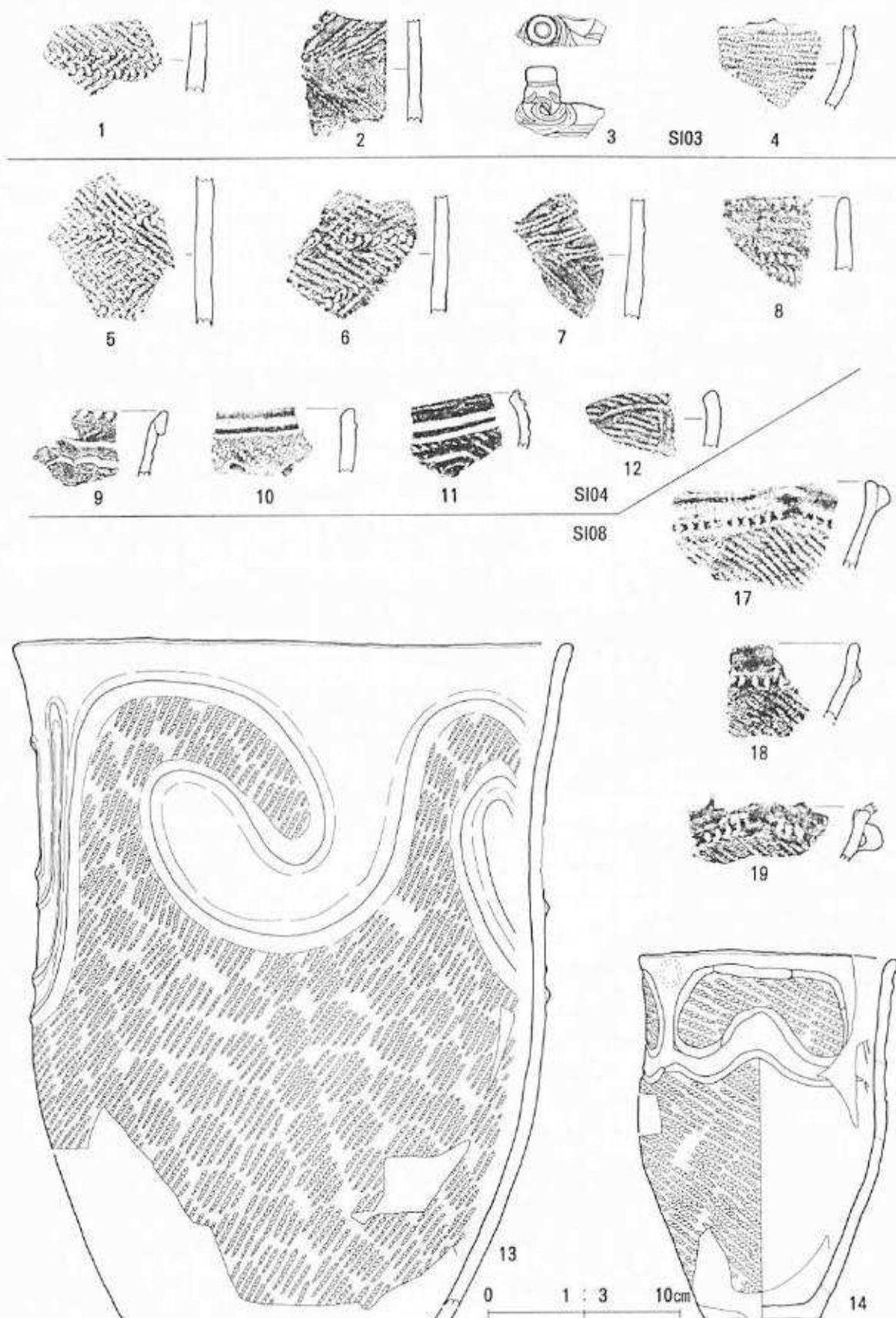
時期

217は弥生時代の可能性が高い。ほかのミニチュア土器については時期は不明であるが、224は縄文時代後
期前葉に属するかもしれない。

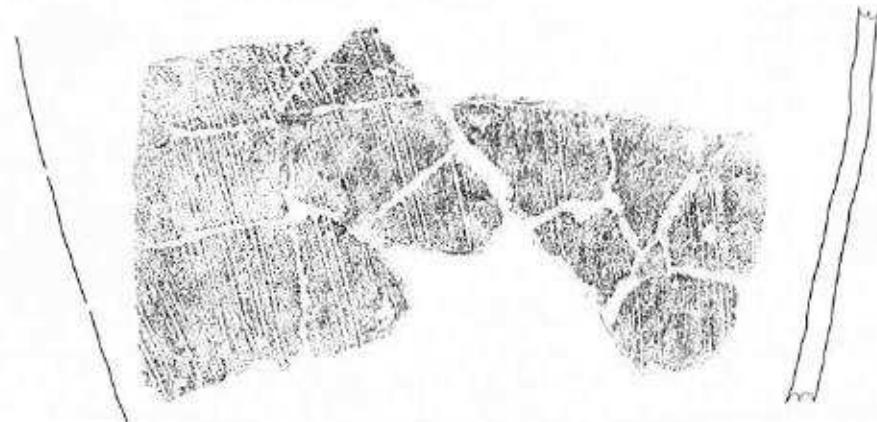
②石器 第46図 写真図版39

土器と比較し、石器の出土量は非常に少ない。

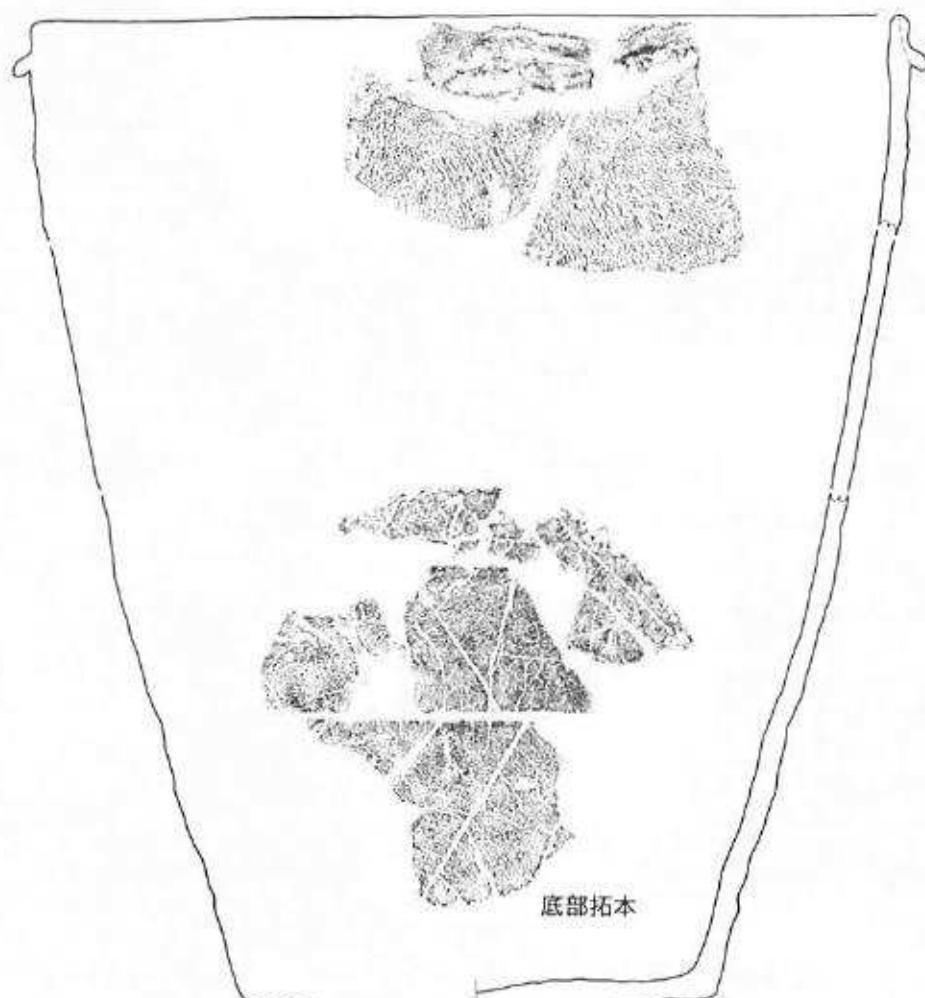
226は長さ11cmの石斧片面が剥離されているが、片面が欠損(使用中に2つに割れた)可能性もある。材
質は北上山地産の頁岩。227は搔削器、228は石鎧、229は両面を剥離調整している石匙である。230は凹石で
磨面がみられる併用型か。231は片面が磨られて扁平している。232は集石土坑を構成していた礫で材質は角
閃岩。機械で削られたかのように、断面形が真っ平らである。表面に磨り跡らしき痕跡が残る。233~235は
剥片で、材質も北上山地産である。



第31図 遺構内出土土器①



15

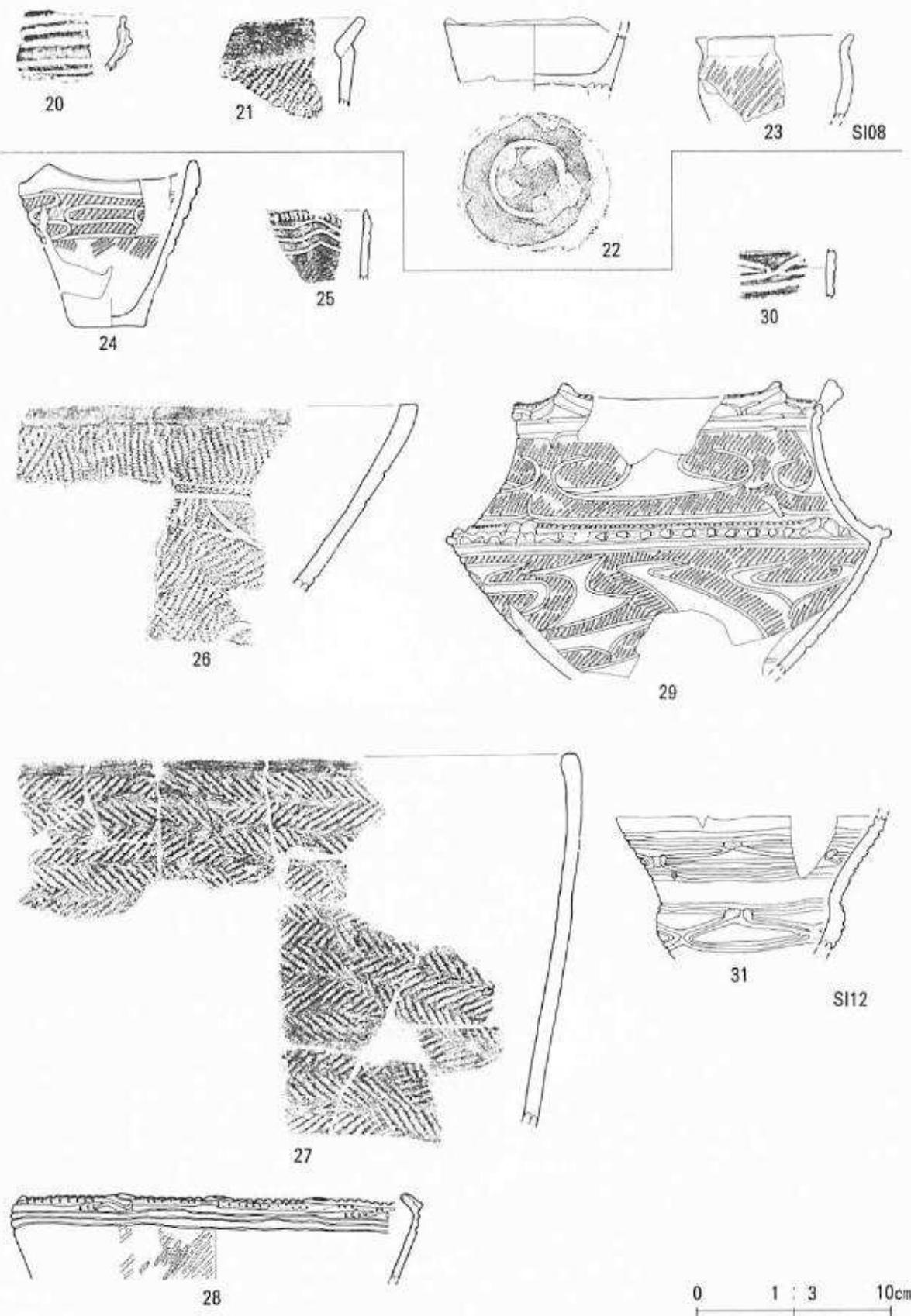


16

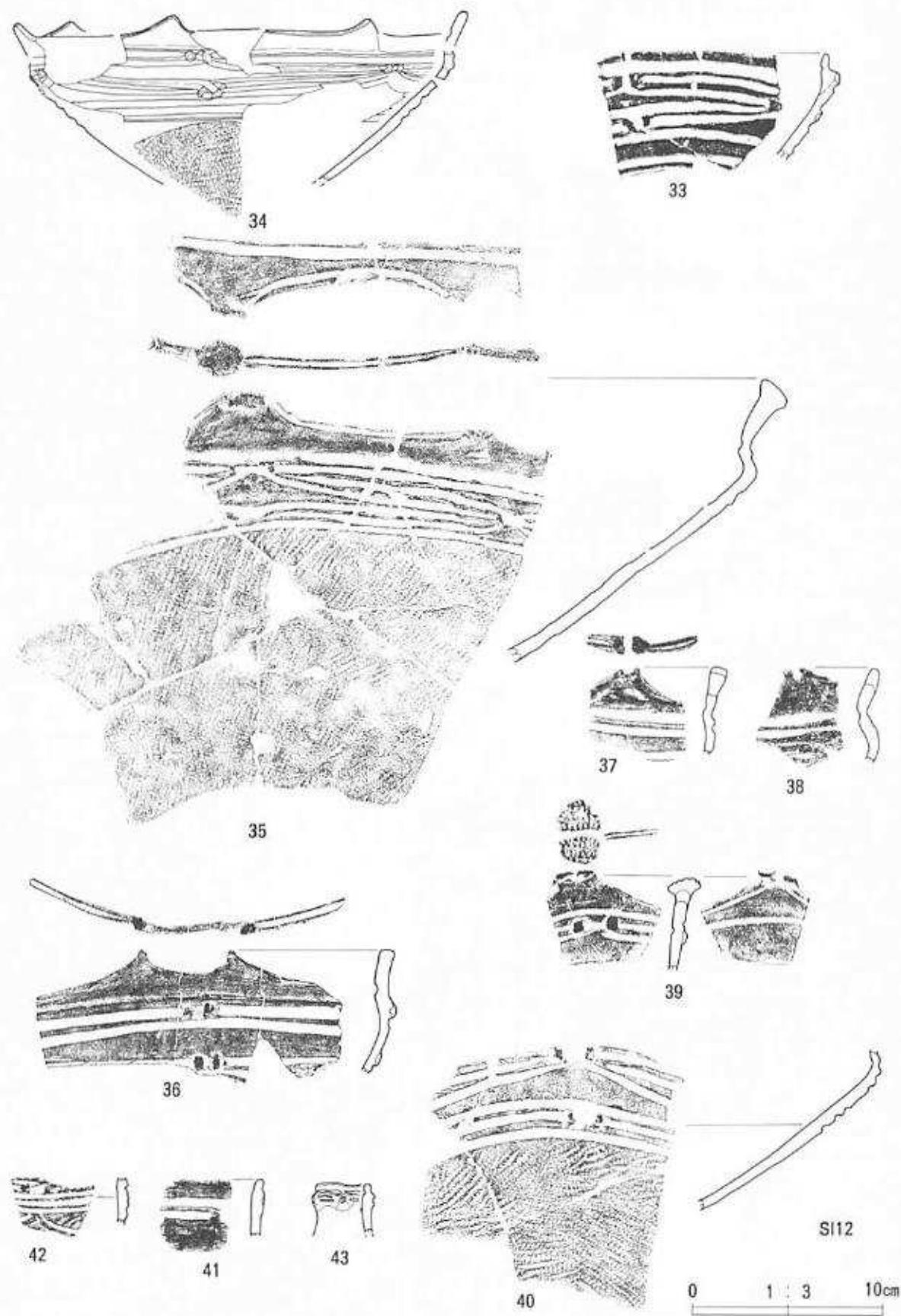
SI08

0 1 : 3 10cm

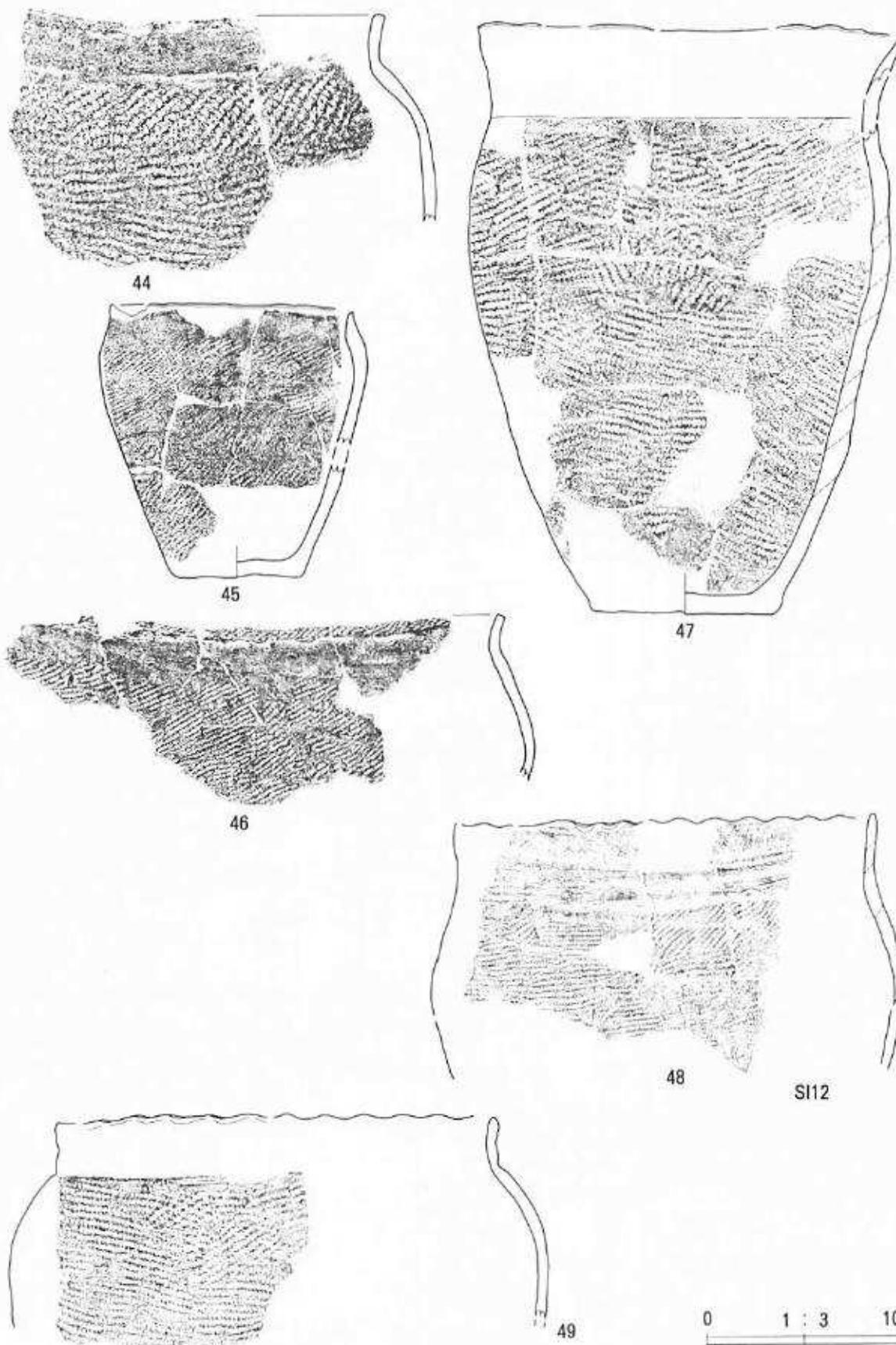
第32図 遺構内出土土器(2)



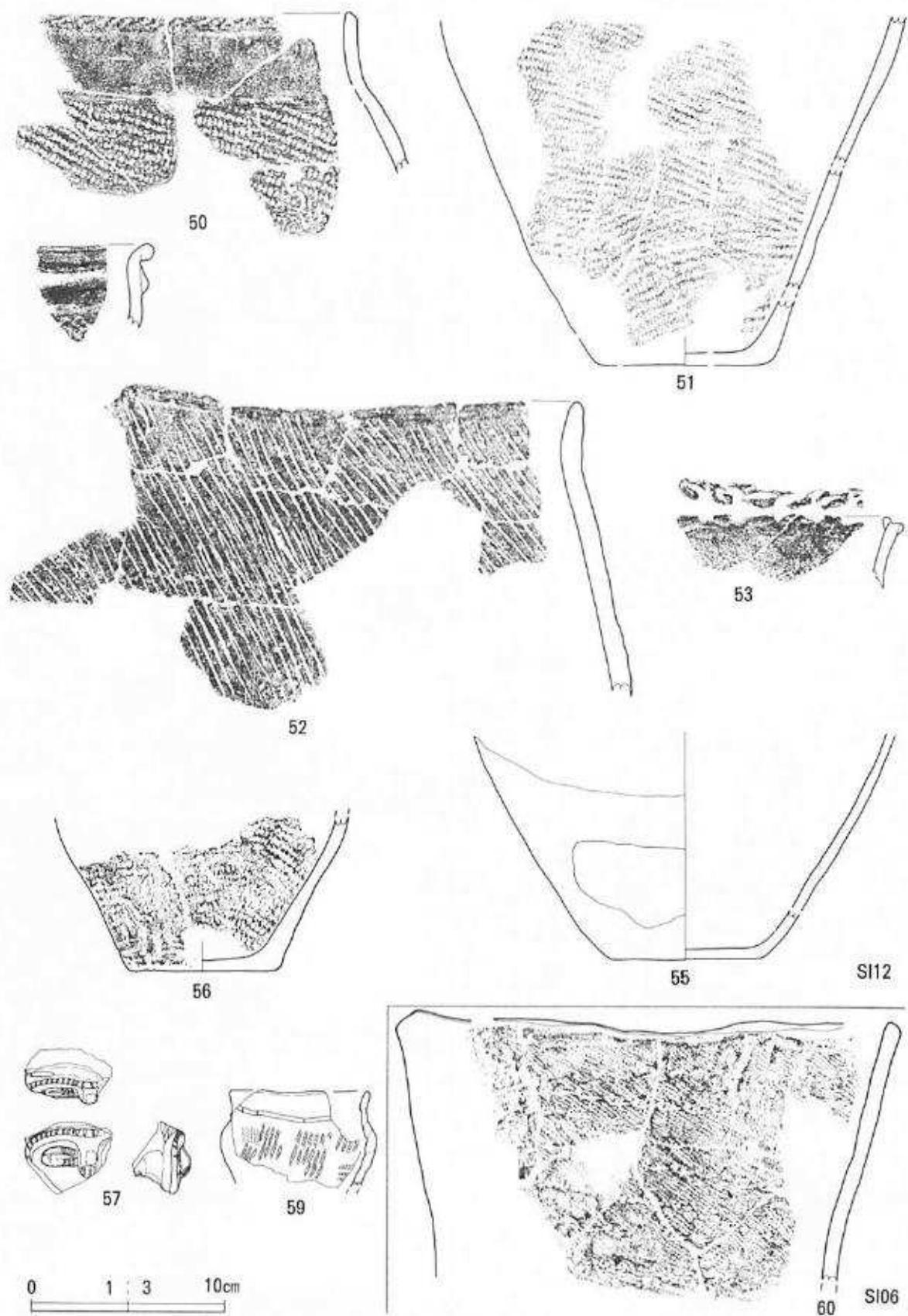
第33図 遺構内出土土器③



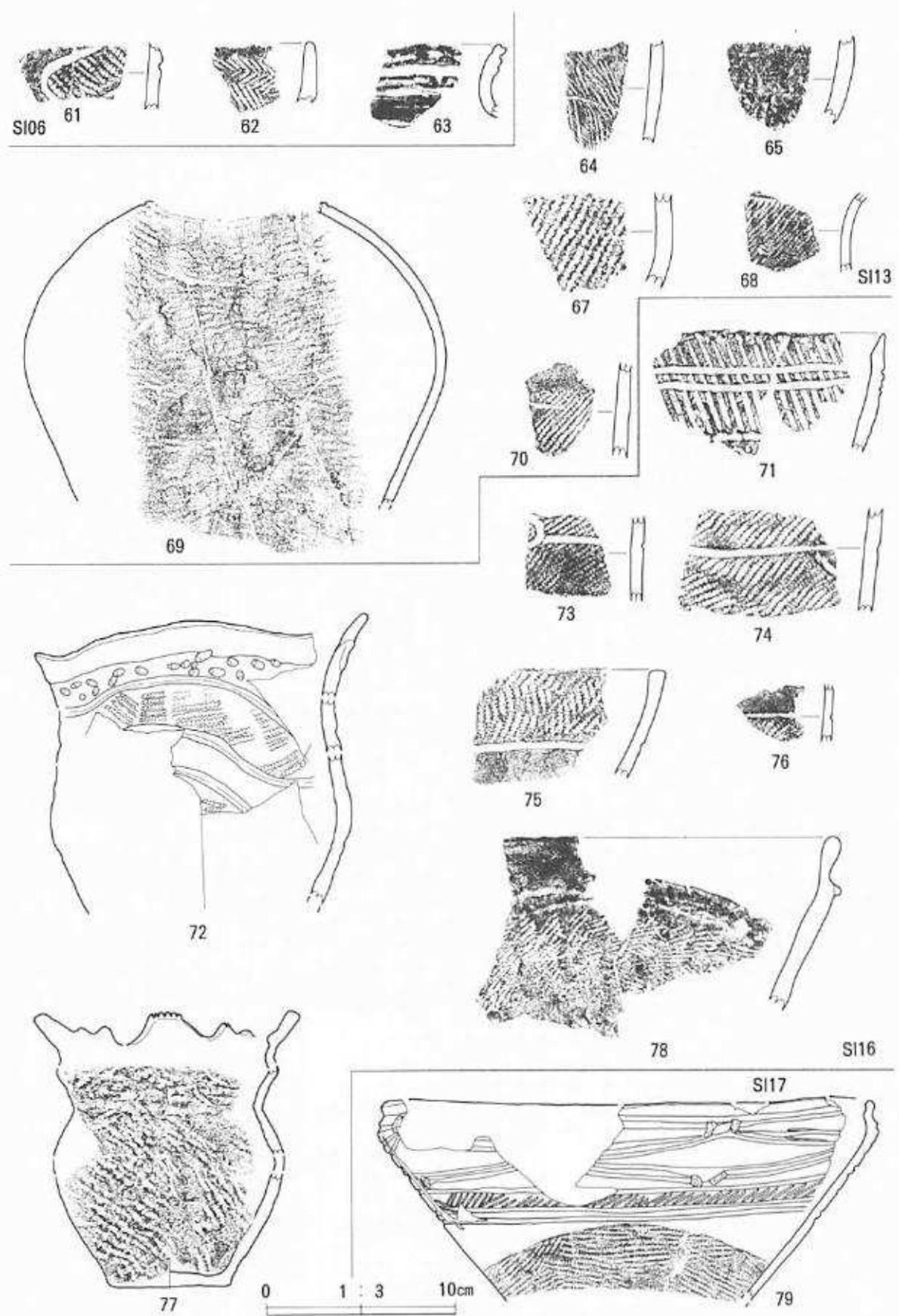
第34図 遺構内出土土器(4)



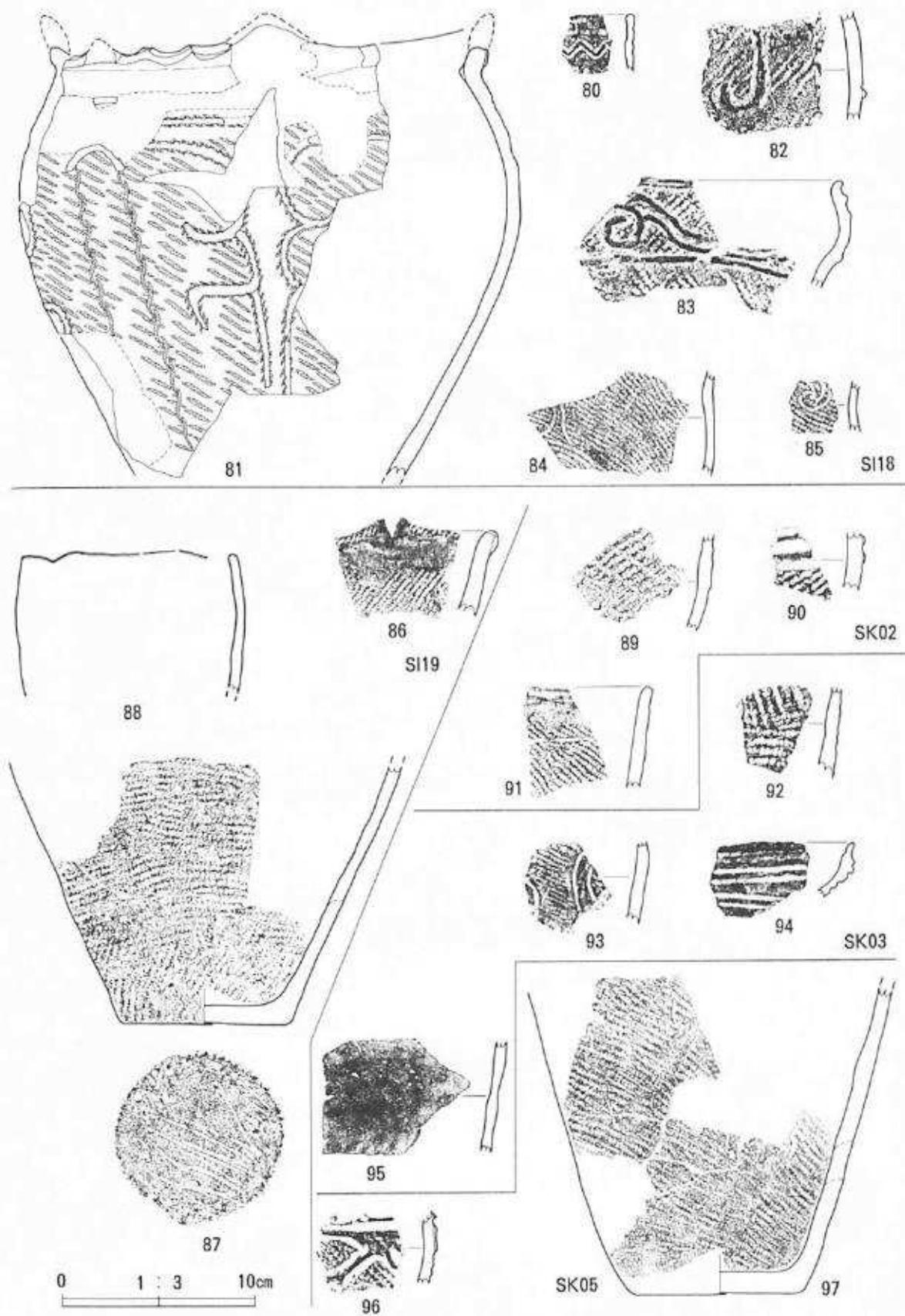
第35図 遺構内出土土器⑤



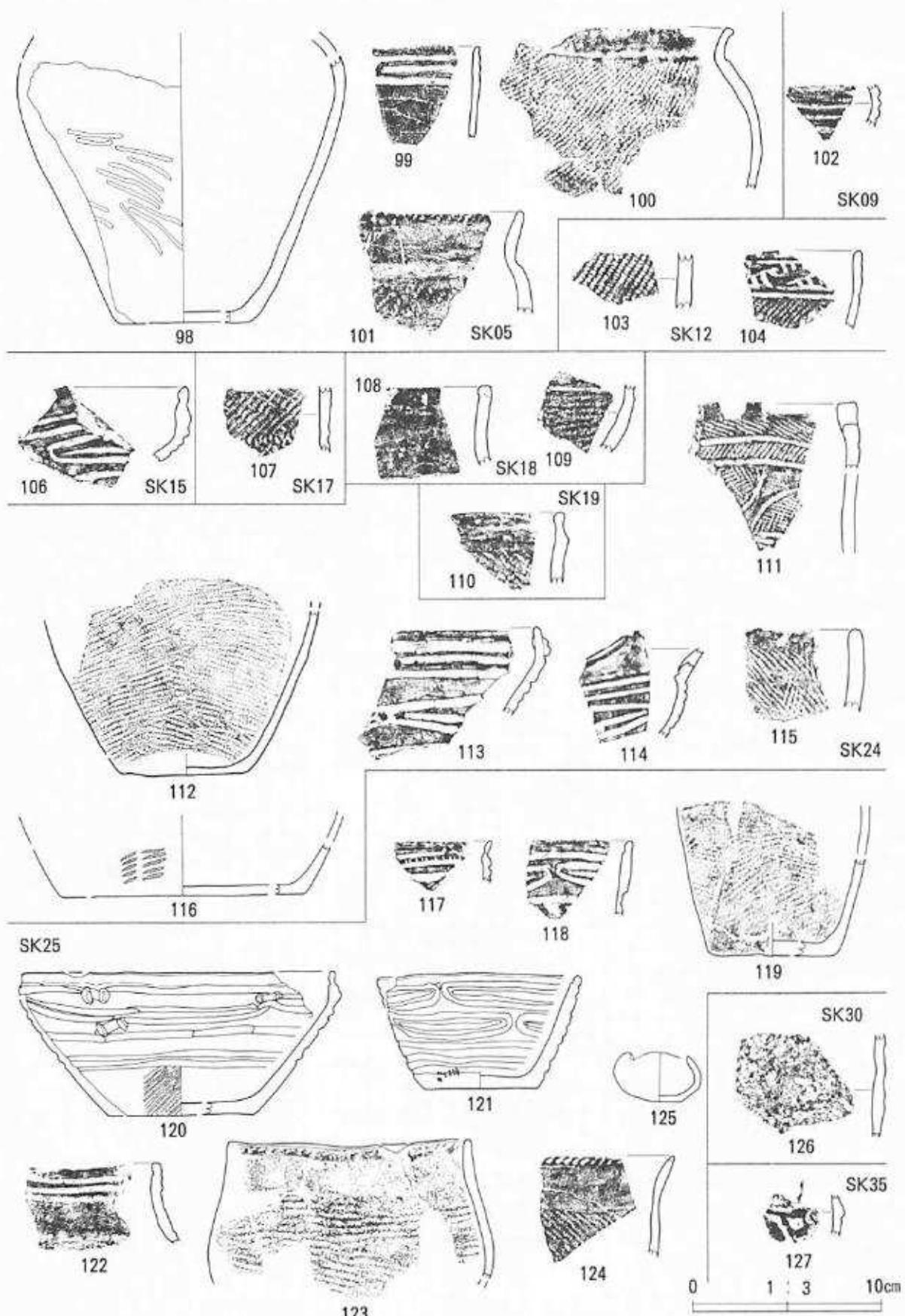
第36図 遺構内出土土器(6)



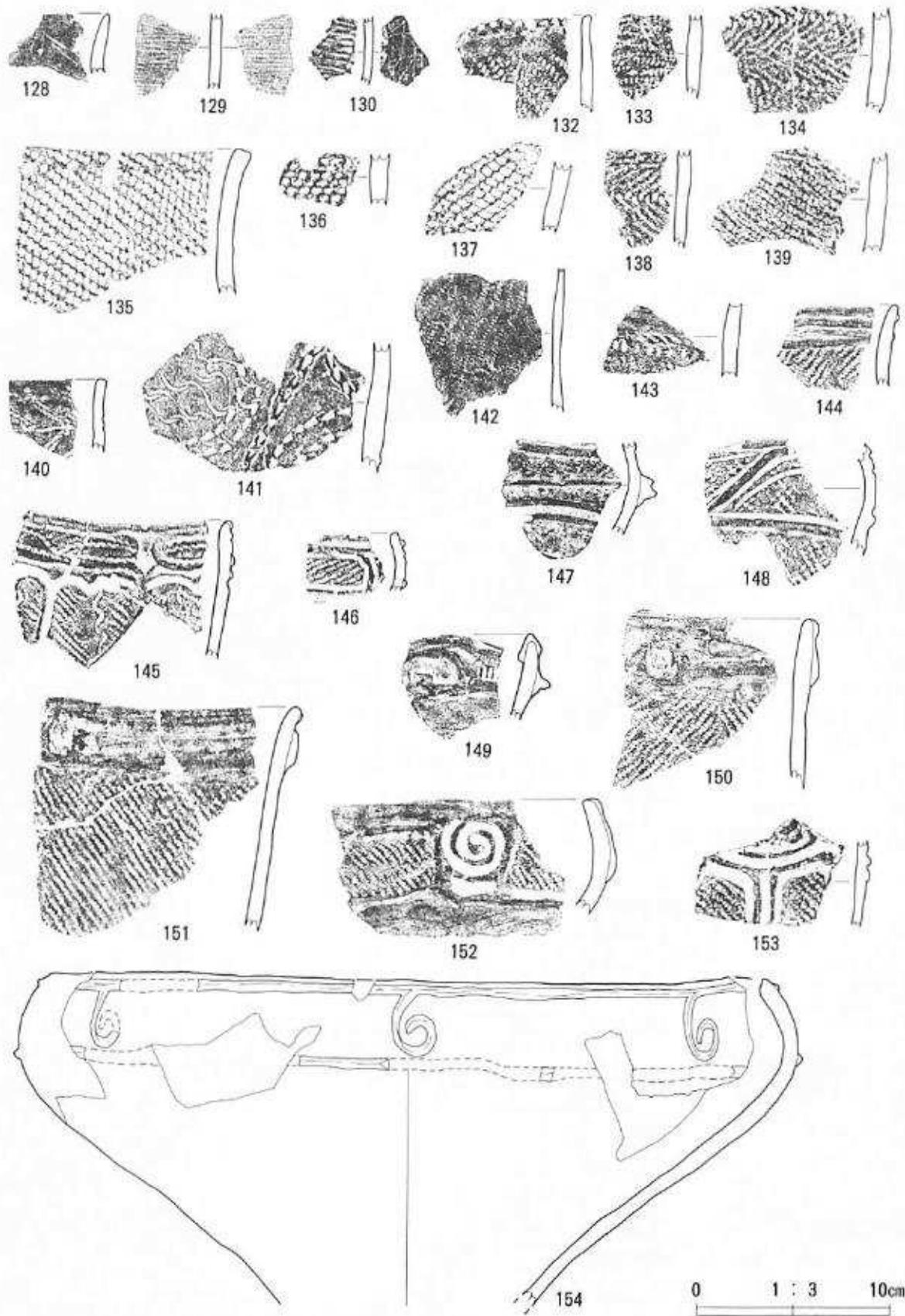
第37図 遺構内出土土器⑦



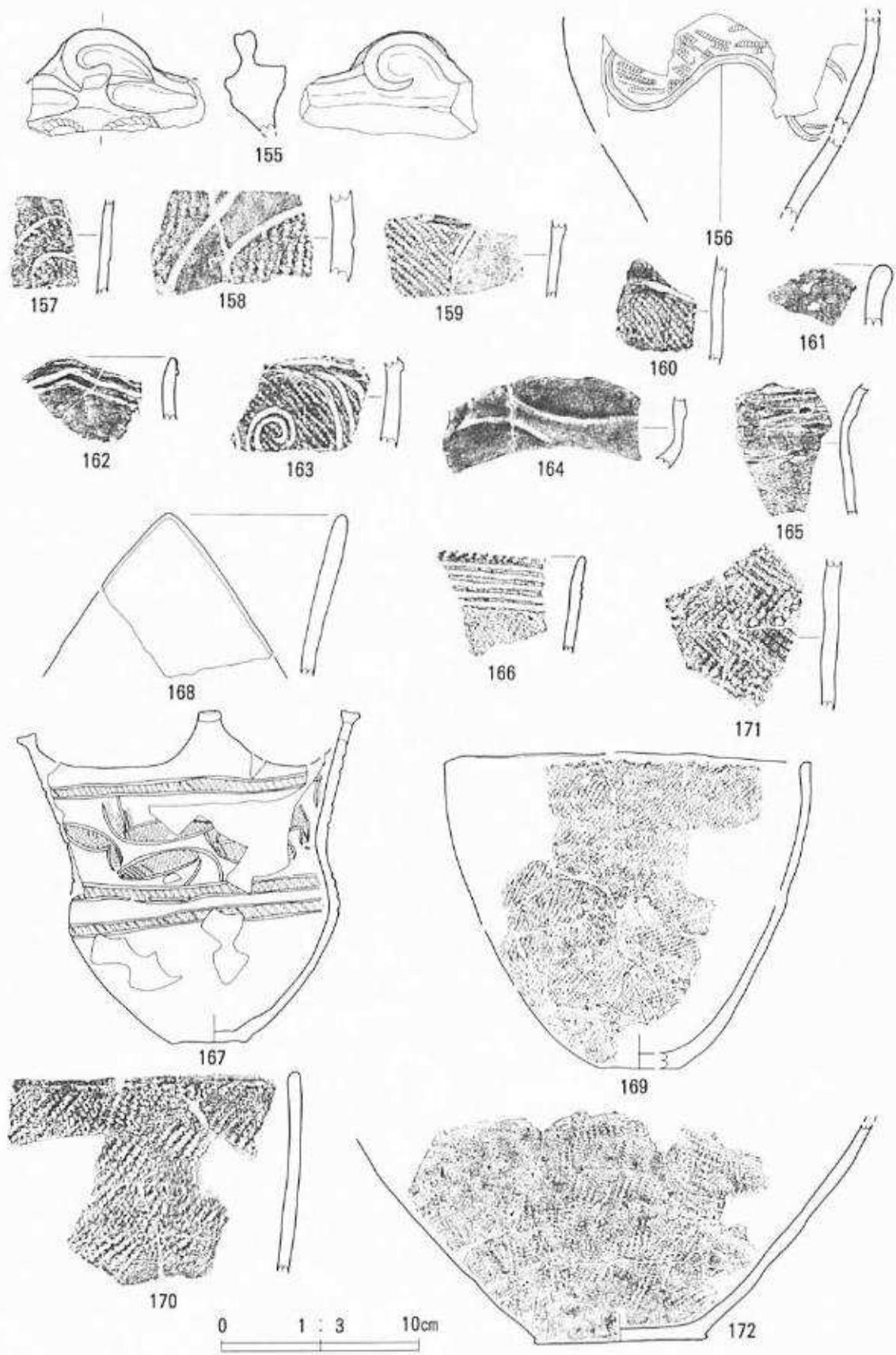
第38図 遺構内出土土器⑧



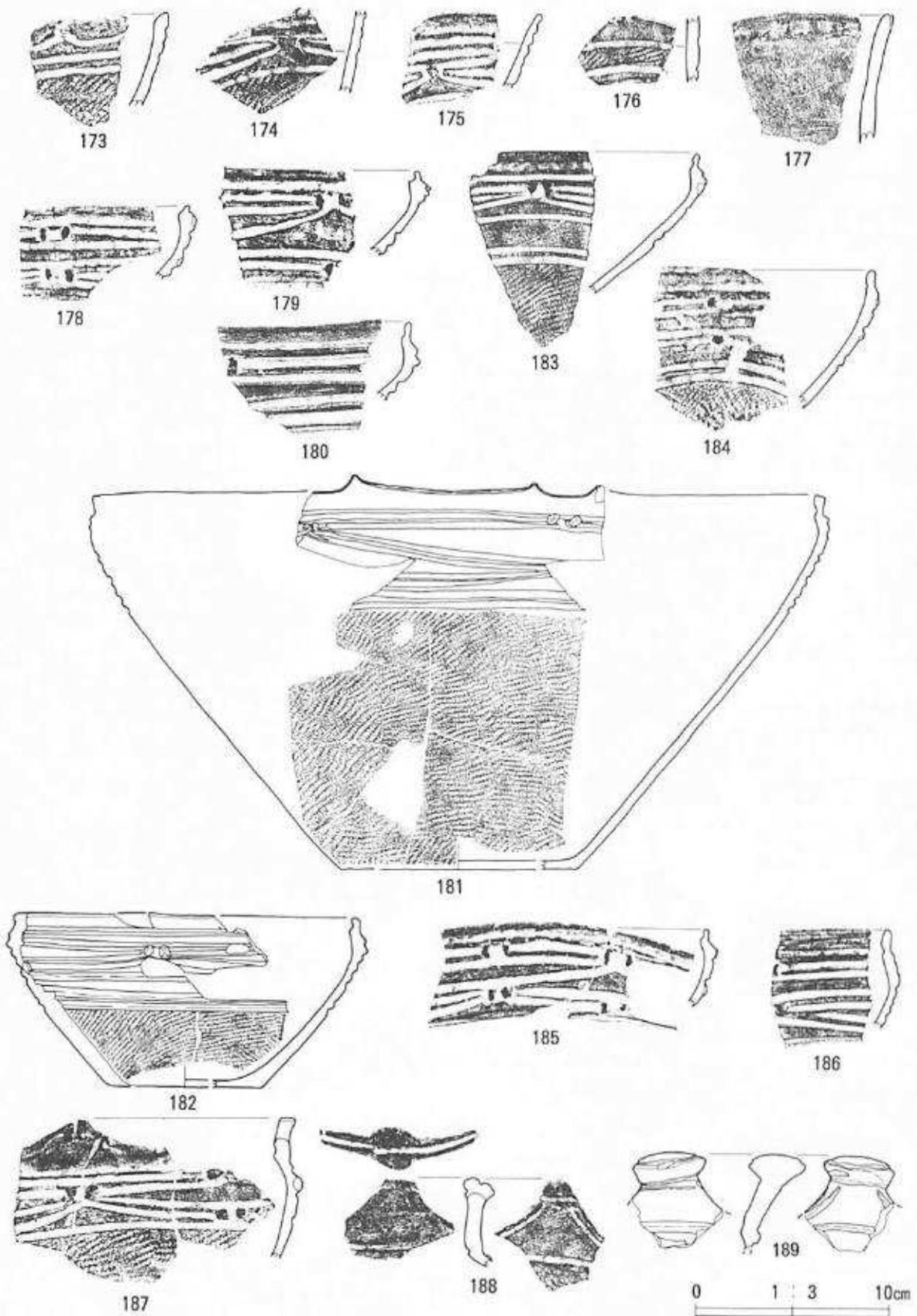
第39図 遺構内出土土器⑨



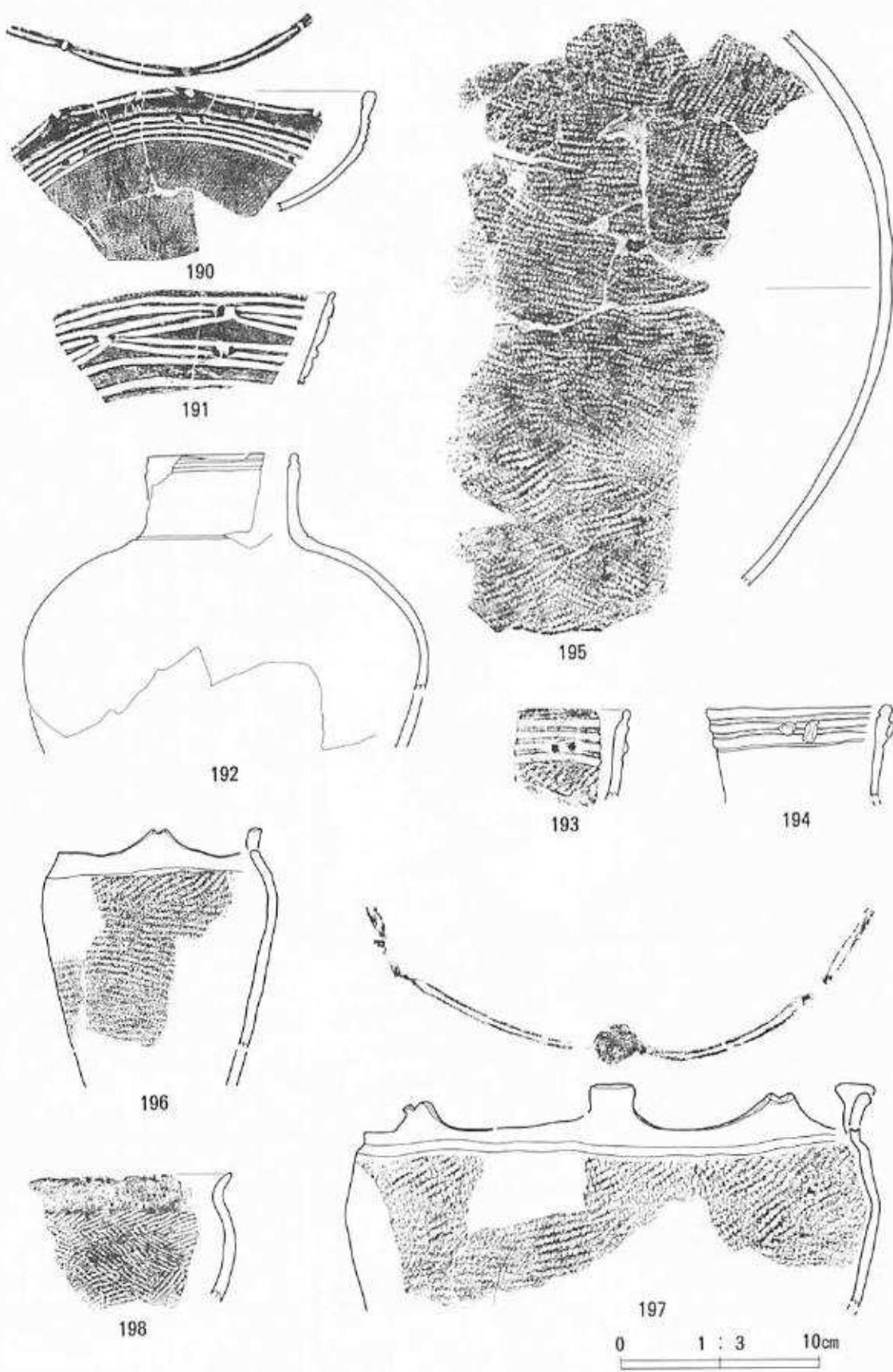
第40図 遺構外出土土器①



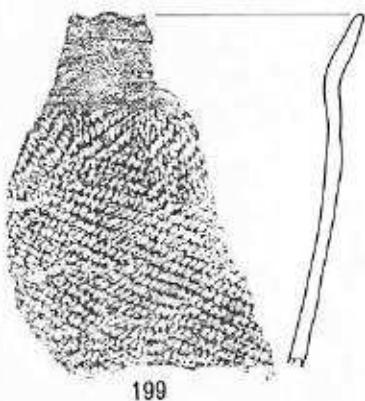
第41図 遺構出土土器②



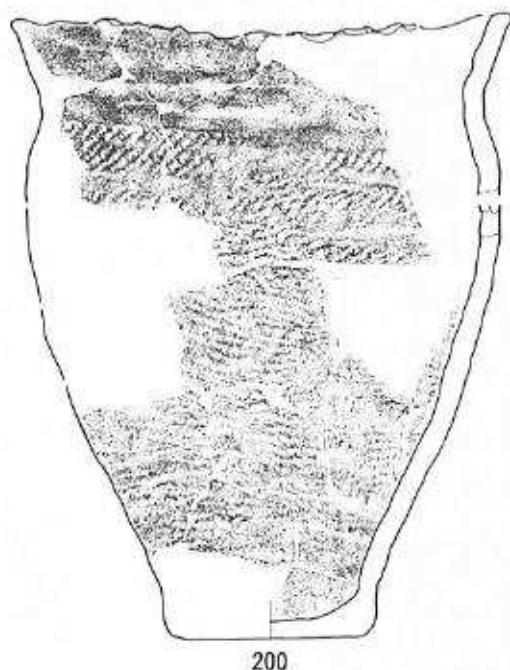
第42図 遺構外出土土器③



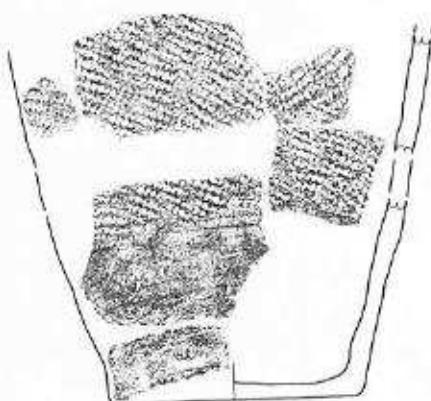
第43図 遺構外出土土器④



199



200



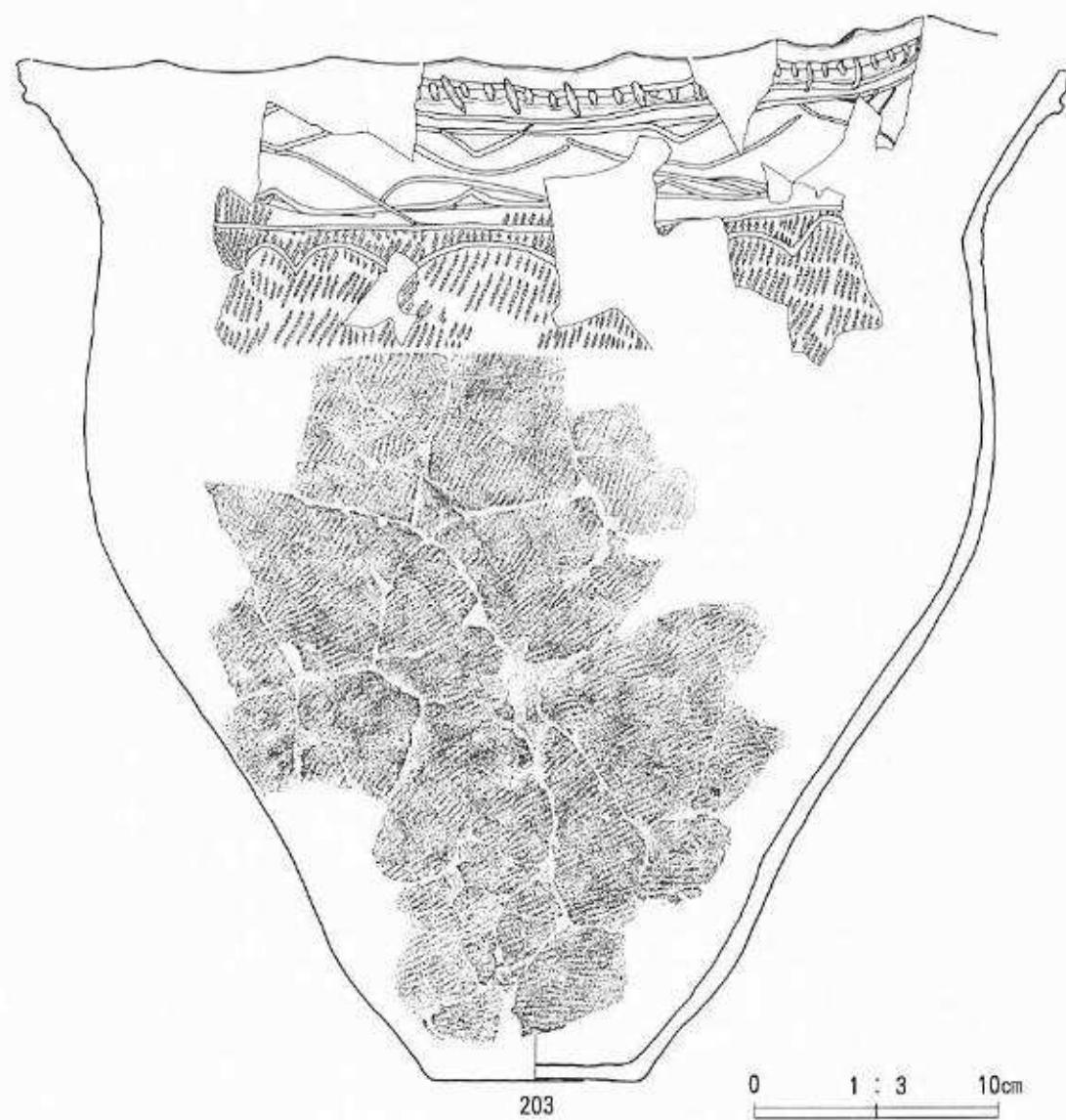
202



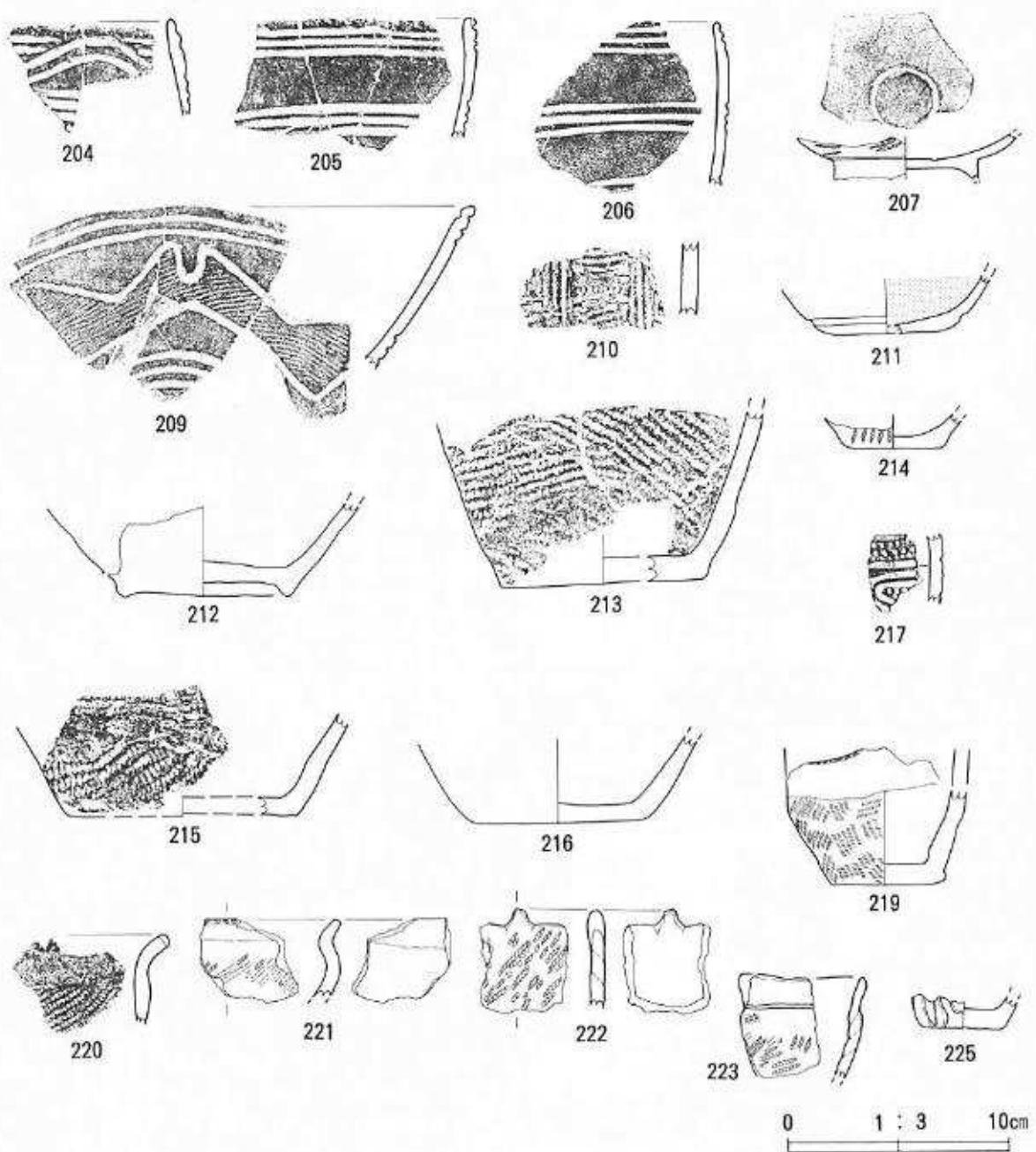
201

0 1 3 10cm

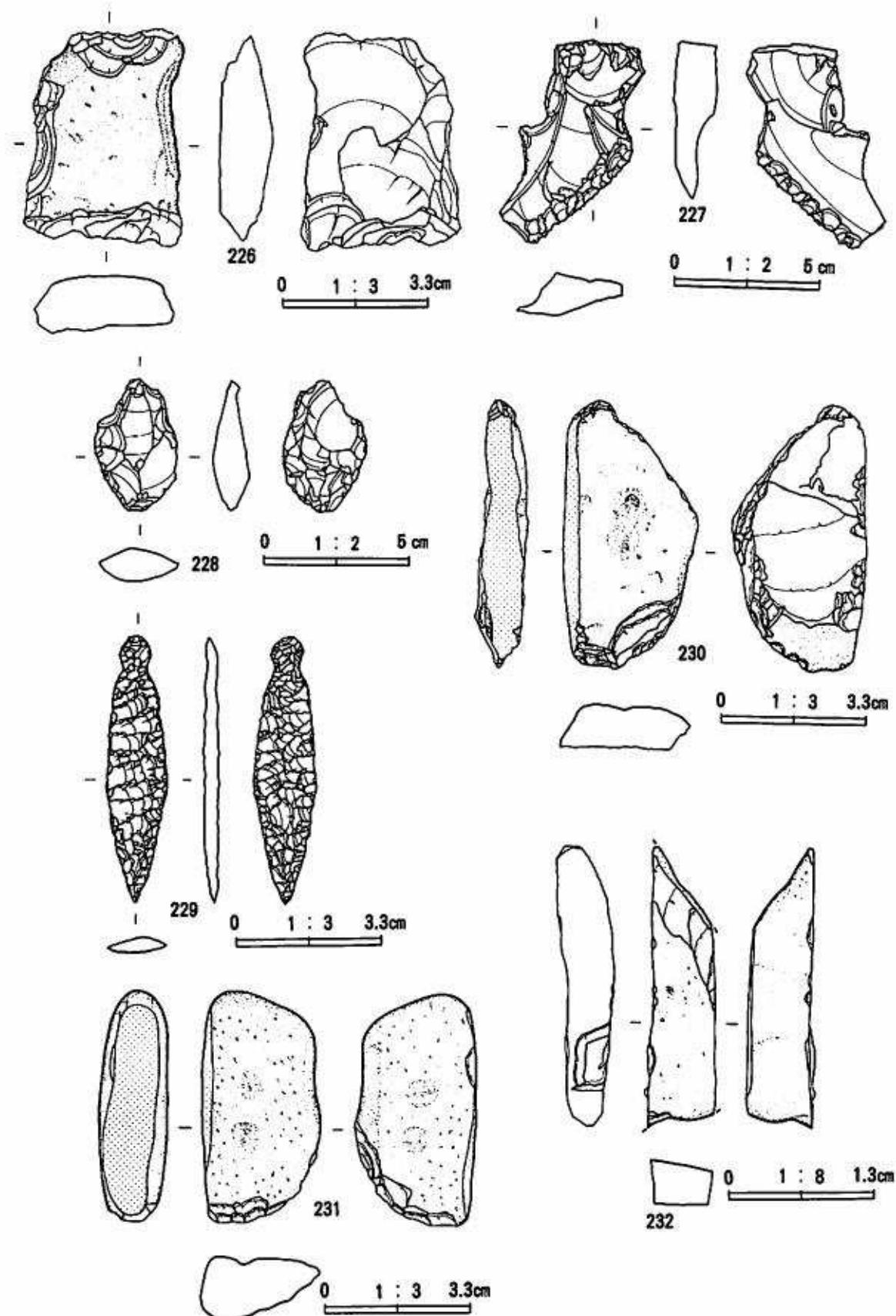
第44図 遺構外出土土器⑤



第45図 遺構外出土土器⑥



第46図 遺構外出土土器⑦



第47図 出土石器

番号	出土地点	出土層位	器種	部位	観察	分類	備考
1	S I 03	床面	深鉢	口縁	ループ文	I 3	
2	S I 03	埋土1層	深鉢	頭	木目状擦条文(横位) L-R右巻き	織錆少量	I 3
3	S I 03	埋土1層	注口土器	注ぎ口	崩消 雲形文?		IV 2
4	S I 03	埋土1層	深鉢	頭	崩消 L-R斜位 ミニチュア土器?		VII 1
5	S I 04	床下?	深鉢	頭	結束1種羽状繩文	織錆少量	I 3
6	S I 04	床下?	深鉢	頭	結束1種羽状繩文	織錆や多い	I 3
7	S I 04	埋土1層	深鉢	口縁	木目状擦条文(横位) L-R右巻き	織錆少量	I 3
8	S I 04	埋土1層	深鉢	口縁	口唇部剥み 鉢状工具による速続の刺突文 粘土紐貼り付け痕?	I 4	
9	S I 04	埋土下位	深鉢	口縁	折り返し口縁(充填) 口唇剥み 半裁竹管による波状沈線	I 4	
10	S I 04	床下?	深鉢	口縁	内そぎの折り返し口縁 沈線 粘土紐貼り付け		II 2
11	S I 04	埋土1層	深鉢	口縁	粘土紐貼り付け区画 滴巻き文様		II 2
12	S I 04	埋土1層	深鉢	口縁	沈線区画 充填R-L		III 3
13	S I 08	落石下	深鉢	半完形	大柄な磨り消しによる丁字文の退縮 脚中位が膨らむ器形 小石多い		II 3
14	S I 08	落石下	深鉢	半完形	口縁から脚上部にかけての連続したS字文 R-L		II 3
15	S I 08	埋土5層	深鉢	頭	側目状条痕		II 3
16	S I 08	落石下	鉢	肉厚	太い粘土紐貼り付け 貼り付け指ナデ		VII 1
17	S I 08	床面C	深鉢	口縁	平口縁 小波状の太い隆体 原体圧痕による刻み目 (R-L)		III 1
18	S I 08	床面A	深鉢	口縁	平口縁 小波状の太い隆体 原体圧痕による刻み目 (R-L)		III 1
19	S I 08	土坑内?	深鉢	口縁	S字状装饰体 小波状の太い隆体 原体圧痕による刻み目 (R-L)		III 1
20	S I 08	埋土1層	浅鉢	口縁	やや内湾 沈線文		VB 1
21	S I 08	埋土1層	壺	口縁	短くほほ垂直に立ち上がる 横ナデ L-R		VD 4
22	S I 08	埋土1層	合付浅鉢	台上面			VE
23	S I 08pp 2	埋土中	ミニチュア	壺			VII
24	S II 12	床面上	小型深鉢	完形	円筒形 山形口縁 沈線区画内充填		III 2
25	S II 12	埋土1層	鉢	口縁	口唇部に剥み 3本の波状沈線 磨り消し		III 3
26	S II 12	埋土1層	浅鉢	口縁	沈線区画 磨り消し文様 口唇部ナデ L-R		III 3
27	S II 12	埋土下位	深鉢	口縁	羽状繩文		III 3
28	S II 12	埋土下位	鉢?	口縁	羊齒状文		IV 1
29	S II 12	埋土1層下	注口土器	半完形	雲形文 口縁部山形状突起 沈線 脚部 2個1対の突起 刻み		IV 2
30	S II 12	埋土1層下?	浅鉢?	脚上	工字文		IV 3
31	S II 12	床面	鉢	口~脚	変工 脚中位にくびれ その上磨り消し 横ナデ 内沈線 陰起線文状		VA
32	S II 12	床面	鉢?	脚~底	L-R 内 磨き 輪積み痕		VA 万真のみ
33	S II 12	埋土1層下	浅鉢	口縁	変工 朱塗り 平口縁 L-R		VB 1
34	S II 12	埋土下位	浅鉢	口~脚	変工 2箇1対の山形口縁3部位 口唇部沈線 内段 穿孔 金雲母		VB 2
35	S II 12	埋土下位	浅鉢	半完形	変工 山形口縁 口唇部沈線 内2本沈線 ミガキ 金雲母		VB 3
36	S II 12	Ⅲ	浅鉢	口縁	変工 波状(山形) 口縁 口唇部沈線 内太い沈線 金雲母		VB 3
37	S II 12	埋土	浅鉢	口縁	変工? 山形口縁 刻み 口唇部沈線 外縁 内沈線		VB 3
38	S II 12	埋土1層	浅鉢	口縁	大きく外形する 山形口縁 刻み 工字文?		VB 3
39	S II 12	埋土1層	浅鉢	口縁	変工? 山形口縁 2箇1対の突起物 突起内削突 内沈線2本		VB 4
40	S II 12	埋土下位	浅鉢	頭	変工 口縁部内湾 内ミガキ ケズリ 金雲母 小石含む		VB 5
41	S II 12	埋土1層	浅鉢?	脚上			VB 5
42	S II 12	埋土下位	壺	口縁	変工 ゆるく外反 内沈線		VC
43	S II 12	埋土1層	小型壺?	口縁	変工? 貼り瘤上刺突 沈線 内沈線 輪積み		VC
44	S II 12	床面	壺	口縁	48と同型 小波状を呈すか? 原体大きい地文 内ミガキ ケズリ		VD 1
45	S II 12	埋土下位	壺	半完形	口縁垂直気味に短く立ち上がる。磨り消し接縫ナデ 内縫 磨いミガキ		VD 2
46	S II 12	埋土1層	壺	口縁	48と同型であるがやや口縁が外傾する 口唇部陶文充填		VD 2
47	S II 12	埋土2~3層	壺	完形	やや長い口縁 少し外傾 磨り消しのうえ接縫ナデ 輪積み痕 L-R斜位		VD 3
48	S II 12	埋土1層	壺	口縁	口縁垂直 磨り消し 横ナデ 内輪積み痕 ミガキ ケズリ?		VD 4
49	S II 12	埋土下位	壺	口縁	48より肩が張る器形 調整等は44と同じ		VD 4
50	S II 12	埋土下位	壺	口縁	崩り消し 横ナデ 口唇部圧痕 L-R斜位 内ミガキ 小石 金雲母		VD 4
51	S II 12	Ⅲ層	壺?	脚~底	L-R縫 金雲母多く含む		VD 6
52	S II 12	床面	壺?	口縁	撲条文 0段多条 壺の可能性あり		VD 6
53	S II 12	埋土1層下	壺	口縁	口唇部指痕や棒状工具での装饰体(S字) 内ミガキ 金雲母含む		VD 6
54	S II 12	床面	壺	口縁	器体 くの字型に屈曲して大きく外反する		VD 6
55	S II 12	床面上	壺	頭~底	無文 朱? 内撲着 円形の5cm程度の痕(ぬか痕?)		VD 6
56	S II 12	埋土下位	壺	底			VD 6
57	S II 12	埋土1層	土偶	頭部			VII
58	S II 12	埋土1層	土偶?	脚?			万真のみ
59	S II 12	埋土1層	ミニチュア	壺			VII
60	S I 06	床面一括	深鉢	口縁	小波状口縁 線織り文 口唇部 指痕圧痕	織錆混入	I 3

表3 土器観察表

番号	出土地点	出土層位	器種	部位	観察	分類	備考
61	S 106	埋土1層	深鉢	口縁	沈線区画 磨り消し文様	II 3	
62	S 106	埋土1層	深鉢	口縁	羽状網文	III 3	
63	S 106	埋土1層	壺形	口縁	変工 山形口縁 口唇部沈線 内沈線	VC	
64	S 113	埋土1層	深鉢	胴部	条痕・条痕 小石混入 織維なし	I 2	
65	S 113	埋土下位	深鉢	底	尖底 織維混入	I 3	
66							欠番
67	S 113	埋土下位	深鉢	口縁	R-L	織維混入	I 3
68	S 113	埋土1層	深鉢	口縁下	外消する器形 粘土貼り付け(縄文の衰退) 織紋少?	II 4	
69	S 113	埋土1層	壺形	胴	(広口壺の可能性) 頸部沈線 無糸文 内ミガキ 織積み痕	VC	
70	S 113	埋土1層	深鉢	頸部	磨り消し L-R	織紋なし	III 1
71	S 112	床下?	深鉢	口縁	小波状 半縦竹管による斜位の平行沈線	II 1	
72	S 112	床面下	深鉢	口縁	小波状口縁 やや外傾 磨り消し 光塗によるS字文様 刻文	II 3	
73	S 116	床面	深鉢	胴	平行沈線 円文もしくは渦巻き文	II 1	
74	S 116	埋土1層	深鉢	胴上	沈線 磨り消し	L-R	III 2
75	S 116	埋土1層	深鉢	口縁	大柄な沈線区画の磨り消し 平行沈線	III 2	
76	S 116	埋土1層	深鉢	口縁	沈線区画内磨り消し	III 2	
77	S 116	床面一括	深鉢	完形	台形状山形突起(削み) 頂部がくびれ垂直気味に立ち上がる内壁R-L	III 1	
78	S 112	床下	浅鉢	口縁	ゆるく立ち上がる くの字形の路体 路中位が膨らむ	III 1	
79	S 117	埋設土器	浅鉢	半完形	変工 下部沈線内充填 朱漆り? 内沈線 金雲母混入	VB 2	
80	S 118	埋土5層	深鉢	口縁	半縦竹管による横位の斜状沈線	II 4	
81	S 118	落石下	深鉢	半完形	肥厚口縁 山形口縁 粘土貼付御崎文圧痕 縫位のS字状筋節捺糸	II 1	
82	S 118	不明	深鉢	胴	粘土縁によるS字文 粘土縁の端面に原作压痕	II 1	
83	S 118	埋土5層	深鉢	口縁	内沟(キャリバー) 粘土貼付区画内底手文様 L-R	II 2	
84	S 118	落石下	深鉢	胴	半縦竹管による沈線 (渦巻きもしくはS字状)	III 1	
85	S 118	落石下	深鉢	胴	84と同一個体	III 1	
86	S 119	斑錐岩下	小型深鉢	口縁	山形口縁(削み) 磨り消し 口唇部純文充填	III 1	
87	S 119	斑錐岩下	深鉢	胴~底			III 1
88	S 119	斑錐岩下	小型深鉢	口縁	無文 ミニチュア?		III 1
89	SK02	埋土上位	深鉢	胴		織紋混入	I 3
90	SK02	埋土上位	深鉢	口縁	太い際体上を3本以上の平行な幅のある沈線 L-R	小石混入	III 1
91	SK02	埋土1層	深鉢	口縁	小? 波状口縁 L-R	小石混入	III 1
92	SK03	埋土下位	深鉢	胴上	L-R 斜位 壁	織紋混入多い	I 3
93	SK03	配石下埋土	深鉢	胴上	小型深鉢 沈線 磨り消し	III 3	
94	SK03	底面	浅鉢	口縁	変形? 工字文	金雲母混入	VB 1
95	SK03	埋土下位	壺形土器	胴	無文	金雲母混入多い	VC
96	SK05	埋土3層	深鉢	胴上	大波状? 陰沈線 沈線による渦巻き文? R-L	II 2	
97	SK05	埋土最上位	鉢?	胴~底	厚手 内壁 ケズリ ぬか直? L-R	小石金雲母混入	VA
98	SK05	埋土3層	壺形	胴~底	底面出土 壁の張る器形? 無文 外周(漆膜) 内ケズリ	VC	
99	SK05	埋土3層	壺形	口縁	変工 内沈線なし		VC
100	SK05	埋土3層	壺	口縁	大きく外反する 口唇部圧痕 口唇部ナデ L-R 内壁丁寧なミガキ	VD 2	
101	SK05	埋土3層	壺	口縁	緩やかに外傾する 最大径口縁 口唇刻み	VD 3	
102	SK09	埋土上位	浅鉢	胴上	半縦竹管による平行沈線	III 1	
103	SK12	埋土中位	深鉢	胴	粗製土器	II 3	
104	SK12	埋土中位	深鉢	口縁	羊脂状文 口唇部刻み R-L	IV 1	
105	SK12	埋土上位	ミニチュア	口縁		VA	写真のみ
106	SK15	埋土上位	浅鉢			VB 1	
107	SK17	埋土最上位	深鉢	胴上	ループ文もしくは結束羽状縄文	織紋少混入	I 3
108	SK18	埋土1層	更	口縁	外壁 磨り消し	VD 6	
109	SK18	埋土1層	更	胴上	模ナデ R-L	VD 6	
110	SK19	埋土	深鉢?	口縁	肥厚口縁	III 1	
111	SK24	埋土1層上位	深鉢	口縁	大小の突起 沈線区画の充填 羽状縄文	織砂混入	III 3
112	S 103	埋土1層	深鉢	胴~底	0段多孔L	内壁 金雲母含む	VA
113	SK24	埋土1層中位	浅鉢	口縁	変工 内沟 外壁 赤色顔料?	内沈線 金雲母混入	VB 1
114	SK24	埋土1層中位	浅鉢	口縁	変工 小波状 やや内消して外傾 口唇部沈線 外壁 内沈線 金雲	VB 3	
115	SK24	埋土1層上位	深鉢	口縁	粗製土器 R-L	小石混入	VA
116	SK24	埋土1層上位	深鉢	底部	青手 0段多孔	VA	
117	SK25	埋土下位	浅鉢	口縁	工字文 刻み目	IV 3	
118	SK25	埋土下位	壺	口縁	工字文 植付	IV 3	
119	SK25	上位	鉢	胴~底		VA	
120	SK25	埋土上位	浅鉢	半完形	変工 内沟 内沈線 ミガキ 0段多孔L	金雲母混入	VB 2

表3 土器観察表

番号	出土地点	出土層位	器種	部位	観察	分類	備考
121	S K 25	堆土上位	浅鉢	半完形	変工 内沈線 ミガキ 金雲母混入	V B 4	
122	S K 25	堆土	盤形?	口縁	変工 脊部が膨らむ器形?	V C	
123	S K 25	堆土上位	甕	口縁	肩上部やや膨らむ 口頭部削り消し横ナデ 口唇部周辺直痕 L-R 縦	V D 4	
124	S K 25	堆土下位	甕	口縁	口頭部削り消し横ナデ 口唇部好み 外縁 L-R 縦	V D 4	
125	S K 25	堆土中位	手づくね	鉢		留	
126	S K 30	堆土1層	深鉢	口縁	摩滅しい 外縁 小石含む 横縫微量に含む	I 3	
127	S K 35	堆土	深鉢	肩上	粘土紐貼り付け はしご状?	I 4	
128	A N y 9	III	深鉢	口縁	貝殻柔痕	I 1	
129	A N v 8	IV~VI	深鉢	肩	柔痕 柔痕(横位)	I 2	
130	A N x 8	I~II	深鉢	肩	柔痕柔痕	I 2	
131						欠番	
132	A N x 8	IV~VI	深鉢	口縁	薄手 口唇部斜突 表裏繩文 R-L	I 2	
133	搅乱土坑	堆土	深鉢	肩	表裏繩文? L-R 斜位 繩維を含まない	I 2	
134	B II	不明	深鉢	肩	R-L 上部斜系直痕文 繩維混入	I 3	
135	B III c 25	VI	深鉢	口縁	びっちり繩文 R-L 口唇部施文 繩維含む	I 3	
136	B III c 24	VI	深鉢	肩	ビックリ繩文 孔 R-L 繩維含む	I 3	
137	B III c 23	VI	深鉢	肩	結束羽状繩文 繩維含む	I 3	
138	B III g 23	VI	深鉢	肩	第1筋結束羽状繩文 繩維微量含む?	I 3	
139	B IV e 5	V~VI	深鉢	肩	R-L 繩維多く含む	I 3	
140	A N x 8	III~V	深鉢	口縁	木口状柔糸文(横位) 繩維混入?	I 3	
141	B III g 22	III?	深鉢	肩上	竹管による円形をかたどる刺突 粘土紐矧み目 繩維混入?	I 3	
142	B IV d 5	V~VI	深鉢	肩	梭織り文? 小石 金雲母混入し繩維ない	I 3	写真左が上
143	B III g 23	VI	深鉢	肩上	籠状工具による押し引きの刺突 刻み目のある粘土紐貼り付け	I 4	
144	A N y 10	III	深鉢	口縁	2本の平行な粘土紐貼り付け 外縁 L-R	II 1	
145	B IV f 4	III~V	深鉢	口縁	波状口縁 粘土紐区画内原体直痕 沈線 R-L	II 1	
146	A N y 8	III~V	深鉢	口縁	粘土紐区画内(箱内)沈線が沿う L-R	II 1	
147	B IV g 2	IV	深鉢	口縁	キャリバー状に内湾 粘土紐 隆体 沈線 波状口縁	II 2	
148	B IV g 2	IV	深鉢	口縁	キャリバー状に内湾 粘土紐区画 沈線	II 2	
149	B III j 24	I~VI	深鉢	口縁	小波状 肥厚 狹い隆起部による区画内簡略の渦巻き文 縱位の型沈線	II 2	
150	B IV e 4	III~V	深鉢	口縁	小波状 隆体 簡略された渦巻き文 L-R 小石多い	II 2	
151	B IV d 5	III~V	深鉢	口縁	小波状 隆体 簡略された渦巻き文	II 2	
152	B IV h 5	V	深鉢	口縁	円筒状 隆体区画内充填 沈線による渦巻き文様	II 2	
153	A N w 7	VI	深鉢	口縁	隆沈線 L-R	II 2	
154	B IV e 5	V~VI	浅鉢	口~肩	底部から間花状に上がり口縁で内溝する 2本の隆筋6単位の渦巻き文	II 2	
155	B IV c 5	II	深鉢	口縁	突起(耳型) 原体直痕 内渦巻き状	II 2	
156	A N x 8	III~V	深鉢	肩下	72と同一個体?	II 3	
157	B III	不明	深鉢	肩上	渦巻き文もしくはS字文様 中途な磨り消し	II 3	
158	B IV c 5	II	深鉢	肩	沈線区画内 J字? 充填(R-L縦) 外縁	II 3	
159	A N y 9	III~VI	深鉢	口縁	磨り消し J or S字文様内充填	II 3	
160	A N w 7	VI	深鉢	肩上	沈線 磨り消し 0段多縦	II 3	
161	B III h 21	III	深鉢	口縁	山形口縁 磨り消し 小石含む	III 1	
162	B IV f 4	III	深鉢	口縁	小波状 折り返し口縁 沈線文 磨り消し	III 1	
163	B IV f 4	III b	深鉢	肩上	粘土紐貼り付け 沈線による渦巻き状文 中途な磨り消し	III 1	
164	B IV d 5	III~V	注口	肩	磨り消し 突起もしくは釣り手状欠落痕	III 2	写真天端逆
165	B IV e 5	II	壺形	頸部	沈線 貼り瘤 金雲母?	III 2	
166	B IV d 4 + 5	III~V	鉢 or 壺	口縁	4本の平行沈線 口唇割み 0段多縦	III 2	
167	A N y 9	IV~VI	深鉢	半完形	山形口縁 ボタン状突起 入組帶繩文 光暈 脚下無文 上げ底 内縁	III 3	
168	B IV d e 5	II	深鉢	口縁	大波状口縁 磨り消し	III 3	
169	A N y 9	IV~VI	深鉢	半完形	平口縁 内外面けザリ調整 0段多縦	小石混入	III 3
170	A N y 9	II	深鉢	口縁	L-R	III 3	
171	B IV e 5	V~VI	深鉢	肩	0段多縦羽状繩文(無結束) R-L L-R 同種原体	III 3	
172	B III g 25	V下一括	壺	肩~底	磨り消し 底部張り出し 内縁 ミガキ 0段多縦	IV 1	
173	B III c 24	VI	深鉢	口縁	口唇刺突 平行沈線 波状沈線 内そぎ	IV 1	
174	B IV f 3	II	浅鉢	肩上	工字文 磨り消し	IV 3	
175	B IV c 5	II	鉢	口縁	工字文 内沈線	IV 3	
176	B IV d 4 + 5	II	浅鉢	肩	工字文? 沈線内充填	IV 3	
177	A V X 5	III~VI	鉢	口縁	隆体上に貼瘤の連続 外縁 ミガキ 内横ナデ 金雲母混入?	V A	
178	B IV e 5	II	浅鉢	口縁	変工 やや内凸 内沈線	V B 1	
179	B IV f 2	I~III	浅鉢	口縁	変工 ニ字? 朱塗り 小さく内湾 内沈線	V B 1	
180	B IV f 3	II	浅鉢	口縁	変工 大きく内湾 朱塗り 平口縁 内段	V B 1	

表3 土器観察表

番号	出土地点	出土層位	器種	部位	観察	分類	備考
181	B N e 5	II	浅鉢	半完形	変工 4 2個一対の山形突起 外縁 赤色顔料? 口唇沈線 内沈線	VB 2	
182	B N d e 5	II	浅鉢	半完形	変工 内沈線 金雲母少量	VB 2	
183	A N y 9	II	浅鉢	口縁	変工 内溝する 内沈線	VB 2	
184	B N h 2	III層	浅鉢	口縁	変工 2段 平口縁 朱塗り 内沈線 金雲母	VB 2	
185	B N c 5	IIIa	浅鉢	口縁	変工 内に窓が形成される	VB 2	
186	B N d 5	II	浅鉢	口縁	変工 窓内窓 内沈線	VB 2	
187	B N f 5	III~V	浅鉢	口縁	山形口縁 突起 口唇沈線 内沈線 突起に沿う沈線 相交含む	VB 3	
188	B N d 6	III~V	浅鉢	口縁	変工 山形口縁 ボタン状突起 L~R 外縁 内沈線	VB 3	
189	A N o 7	II	浅鉢	口縁	ボタン状突起 内沈線 2本	VB 3	
190	B N c 5	II	浅鉢	口縁	変工 2段 山形口縁 窓み 口唇沈線 0段多条 R 内沈線 黒色処理	VB 4	
191	B N d e 5	V~VI	浅鉢	口縁	変工 平口縁 内沈線 金雲母	VB 4	
192	A N y 9	III~V	壺	口~胴	規則 外無文 ミガキ 内指頭調整痕 輪積み痕	VC	
193	B N c 5	II	壺	口縁	変工 内沈線 0段多条 R 金雲母?	VC	
194	B N e 5	III~V	壺形	口縁	変工 朱塗り 内沈線 2本 金雲母	VC	
195	B III j 23	地山	壺	肩部	肩部に最大径 L~R横 小石混入多い	VC	
196	B N e 5	II	壺	口~胴	突起5単位? 肩の張る壺形 頭部削り消し横ナデ 内外縁 L~R横縫	VD 1	
197	B N f 4	IIIb	壺	口~胴	1つのボタン状突起と2つの山形突起 口唇部沈線 L~R 横ナデ	VD 1	
198	B N d 5	IIIa	壺	口縁	外傾しやや外反する 口頭磨り削し 金雲母?	VD 2	
199	A N t 16	II	壺形	II~胴	口縁肩部削り消し横ナデ 内ミガキ 小石混入	VD 3	
200	B N d e 5	III~V	壺	半完形	肩の張る? 肩部削り消し横ナデ II肩部折頭圧痕 L~R横縫 内輪積	VD 3	
201	A N X 11	III~VI	壺	口~胴	平口縁 口頭部削り消し横ナデ R~L (原体大) 小石混入	VD 4	
202	B III c 24	VI	壺	略完形		VD 4	
203	B III j 23	地山 埋設?	壺	半完形	天王山式	VD 5	
204	B N h 2	II	鉢?	口縁	2~3本の平行沈線とその上に載る2本の平行波状沈線	VE	
205	B N d 5	IIIa	壺形	口縁	変工 2段 内沈線なし 金雲母	VE	
206	B N d 4~5	II	壺形	口縁	3本の平行沈線 3段以上	VE	
207	B N d 3	II	台付浅鉢	底部		VE	
208	B N d 4	II	脚付土器	底	内黒	VE	写真のみ
209	B N e 5	II	壺	口縁	磨り消し 光沢 銘文? 内沈線 砂混入 金雲母少量	VE	
210	B III h 21	II	壺形	肩	原体正方形区画 捺し引き文 外縁 小石混入	VI 1	
211	B N e 5	II	壺	底部	回転系切り? 内渦	VI 2	
212	A N y 9	III~V	壺	底部	上げ底	VI 2	
213	A N X 11	III~VI	深鉢	底部	上げ底 小石混入多い	VI 2	
214	B N d 4	II~V	壺	底部	砂多く混入	VI 2	
215	B N d 4~5	II	深鉢	底部	L~R 捺糸圧痕文 脚下ナデ 内丁寧なミガキ	VI 2	
216	A N y 9	II	深鉢?	底部	無文	VI 2	
217	B N e 5	V~VI	土鍋?		沈線文 郎文	VI 2	
218	B N e 4	II	土鍋?			VI	写真のみ
219	A N y 9	II	ミニチュア	完形	やや内渦 磨り消し L~R	VI	
220	B N d 5	III~V	ミニチュア	口縁	山形口縁 大きく外反する 口唇刻み L~R	VI	
221	A N y 9	IV	ミニチュア	口縁		VI	
222	A N X 11	III~IV	ミニチュア	口縁		VI	
223	B N d 5	II	ミニチュア	口縁		VI	
224	B N d 5	II	ミニチュア	胴		VI	写真のみ
225	B III h 21	II	ミニチュア	底部		VI	

石器観察表							
番号	器種	出土地点	層位	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
226	石斧	S I 04	床面	11.2	8.2	3	357.4
227	搔器	B N d 5	II	7	5	1.5	38.66
228	石器	B IV	耕土	4.5	2.8	1.3	13.95
229	石匙	B N h 2	II	13.8	3.2	0.9	36.41
230	凹石	B N h 2	II	12	6.3	3.5	348.2
231	磨石	B N h 2	II	13.7	7.2	2.3	278.6
232	集石器	S K 23	耕土	38.8	9.6	6.8	3580
233	剥片	B N d 5	II				17.76
234	剥片	B III b 25	V下				3.34
235	剥片	B N d 5	V下				8.14

表4 石器観察表

V まとめ

1 遺構

今回の発掘調査において多くの遺構が確認されたが、その中心は縄文時代から弥生時代である。その他の時代の遺構はなく、遺物で平安時代の环が出土しているのみである。ここでは当遺跡の検出遺構を時代順に述べ、住居跡を中心とした集落の変遷について考えたい。

検出された住居跡（住居状を含める）は縄文時代前期前葉から出現する。これらの遺構は調査区を北から南に継続する旧河道と思われる沢状の地形の北側隅で3棟検出されている。平面形は不整な梢円形で、地床炉などはない。それらに伴う土坑や柱穴状の小土坑は沢状の地形の底部で検出される。（柱穴群3 第28・29図）その沢状の地形は中せり火山灰を起源とする粘土で覆われ、前期初頭の土器片が得られた。これらのことから前期初頭から前期前葉にかけて集落が形成されていた可能性が高い。

次は、縄文時代中期中葉から後葉に見いだされる。その形成は沢状の窪み区域が埋没した後と考えている。検出した遺構のうち時代の把握できるものは少ない。それは縄文時代晚期から弥生時代の遺構によって削られていることや重複があること、遺構を検出した区域が岩石による崩壊で埋もれていることに原因がある。

確認された縄文時代後葉の住居跡は平面形がほぼ円形で、床面中央に地床炉が確認できた。同区域において中葉から後葉にかけての住居跡が3棟あるが（3号竪穴住居跡 第11図、3・5号竪穴住居状遺構 第15・16図）、5号竪穴住居状は中期中葉、との2棟は中期後葉から末葉の遺構で、同時期に2棟あったか、あるいは同遺構とも考えられる。また2号竪穴住居跡（第10図）も同期の可能性を持っている。縄文時代中期中葉頃から、埋没した沢状の区域を中心に住居跡が建設されたことが伺える。

縄文時代後期から晩期にかけては、大型の岩石に埋もれて検出された6号竪穴住居状遺構がある。また当期の土器片は、沢状の窪み部分に多く出土する。

これらのことから後期から晩期にかけても集落的な形成はあったと考えられ、岩石の崩落によって埋まつた可能性が高い。

縄文時代末期から弥生時代初頭にかけて土器を出土させた4号竪穴住居跡（第12図）は中期の遺構の上に存在する。規模は7m×5mの梢円形である。地床炉は長軸の北よりに偏り、断面から土器が埋設されているかの痕跡を得ている。1棟のみの検出であるが、削平されている住居跡が同じ沢跡の区域にあった可能性が高く、同レベルで同時期の土器が出土する。

ここで、集石土坑について触れる。埋土上位に礫が置かれ、埋土が同一の状況が認められるもの（人為的な堆積状況）や、埋土の上位には礫が存在しないが、断面形などが上記のものと類似し、人為的堆積であるものを集石土坑とした。8基検出している。遺物が出土してゐるのは埋土の下位（集石の下）から縄文時代晩期から弥生時代初頭の土器片を得ている。これら集石土坑は墓坑の可能性が高い。これらは4号竪穴住居跡からやや西側に離れた区域に集中して検出されている。この区域は縄文時代晩期から弥生時代初頭において墓域として利用されていた可能性がある。

総括すると、縄文時代早期末葉から弥生時代にかけて集落として形成していたと考えられるが、そのうち縄文時代前期中葉から中期前葉までの間に沢状の地形が埋没したに違いない。調査区域においては住居跡はその埋没沢を中心に構築されている。その最盛期は縄文時代晩期から弥生時代にかけてであり、おそらく墓域を伴った集落の可能性が指摘できる。その集落の中心は調査区域の山陰とともに、調査区外（北側の畑作地）に及ぶものと推定する。

2 遺物

今回の発掘調査において、土器では縄文時代早期中葉から弥生時代後期にかけての遺物を確認した。各の時代において出土量には若干の差があるが、土器の捨て場といった大規模な遺物包含層がないにも関わらず、早期の貝殻条痕文の土器から、弥生時代の変形工字文を施した浅鉢まで、大きな空白期がなく出土している。

もっとも出土量が多いのが縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭にかけての土器である。ついで縄文時代中期中葉の土器となり、ほかはほぼ同量の出土をみる。少いのは縄文時代前期中葉から後葉にかけての土器で、この事は当遺跡に縱走する沢の形成に関係してくると考えている。

特筆すべき点は、弥生時代の変形土器や壺形土器が多いことと、弥生時代後期にあたって南方形の天王山式土器や北海道系の後北C2式土器が出土したことがあげられる。この事は弥生時代になって隆盛期を迎えた遠方との交流も盛んになったのではないかと推測される。

3 終わりに

今回の発掘調査で小松Ⅱ遺跡は縄文時代晩期から弥生時代初頭を中心とした集落跡であることが判明した。その形成は縄文時代前期前葉頃から始まった可能性がある。この事は隣接する小松洞窟との関連から考えるべきであるが、調査員力量と紙面・時間などの関係から考察ができなかったことをお詫びしたい。また、土器においても理解が不十分のままに分類を行ったために、間違った記述をしている可能性もある。

しかし、数少ない気仙川上流域における発掘調査の中で、貴重な資料を得たことは有意義な成果である。今後の調査に幾ばくかの参考となれば幸いである。

参考文献

- | | | |
|--------|------------------|---------------------------|
| 酒井宗孝 | 「上鷹生遺跡発掘調査報告書」 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第253集 |
| 大道篤史ほか | 「上甲子遺跡発掘調査報告書」 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第254集 |
| 小田野哲憲 | 「岩手の弥生式土器編年試論」 | 岩手県立博物館研究報告 5 |
| 須藤隆 | 「東日本における弥生文化の受容」 | 考古学雑誌73-1 |
| 須藤隆 | 「東北地方の初期弥生文化」 | 考古学雑誌68-3 |
| 晴山雅光 | 「細田遺跡発掘調査報告書」 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第283集 |
| 村上拓 | 「牧田貝塚発掘調査報告書」 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第241集 |
| 菊池栄壽 | 「山王山第9次発掘調査報告書」 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第316集 |
| 松本達速 | 「下館銅屋遺跡発掘調査報告書」 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第297集 |
| 宮本節子 | 「相沢遺跡発掘調査報告書」 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第332集 |
| | 「岩手県の地名」 | 日本歴史地名大系 3 |

写 真 図 版

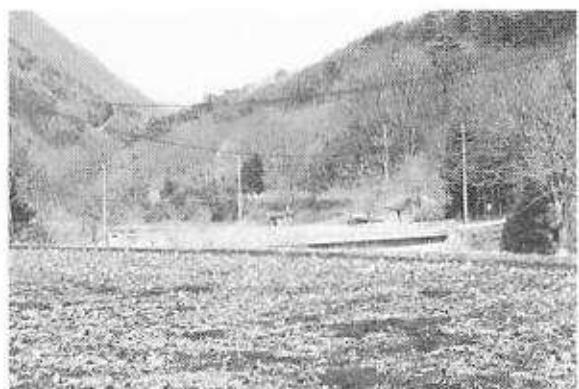


遠景（北面から）



遠景（真上から）

写真図版 1 遺跡遠景



近景（小松Ⅰから）



近景（小松洞窟上から）



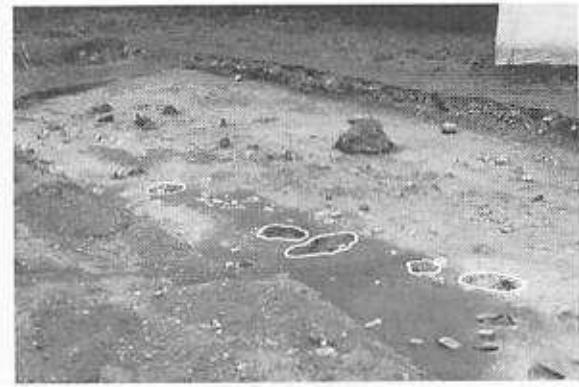
B区調査前風景



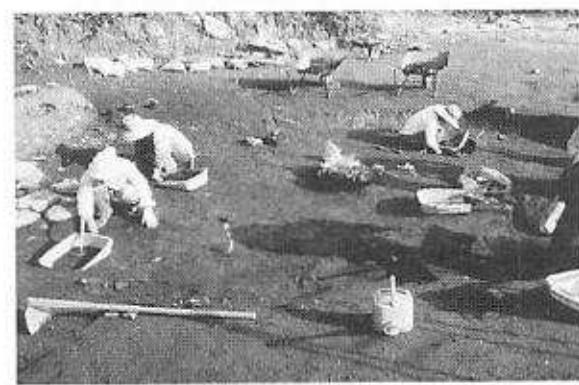
検出状況



B区完掘（北から）



AⅣ区完掘（西から）



精査状況



空中写真準備状況

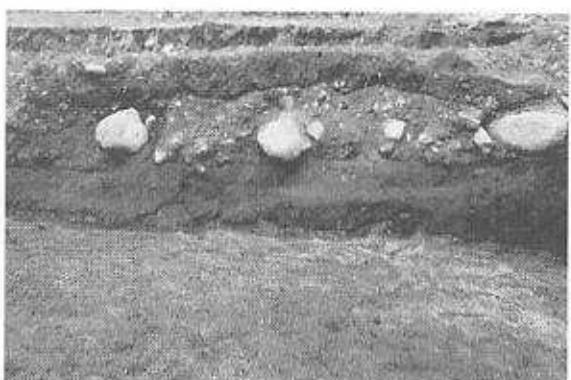
写真図版2 調査前後風景・作業状況



B IV区土層断面①上位



A IV区土層断面①北

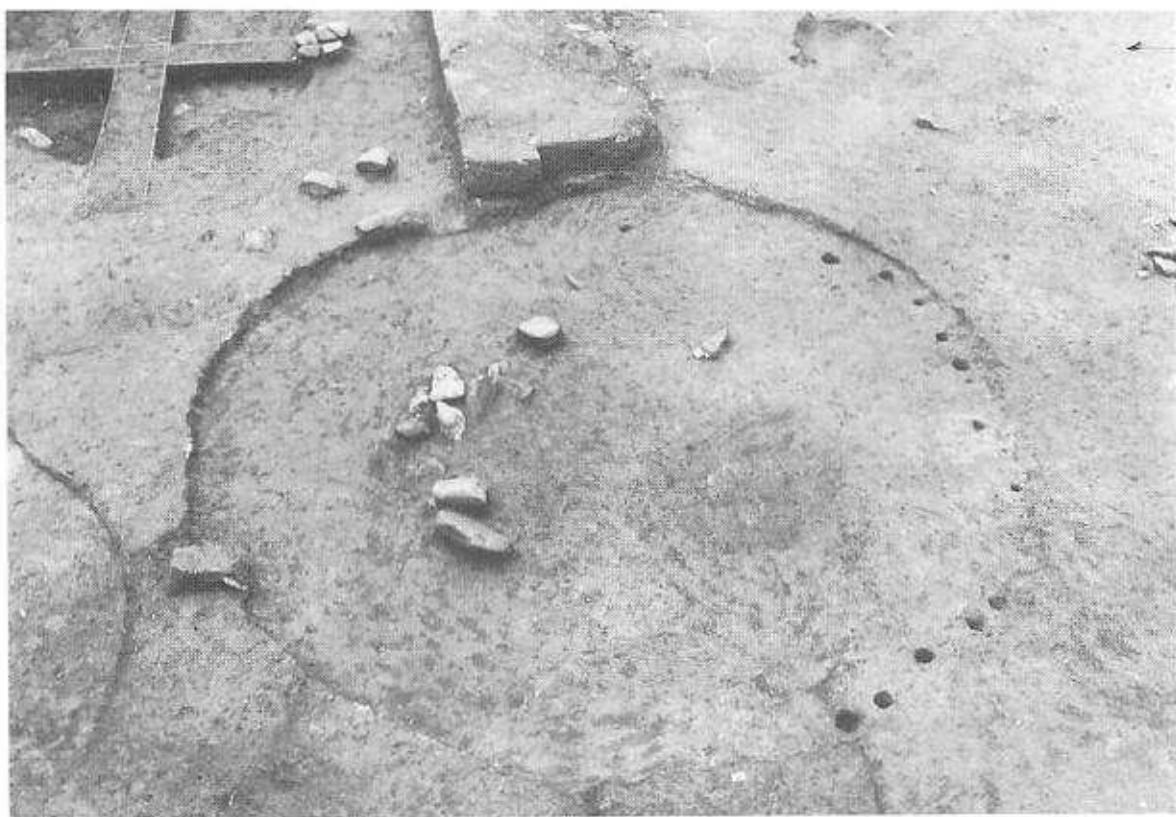


A IV区土層断面②南

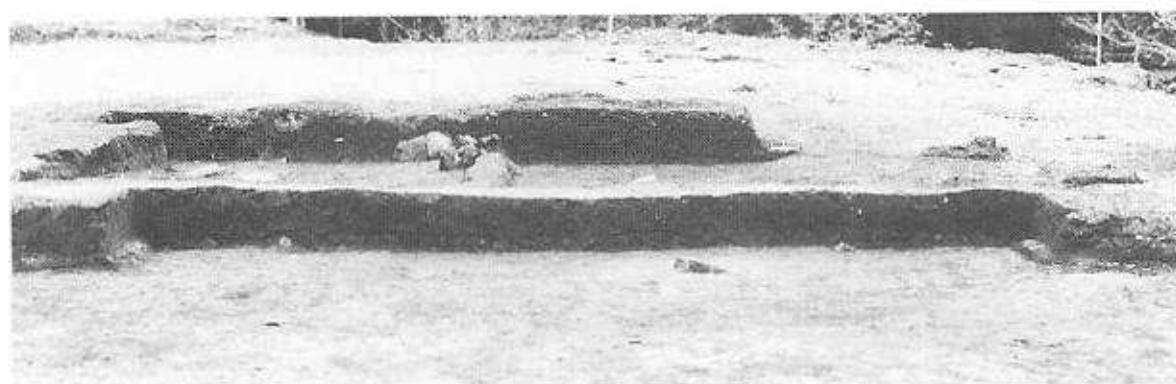


B IV区土層断面②下位

写真図版 3 各区域土層状況



平面



断面



遗物出土状况



P P 2 断面



平面



断面



炉跡 平面



炉跡 断面

写真図版 5 2号竪穴住居跡



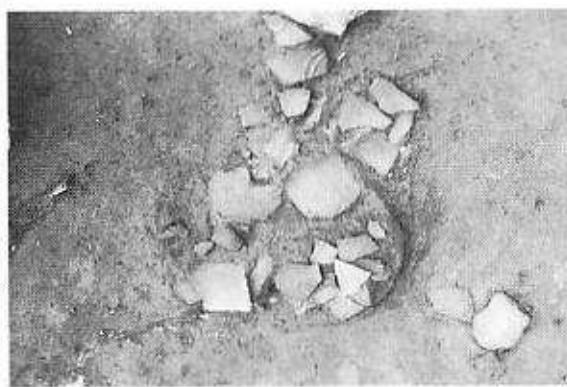
平面



断面



焼土 断面



遺物出土状況



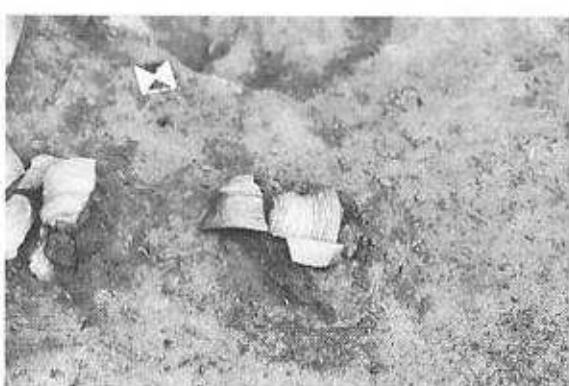
平面



断面



炉跡 断面

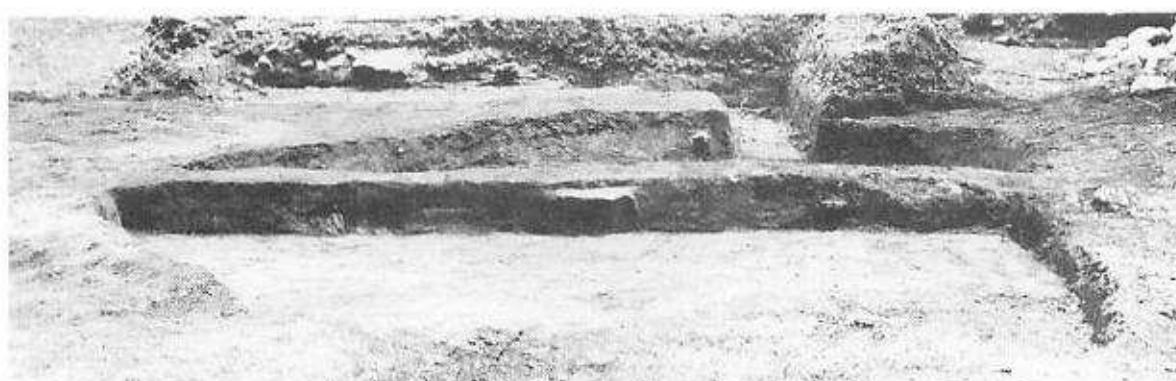


遺物出土状況

写真図版 7 4号整穴住居跡



平面



断面



P.P.4 断面



遺物出土状況

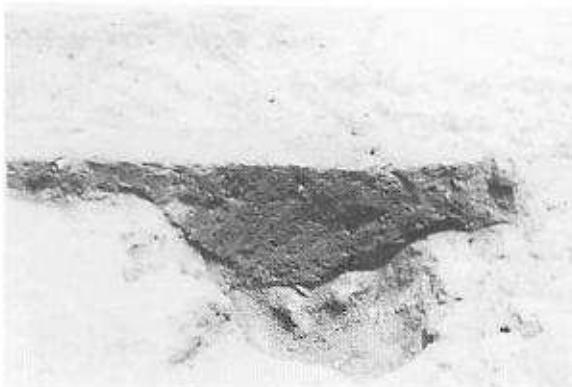
写真図版 8 1号竪穴住居状遺構



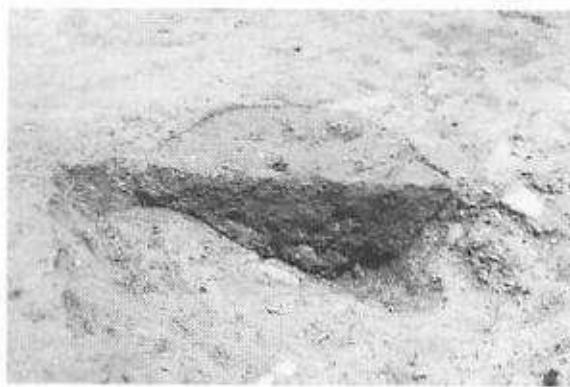
平面



断面



PP 1 断面



PP 3 断面

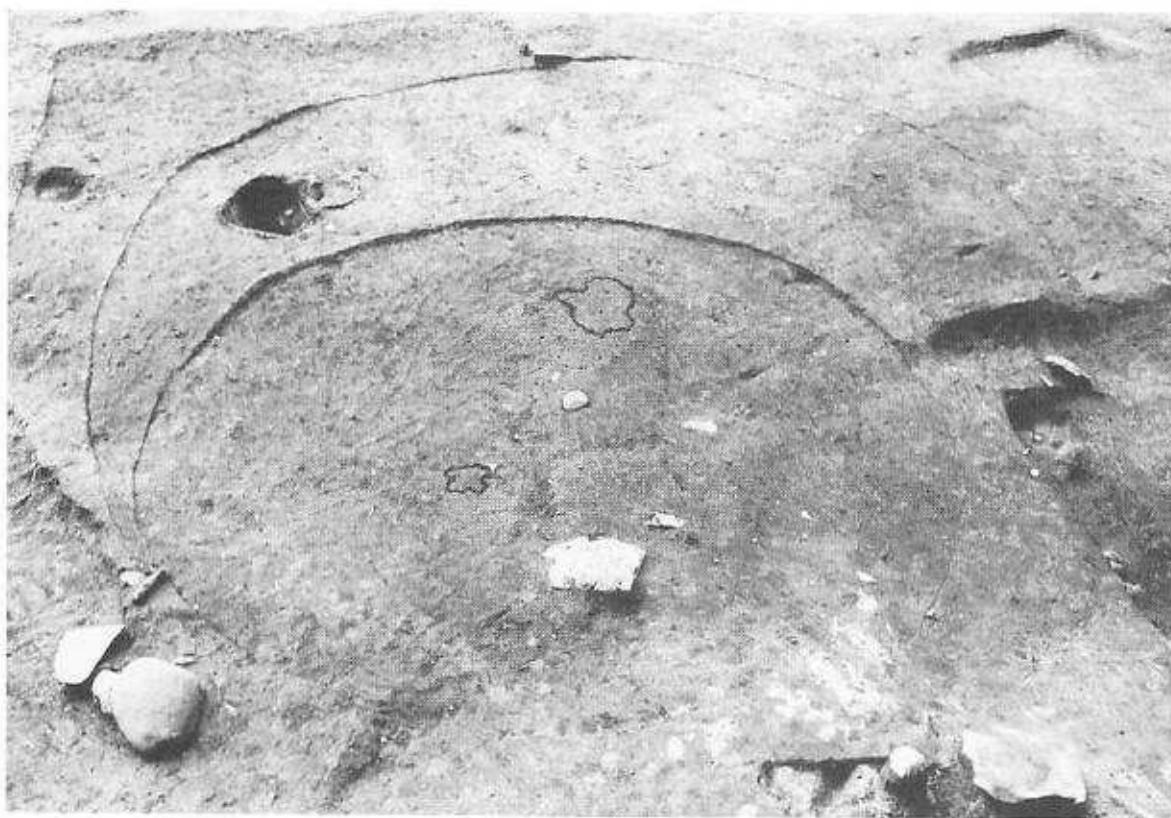
写真図版 9 2号竪穴住居状遺構



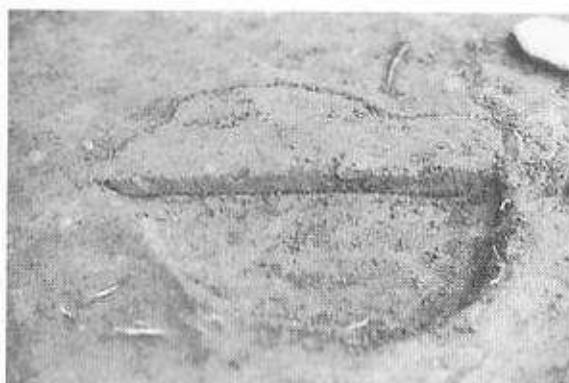
平面



断面（4号竪穴住居跡床下断面）



平面（外4号竪穴住居状 内5号竪穴住居状遺構）



5号に伴う焼土断面①



5号に伴う焼土断面②



4号に伴う埋設?土器



P P 2 平面

写真図版11 4・5号竪穴住居状遺構

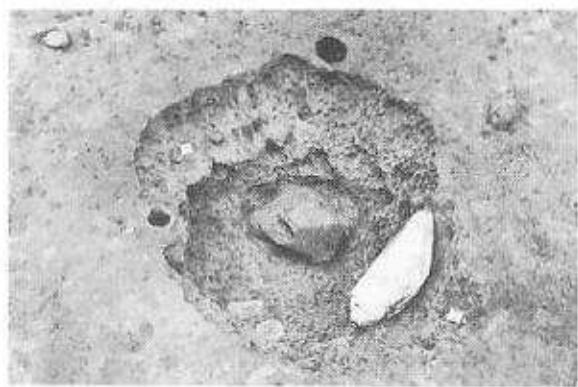


平面



断面

写真図版12 6号竪穴住居状遺構



1号土坑 平面



1号土坑 断面



2号土坑 平面



2号土坑 断面



3号土坑 平面



3号土坑 断面



4号土坑 平面



4号土坑 断面

写真図版13 1～4号土坑



5号土坑 平面



5号土坑 断面



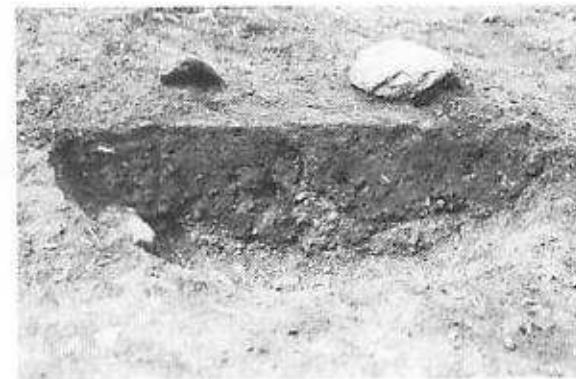
6号土坑 平面



6号土坑 断面



7号土坑 平面



7号土坑 断面



8号土坑 平面



8号土坑 断面

写真図版14 5～8号土坑



9号土坑 平面



9号土坑 断面



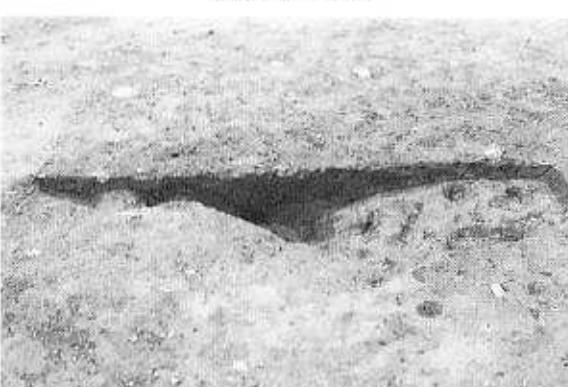
10号土坑 平面



10号土坑 断面



11号土坑 平面



11号土坑 断面



12号土坑 平面

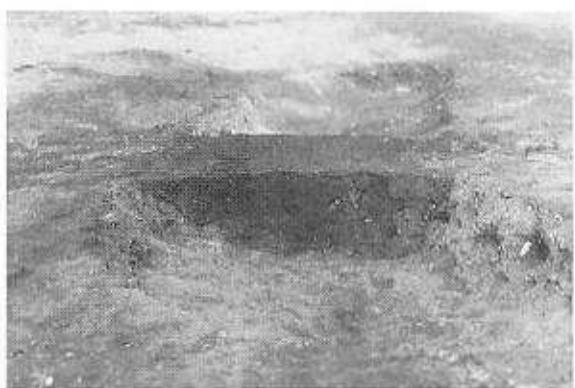


12号土坑 断面

写真図版15 9～12号土坑



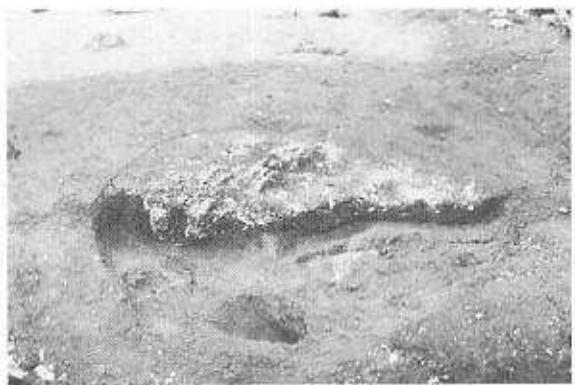
13号土坑 平面



13号土坑 断面



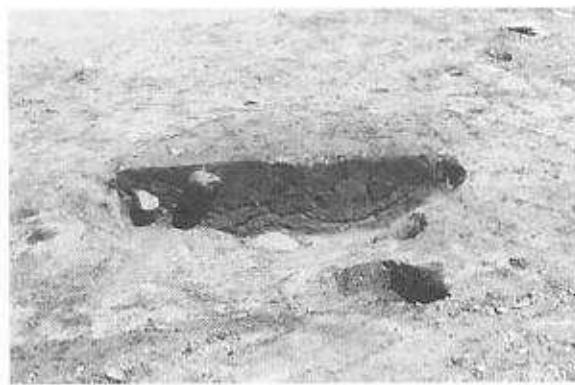
14号土坑 平面



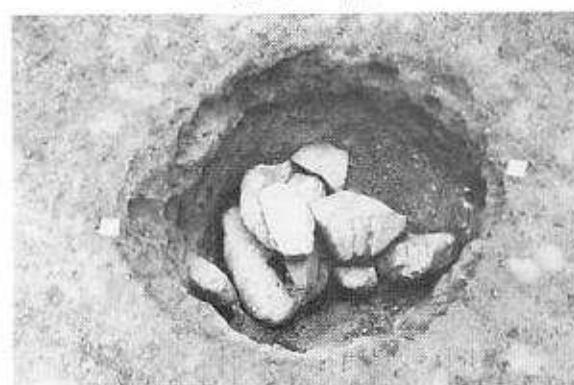
14号土坑 断面



15号土坑 平面



15号土坑 断面



16号土坑 平面



16号土坑 断面

写真図版16 13~16号土坑



17号土坑 平面



17号土坑 断面



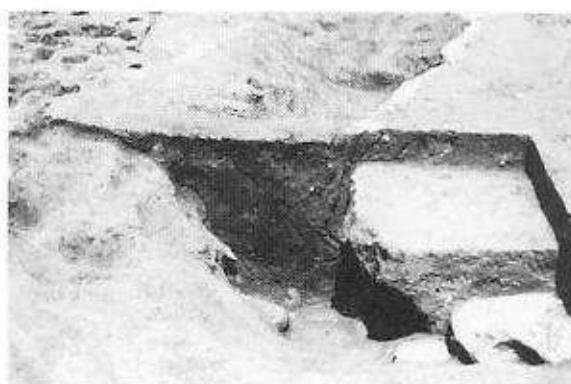
18号土坑 平面



18号土坑 断面



23号土坑 平面



23号土坑 断面



24号土坑 平面



24号土坑 断面

写真図版17 17・18・23・24号土坑



19~22号土坑 周辺の平面



19号土坑 断面



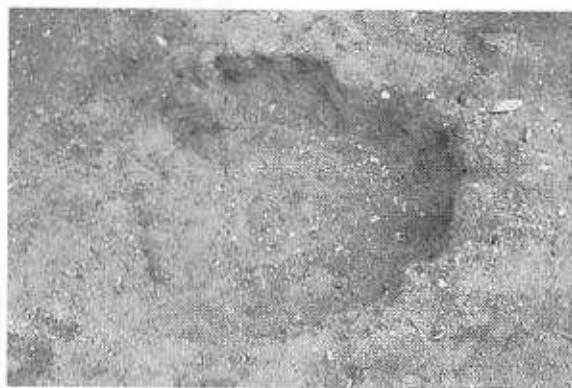
20号土坑 断面



21号土坑 断面



22号土坑 断面



25号土坑 平面



25号土坑 断面



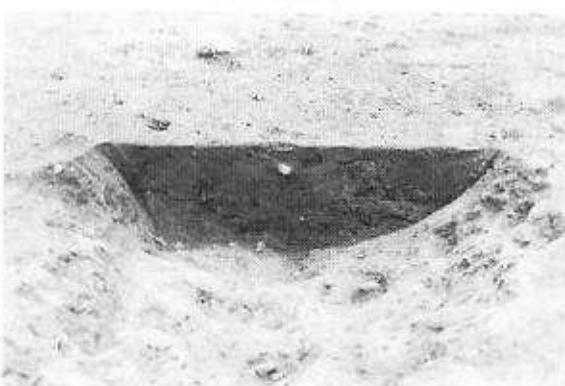
26号土坑 平面



26号土坑 断面



27号土坑 平面



27号土坑 断面



28号土坑 平面



28号土坑 断面

写真図版19 25~28号土坑



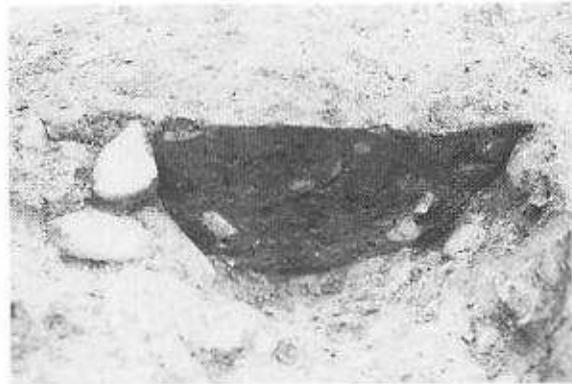
29号土坑 平面



29号土坑 断面



30号土坑 平面



30号土坑 断面



31号土坑 平面



31号土坑 断面



32号土坑 平面



32号土坑 断面

写真図版20 29~32号土坑



33号土坑 平面



33号土坑 断面



34号土坑 平面



34号土坑 断面



35号土坑 平面



35号土坑 断面

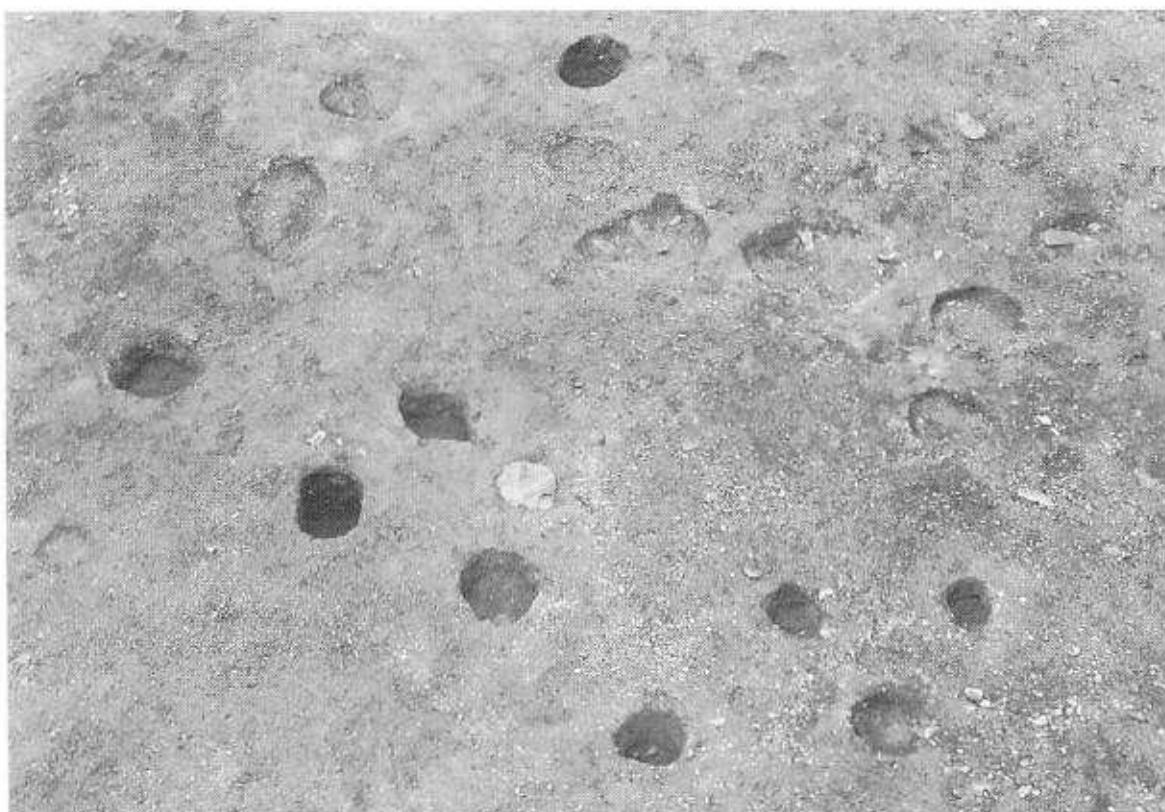


36号土坑 平面



36号土坑 断面

写真图版21 33~36号土坑



平面



SKP 10 断面



SKP 14 断面



SKP 30 平面



SKP 30 断面



平面



SKP 27 平面



SKP 27 断面



SKP 28 平面

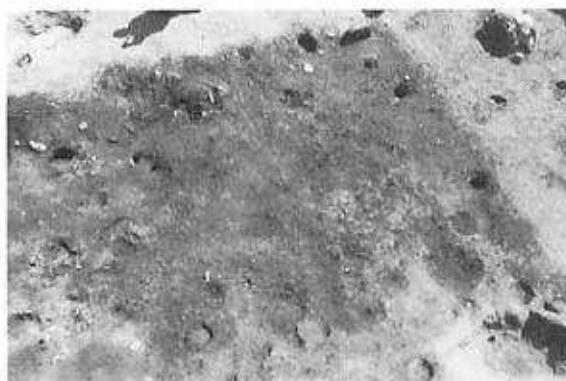


SKP 28 断面

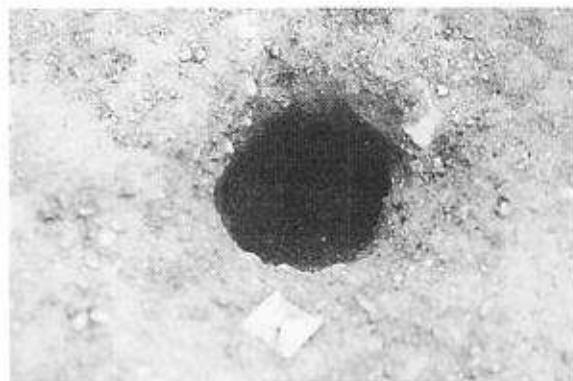
写真図版23 柱穴群2



柱穴群3および旧河道



近景



SKP 71 平面

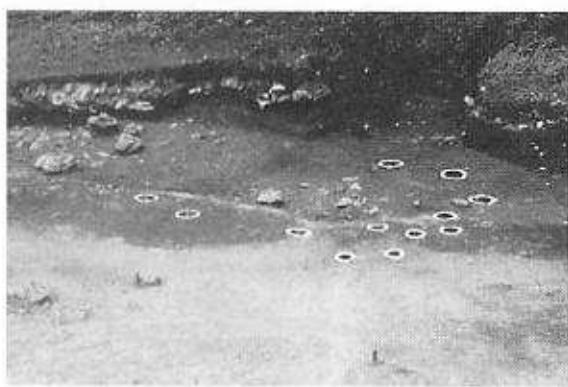


SKP 57 断面



SKP 77 断面

写真図版24 柱穴群3



柱穴群4 平面



遺物出土状況



SKP 210 平面



SKP 204 断面



SKP 212 平面



SKP 212 断面

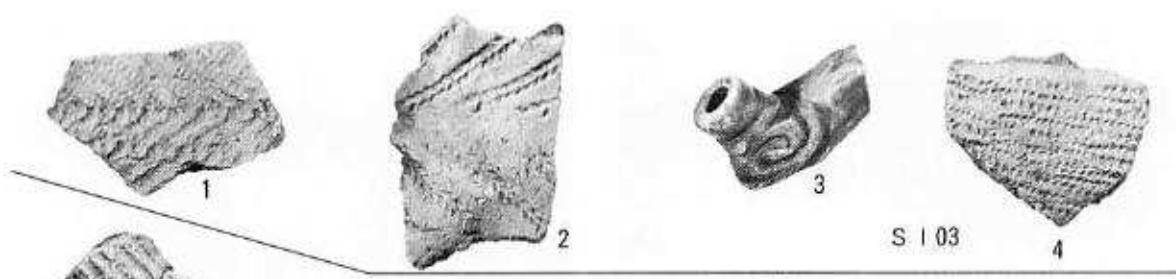


焼土 平面

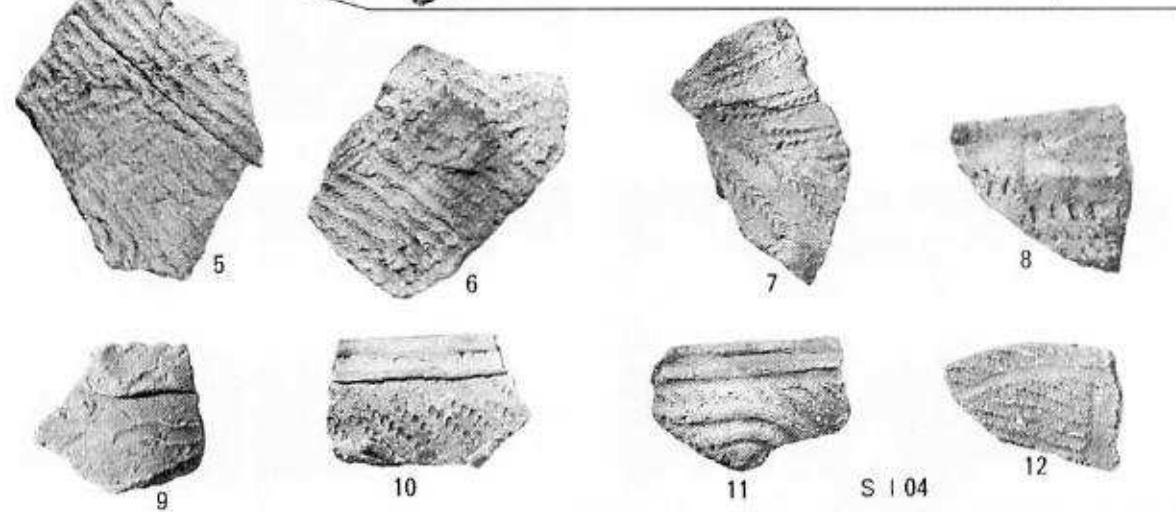


焼土 断面

写真図版25 柱穴群4、焼土遺構



S I 03

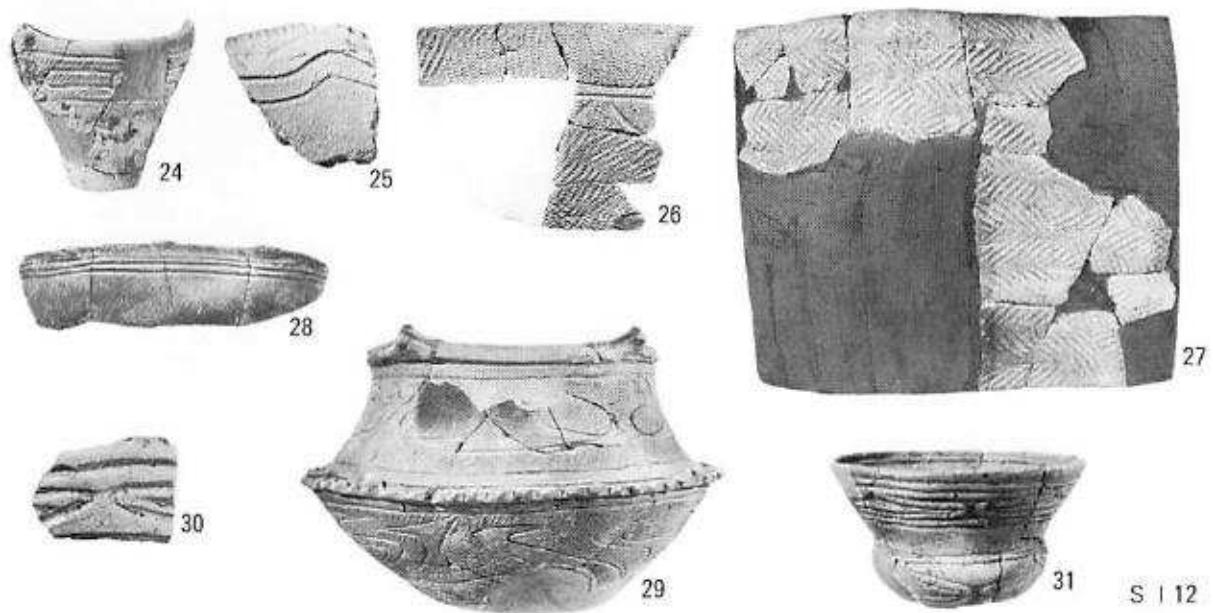
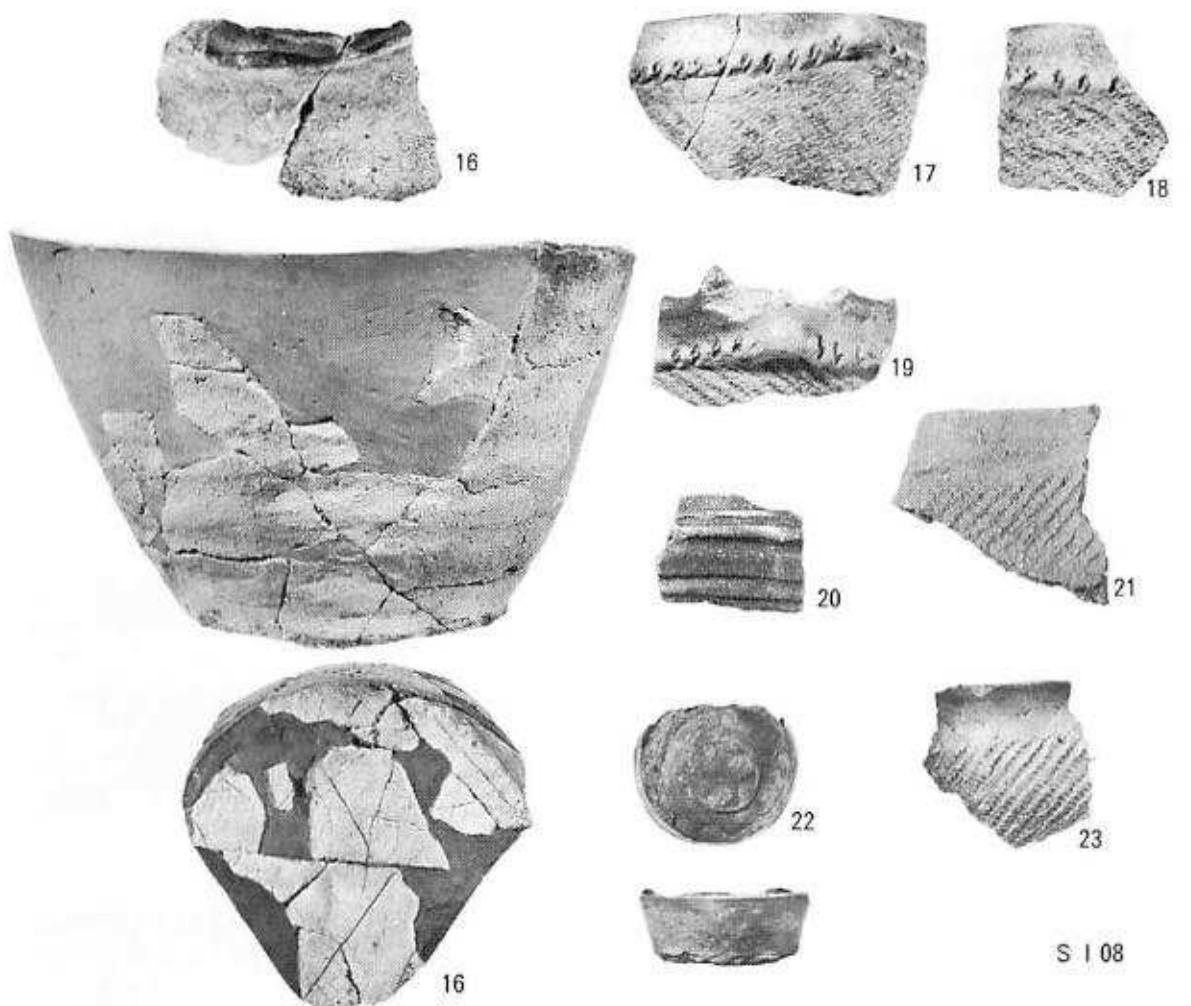


S I 04

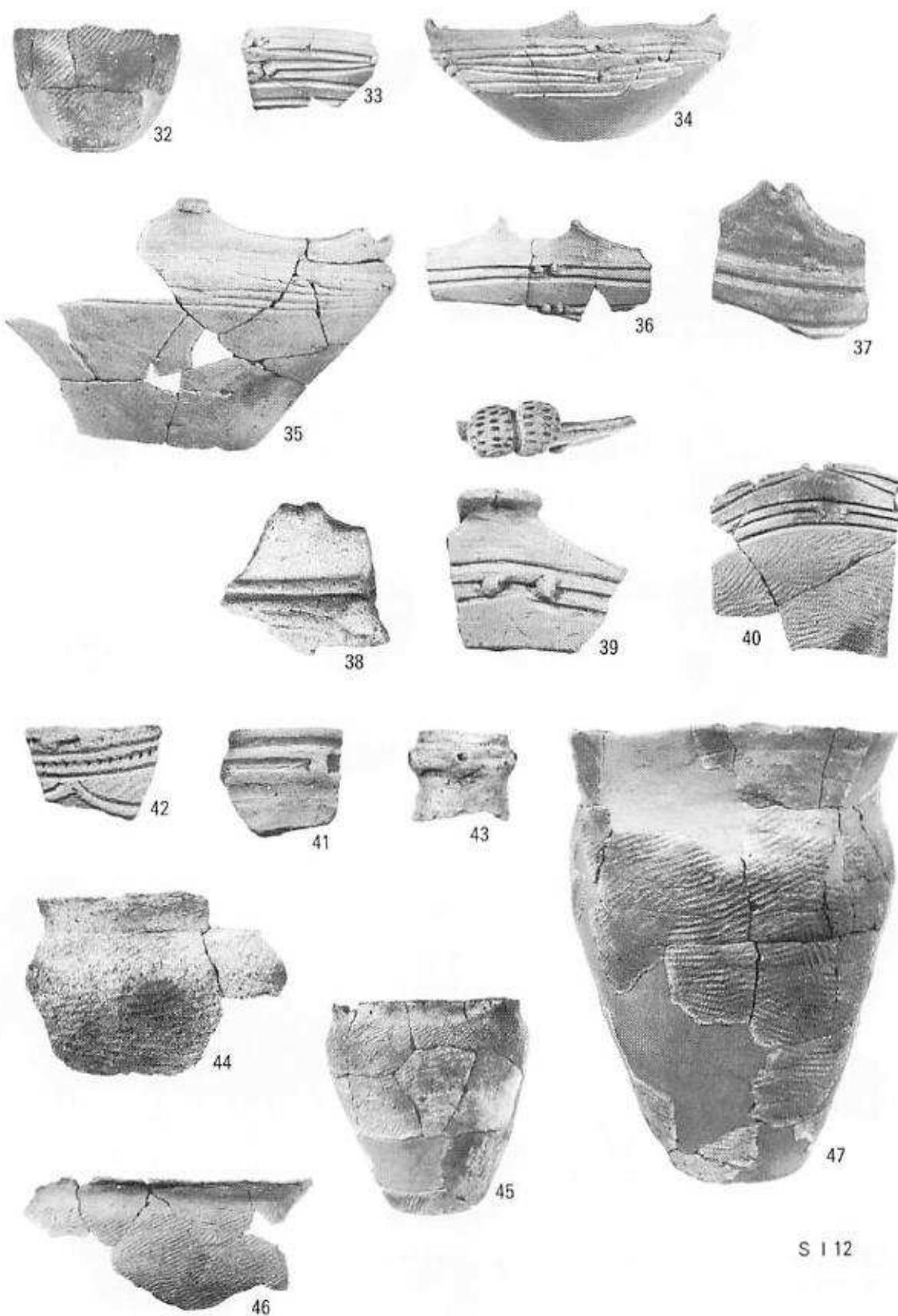
S I 08



写真図版26 遺構内出土土器 1

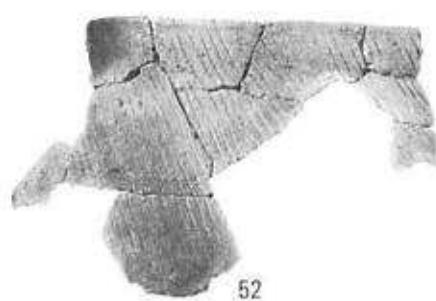
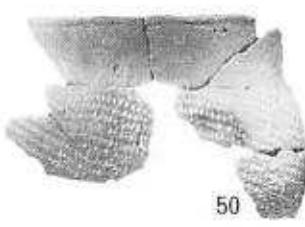
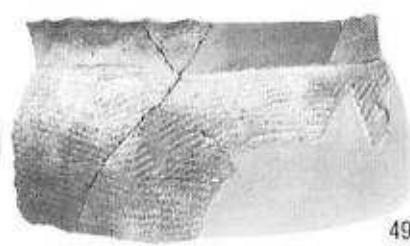


写真図版27 遺構内出土土器 2

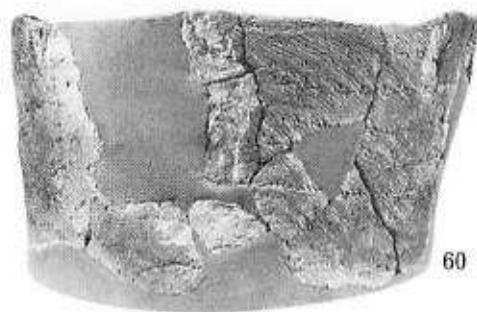


S I 12

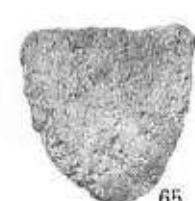
写真図版28 遺構内出土土器 3



S I 12

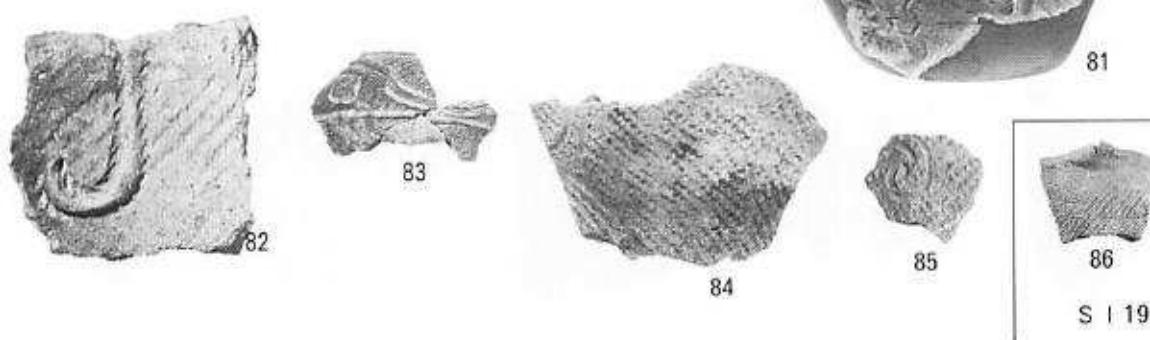
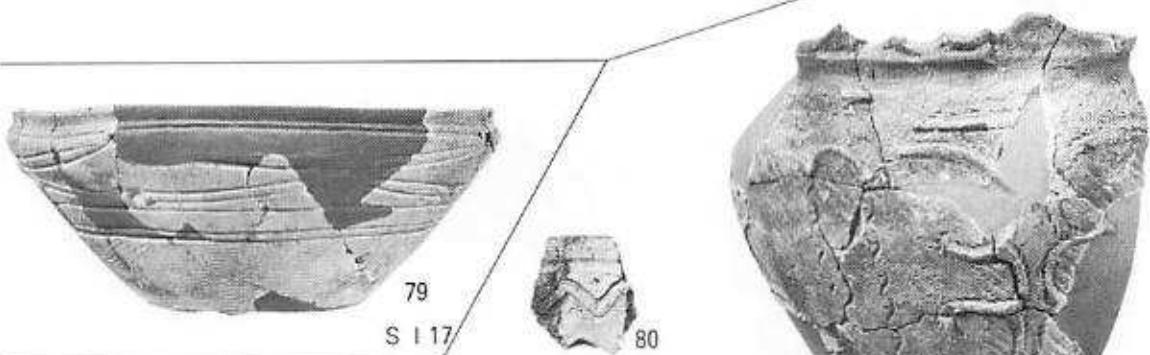
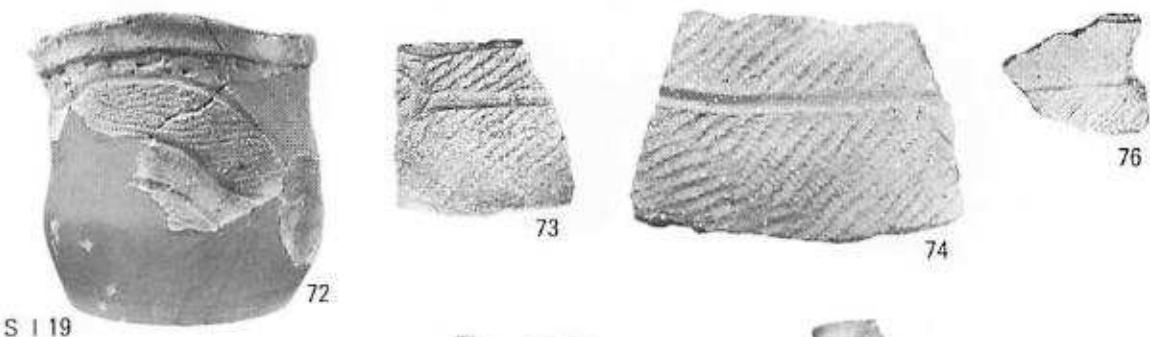
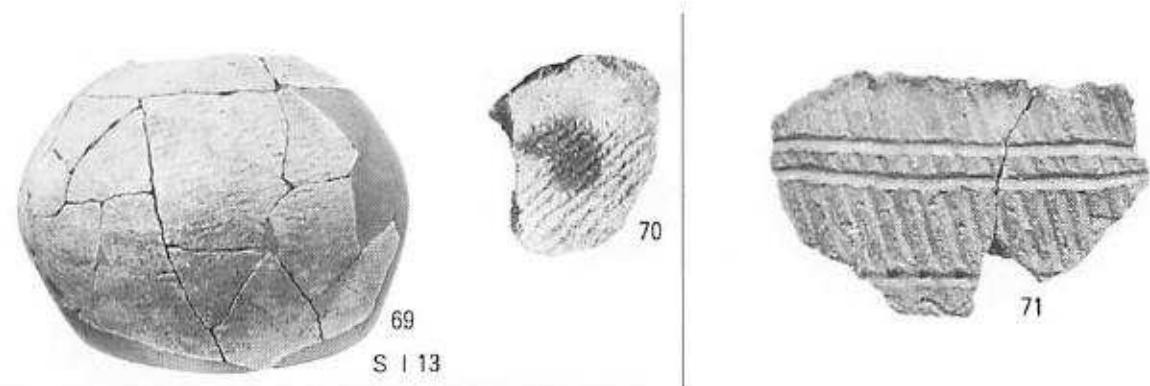


S I 06

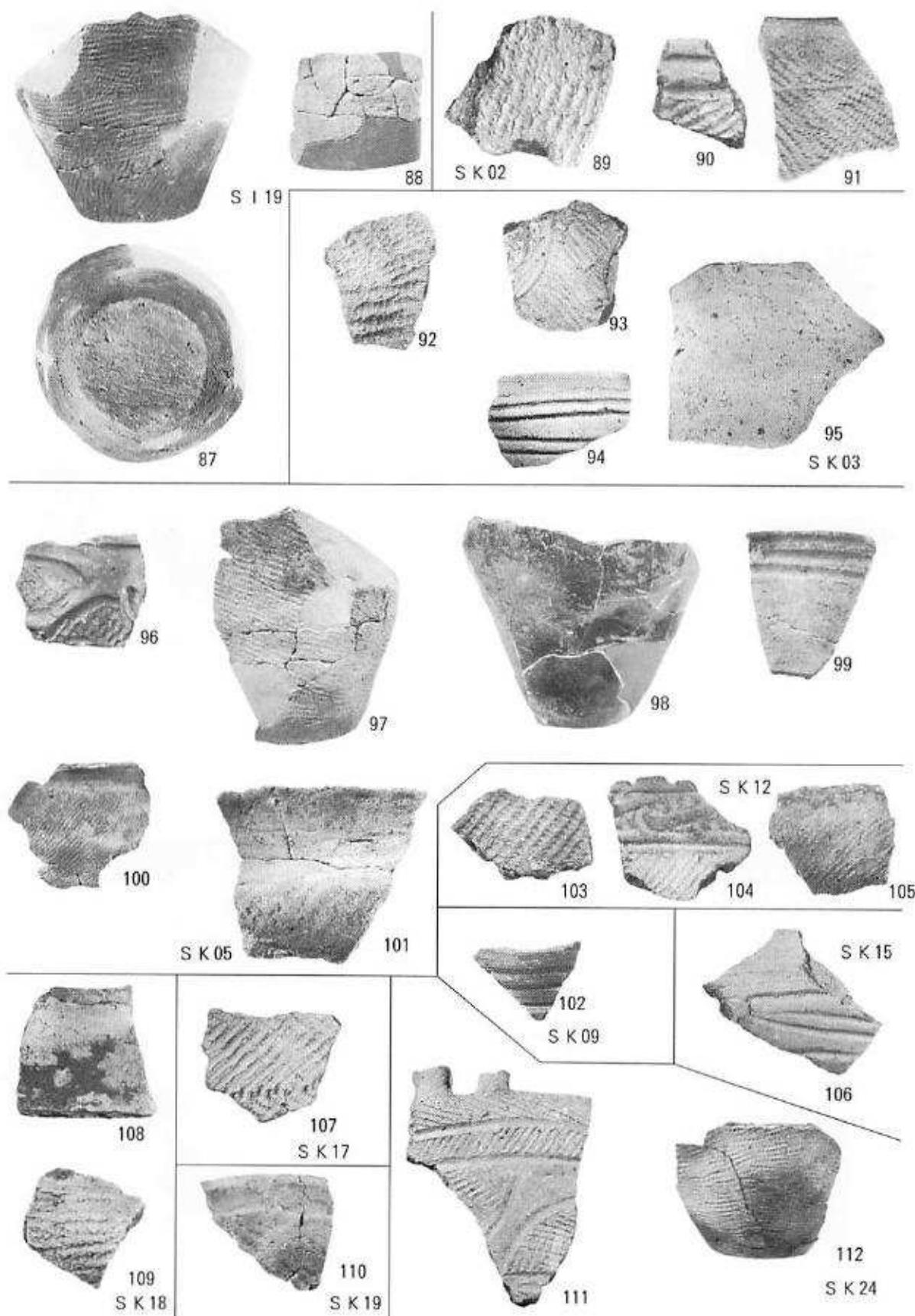


S I 13

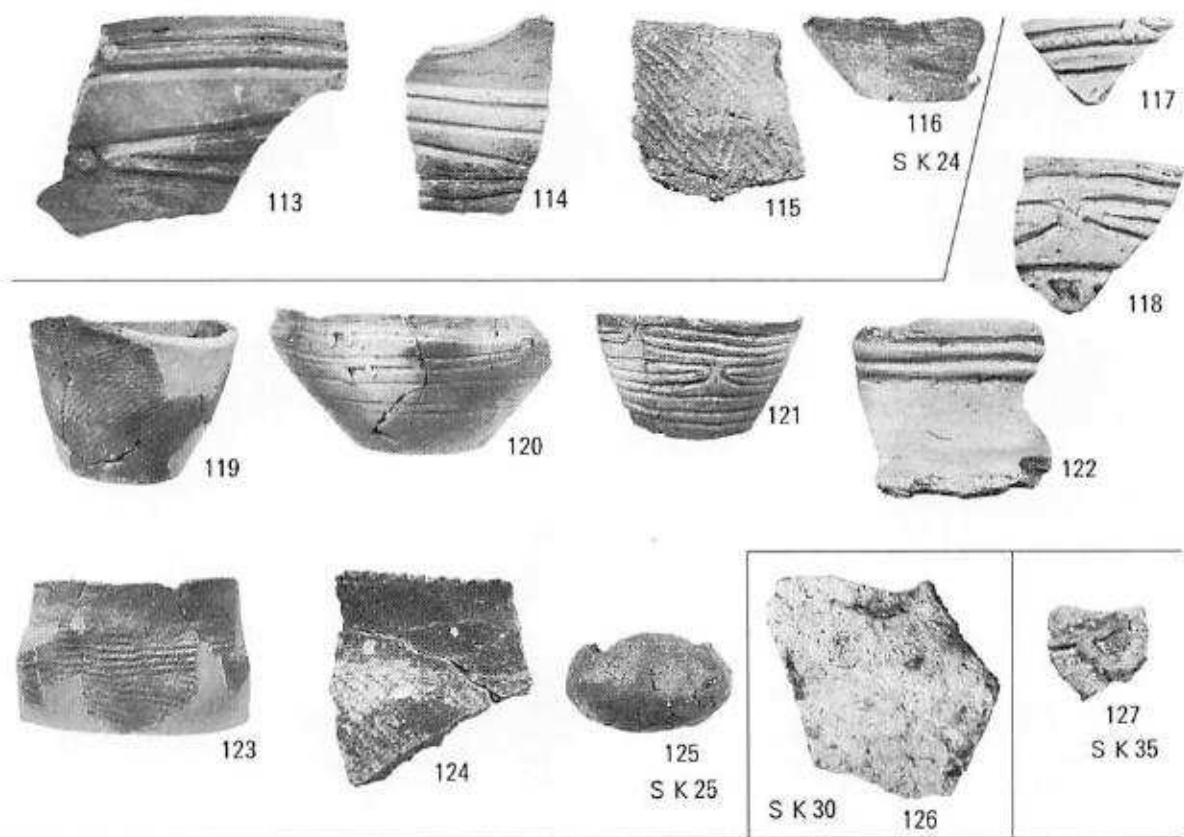
写真図版29 遺構内出土土器 4



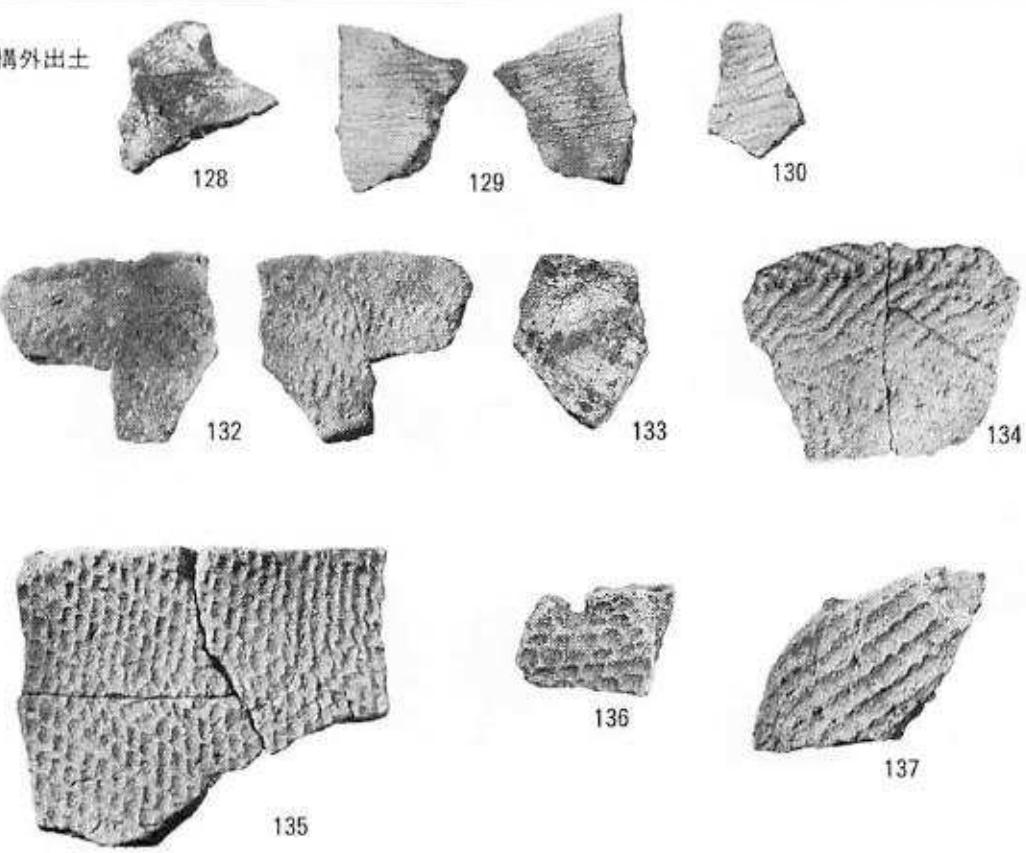
写真図版30 遺構内出土土器 5



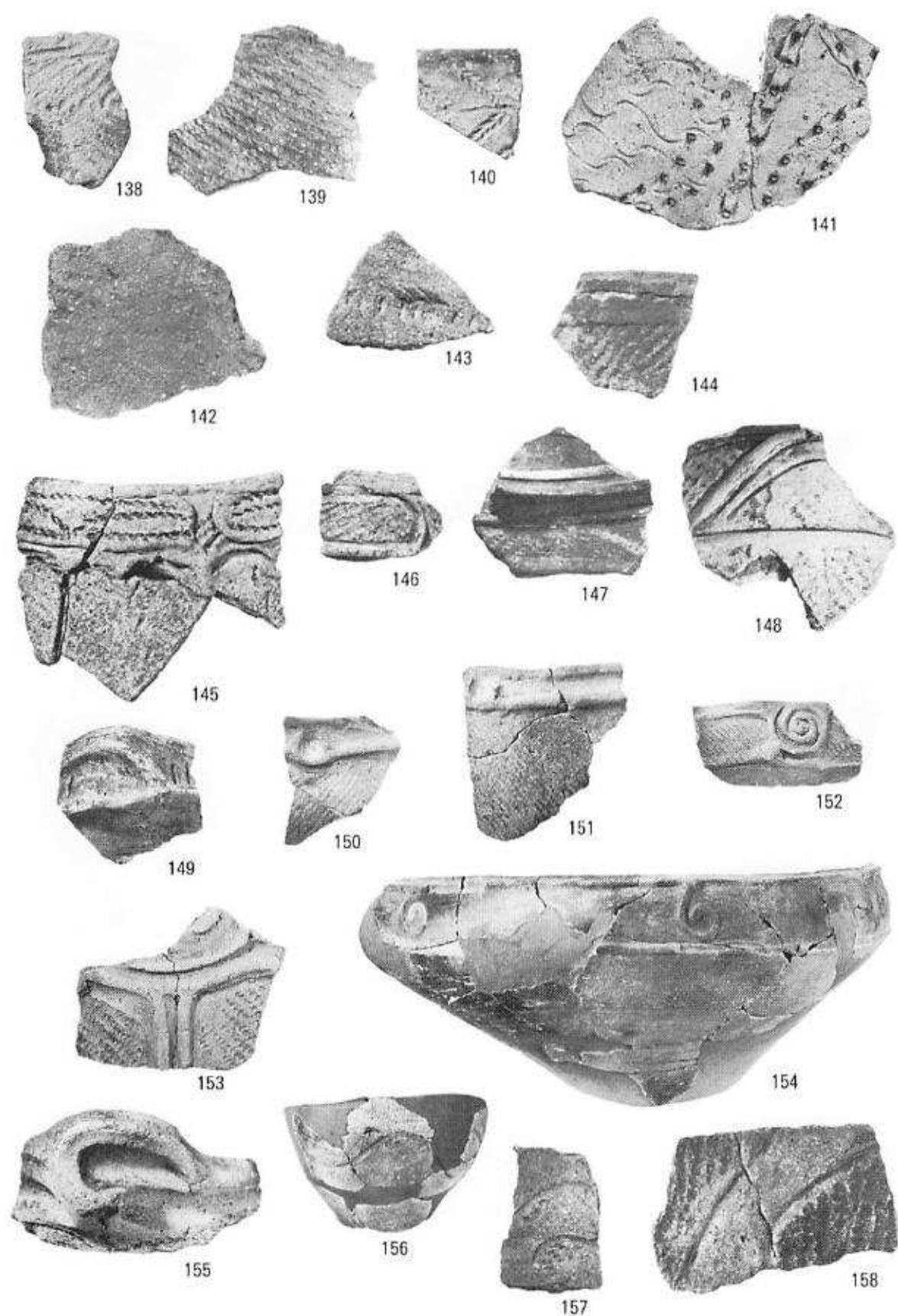
写真図版31 遺構内出土土器 6



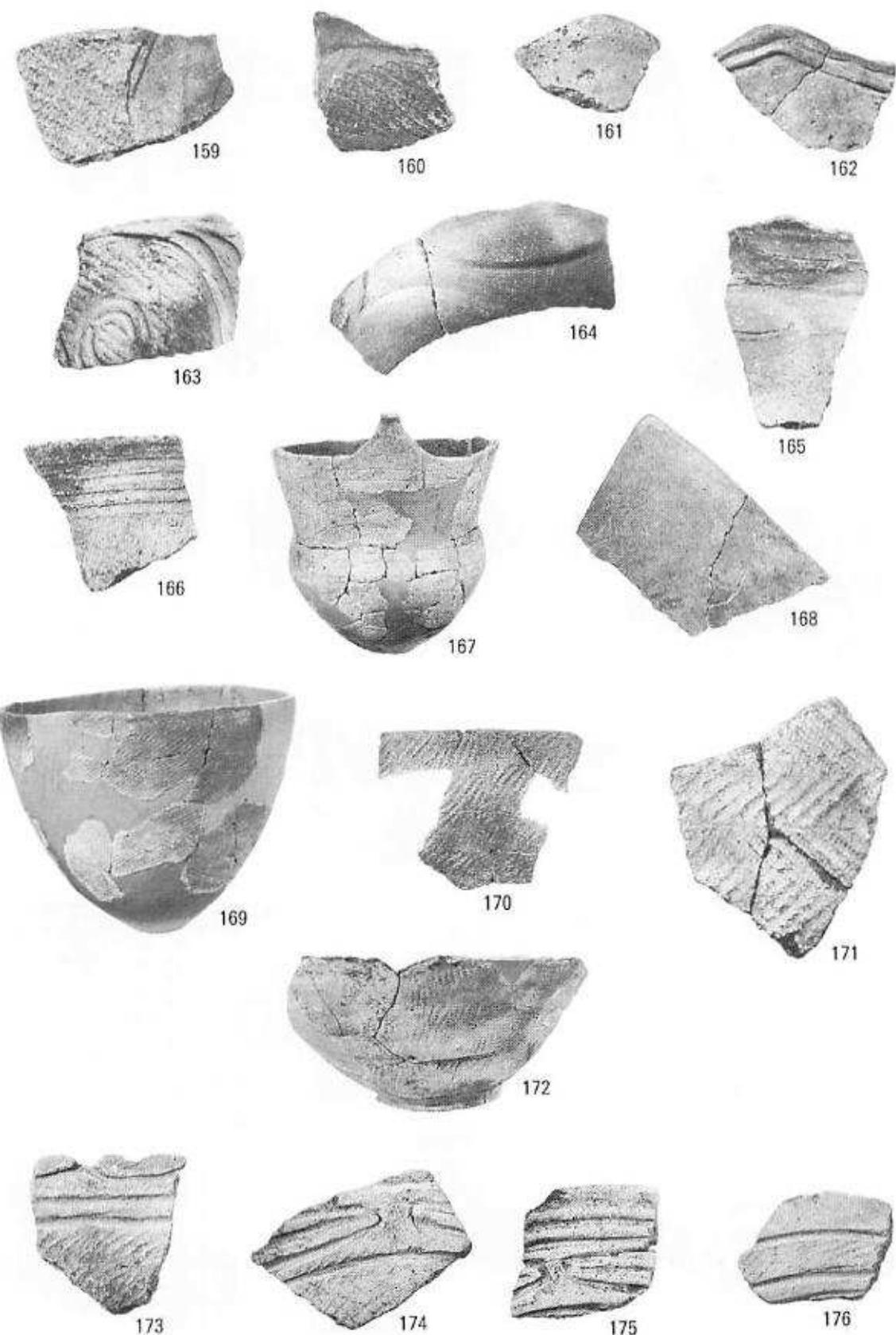
遺構外出土



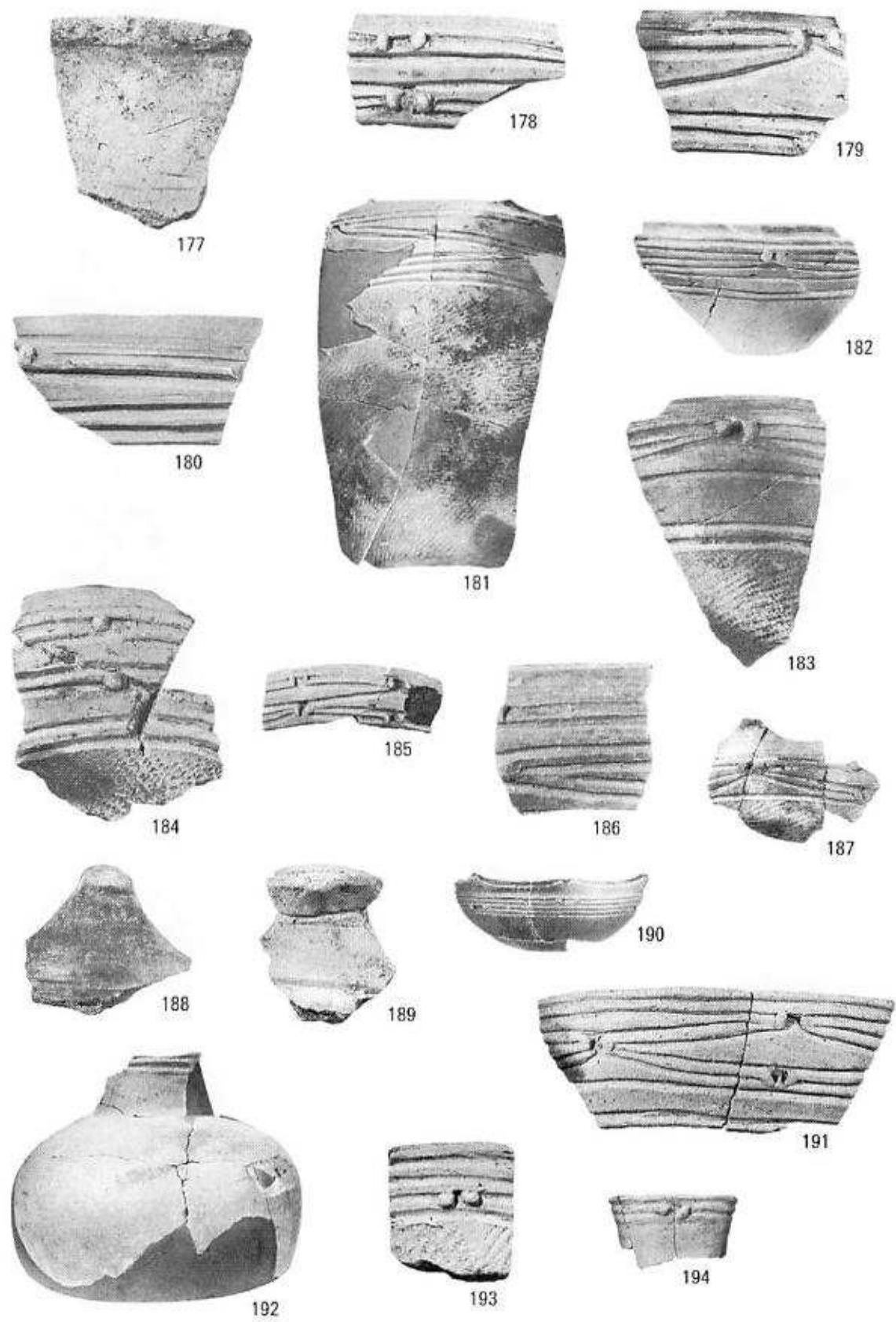
写真図版32 遺構内出土土器7・遺構外出土土器1



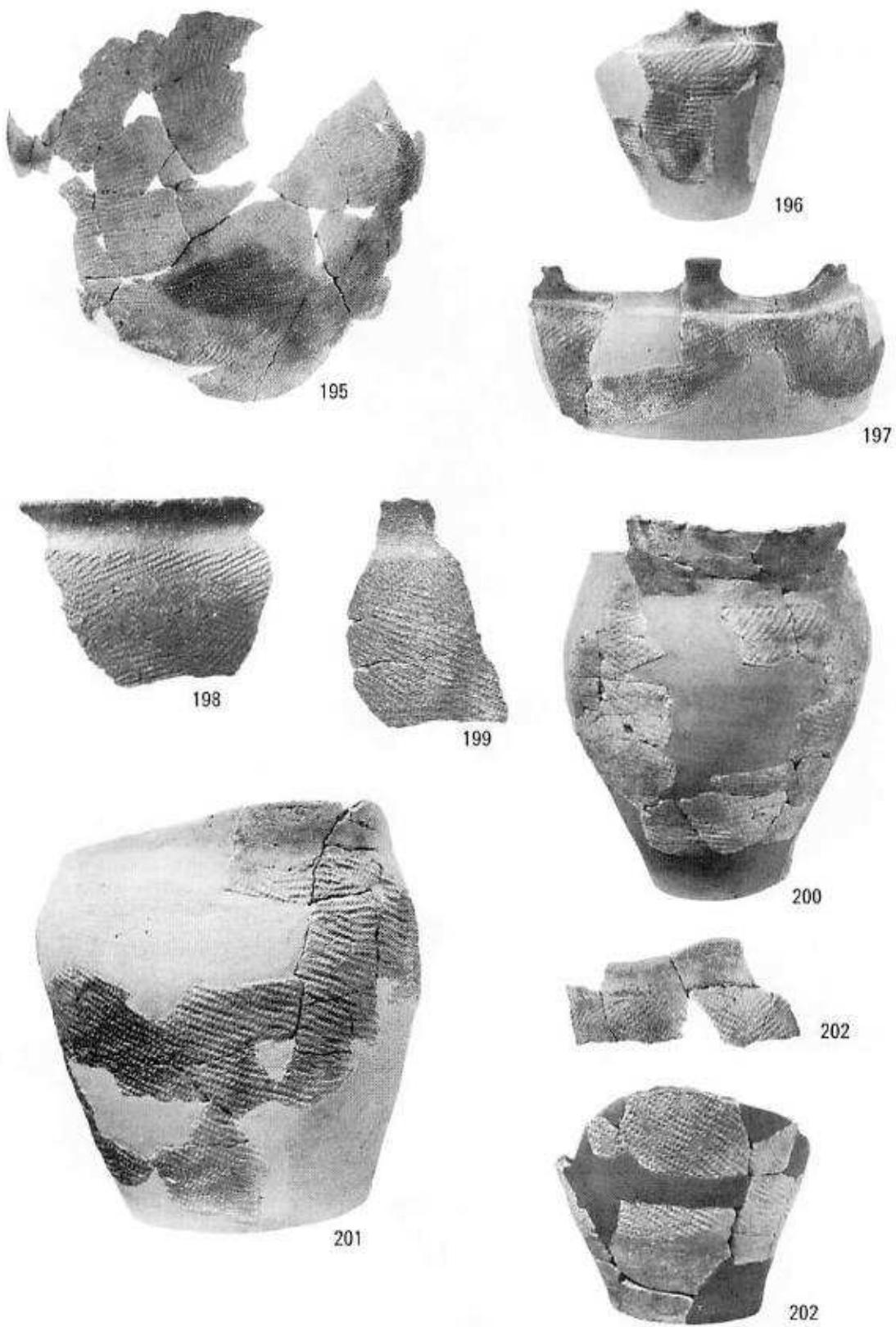
写真図版33 遺構外出土土器 2



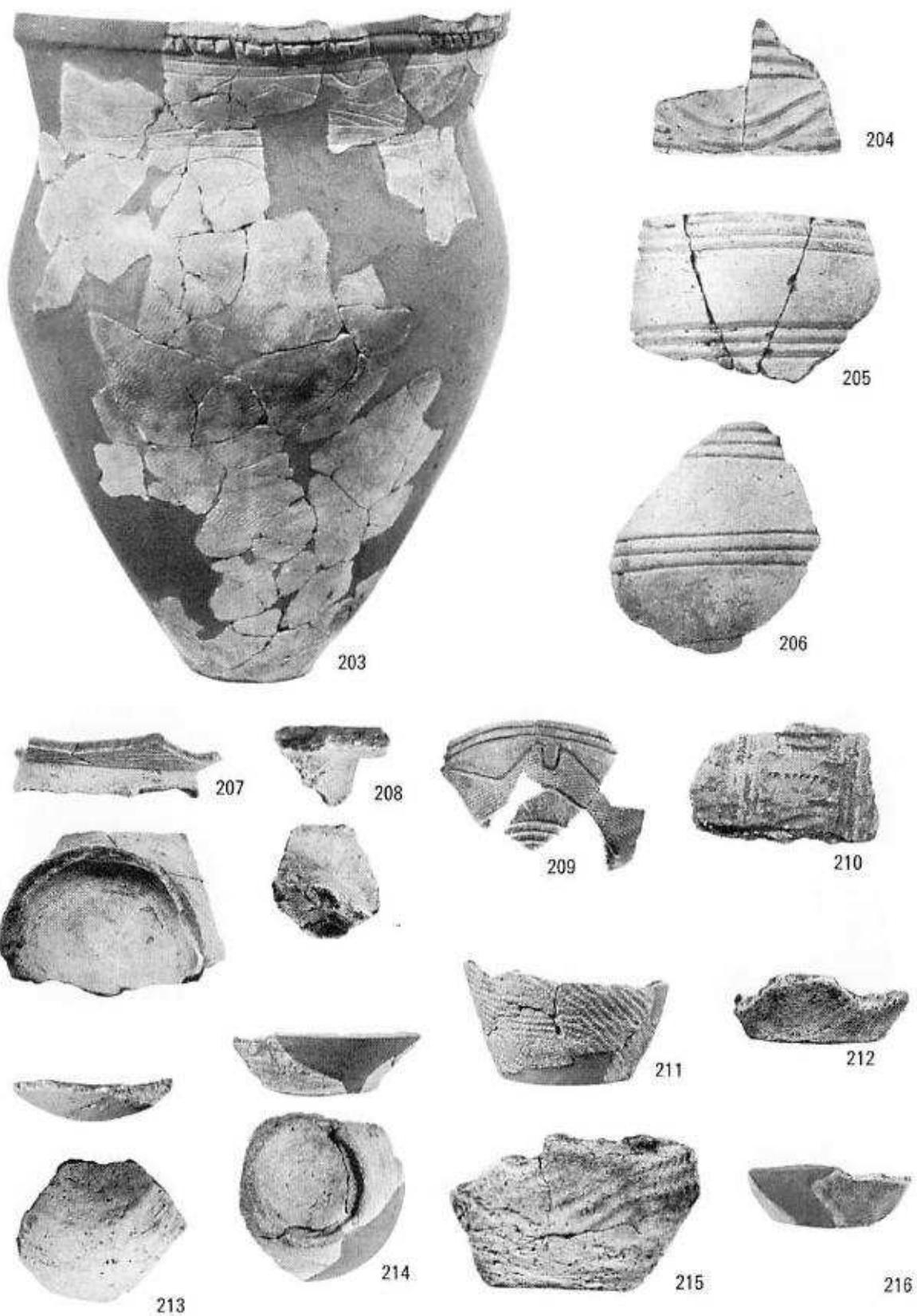
写真図版34 遺構外出土土器 3



写真図版35 遺構外出土土器 4



写真図版36 遺構外出土土器 5



写真図版37 遺構外出土土器 6



217



218



219



220



221



222



223



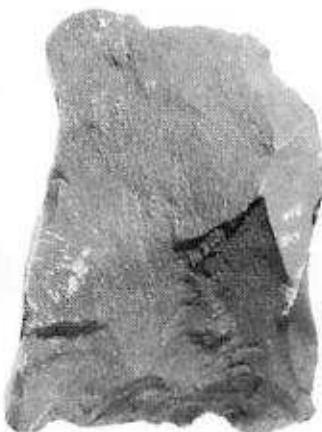
224



225



226

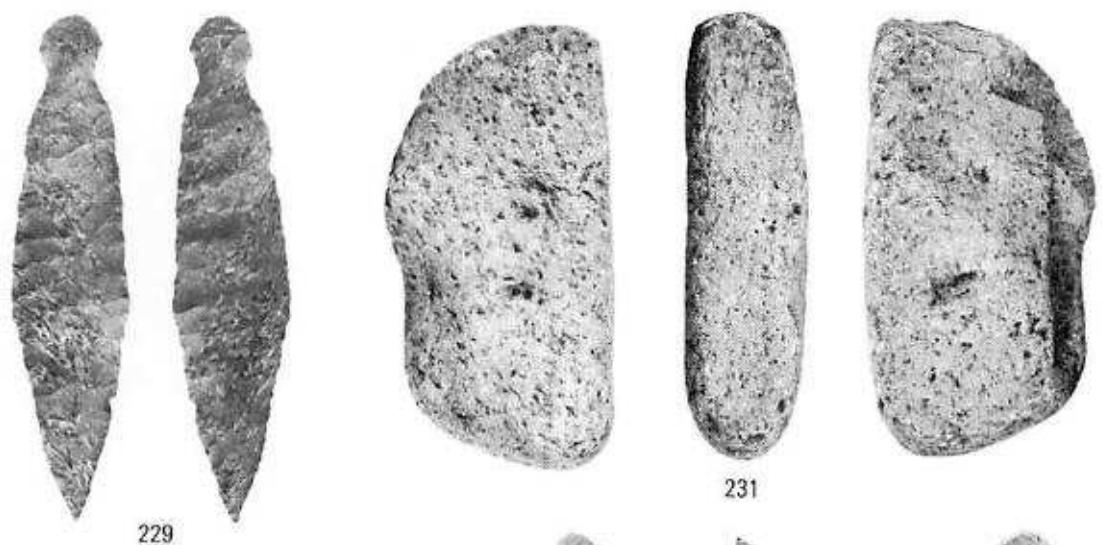


227



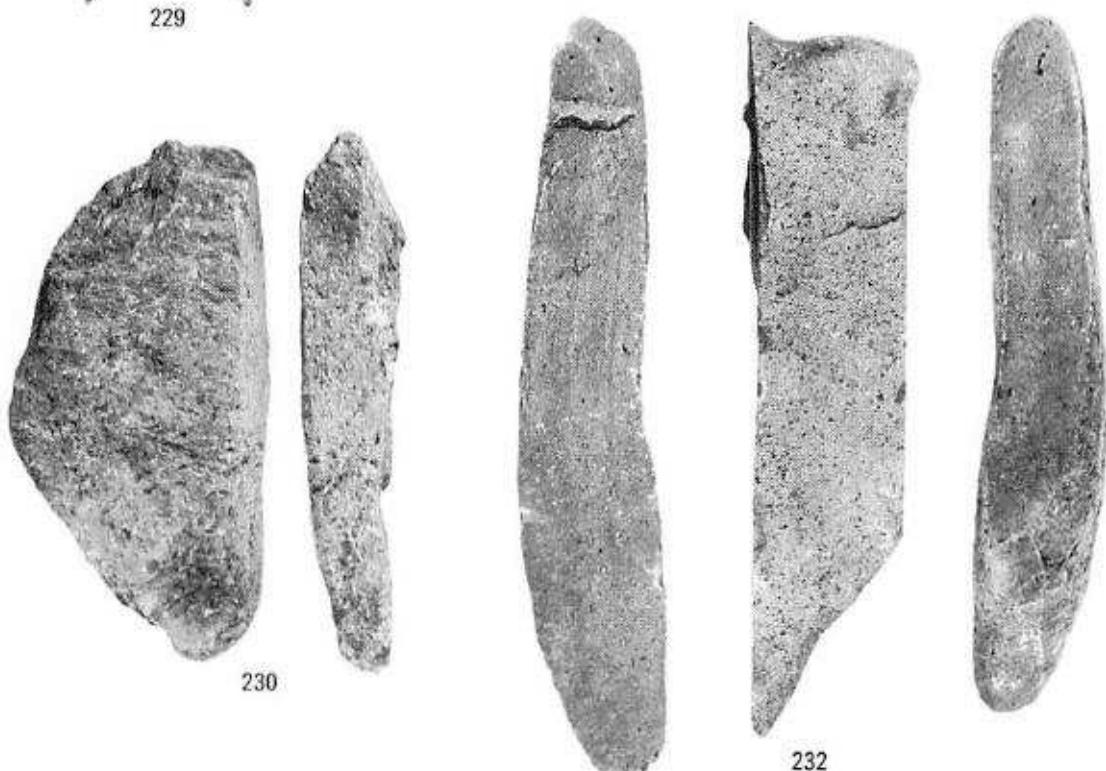
228

写真図版38 遺構外出土土器 7



229

231



230

232



233

234

235

写真図版39 遺構外出土土器 8・石器

報告書抄録

ふりがな	こまつにいせきはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	小松Ⅱ遺跡発掘調査報告書						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書						
シリーズ番号	第392集						
編著者名	鳥居達人・吉田充						
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185						
発行年月日	2002年2月28日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	
小松Ⅱ遺跡	岩手県気仙郡 住田町上有住 字小松177-1他	49	NF7-23	39° 11' 01"	141° 37' 41"	2000年 4月13日～ 6月16日	2000m ²
調査原因	住田町一般県道釜石住田線クロスロード整備事業に伴う緊急発掘						
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
小松Ⅱ遺跡	散布地	縄文時代 ～弥生時代 その他	竪穴住居跡 4棟 住居状遺構 6基 土坑 46基 柱穴状土坑 100基 焼土遺構 1基 旧河道	縄文時代早期中葉 ～弥生時代後期までの土器 天王山式土器後北 2D式	大型の岩石の下から 住居跡が確認された		

財岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所副	所長	長長	長佐	佐査	【管理課】	也儀	吾光美志	勝文介透	迪文登充郎	一一郎	進也計人彦人彦	稔文子	廣拓郎	敬昭範治	征美卓敦賢	介晋美造り	橋木藤沢	橋木藤沢	雄重子子	照光美邦	代	津紀	微歎和子子	里美麻智	
課主	課長	長長	長佐	佐査	【調査第一課】	長佐	吾光美志	勝文介透	迪文登充郎	一一郎	進也計人彦人彦	稔文子	廣拓郎	敬昭範治	征美卓敦賢	介晋美造り	橋川	橋川	與右衛門	知	太二	紀	子澄重微宏夫晃一之男彦郎郎美晴枝則)	津紀	
課	課長	長長	長佐	佐査	【調査第一課】	長佐	吾光美志	勝文介透	迪文登充郎	一一郎	進也計人彦人彦	稔文子	廣拓郎	敬昭範治	征美卓敦賢	介晋美造り	子部坂部田藤木藤	原澤沢	村澤木部	佐真一	由淳雅	靖武昭浩直正勝	勝	佐真一	里美麻智
課	課長	長長	長佐	佐査	【調査第一課】	長佐	吾光美志	勝文介透	迪文登充郎	一一郎	進也計人彦人彦	稔文子	廣拓郎	敬昭範治	征美卓敦賢	介晋美造り	金阿飯阿濱安高佐星菅半杉渝中西八(阿	木	川田田	藤野	吉北古原齋駒	木	子澄重微宏夫晃一之男彦郎郎美晴枝則)	津紀	
文化財	文化財	文化財	文化財	文化財	【調査第一課】	長佐	吾光美志	勝文介透	迪文登充郎	一一郎	進也計人彦人彦	稔文子	廣拓郎	敬昭範治	征美卓敦賢	介晋美造り	吉北古原齋駒	木	川田田	藤野	吉北古原齋駒	木	子澄重微宏夫晃一之男彦郎郎美晴枝則)	津紀	
文化	文化	文化	文化	文化	期限付調査員	也儀	吾光美志	勝文介透	迪文登充郎	一一郎	進也計人彦人彦	稔文子	廣拓郎	敬昭範治	征美卓敦賢	介晋美造り	橋木藤沢	橋木藤沢	雄重子子	照光美邦	代	津紀	微歎和子子	里美麻智	
所	所	所	所	所	期限付調査員	長長	長佐	佐査	長佐	佐査	長長	長佐	佐査	長佐	佐査	長長	長佐	佐査	長長	長佐	佐査	長長	長佐	佐査	

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第392集

小松Ⅱ遺跡発掘調査報告書

一般県道釜石住田線クロスロード整備事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成14年2月21日

発行 平成14年2月28日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185
TEL (019)638-9001

印刷 小松茂印刷所
〒020-0025 盛岡市大沢川原2丁目5-37
TEL (019) 623-6073

©(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002

